

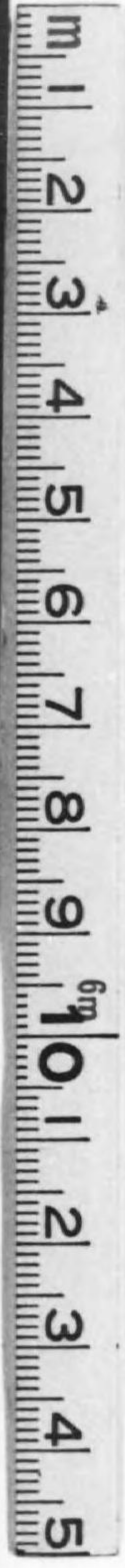
910.8-Ko45ㄅ



1200500754832

010.8
45
ㄅ

〇
複
写



始



#7-178

910.8
K045
(20)



廣島
高師
教授

鈴木敏也著

西
鶴五女評釋

東京
日本文學社



670-20

西鶴「五人女」評釋

鈴木敏也著

目次

解 説……………一

好色五人女 卷一

ひめぢに 姿姫路清十郎物語
すげがさ

一、戀は闇、夜を畫の國……………七

二、くけ帯よりあらはるゝ文……………一七

三、太鼓による獅子舞……………二六

四、状袋は宿に置いて来た馬……………	三三
五、命のうちの七百兩のかね……………	四〇

好色五人女 卷二

てんまに
た　る　情を入れし樽屋物語

一、戀に泣輪の井戸替……………	五〇
二、踊はくづれ桶夜更て化物……………	五九
三、京の水もらさぬ中忍びてあひ釘……………	六九
四、こけらは胸の焼付さら世帯……………	八〇
五、木屑の杉やうじ一寸先の命……………	八七

好色五人女 卷三

みやこに
こよみに中段に見る曆屋物語

一、姿の關守……………	九六
二、してやられた枕の夢……………	一〇七
三、人をはめたる湖……………	一一七
四、小判しらぬ休み茶屋……………	一二三
五、身のうへの立聞……………	一三一

好色五人女 卷四

江戸に
あを物戀からげし八百屋物語

一、大節季はおもひの闇……………	一四四
二、虫出し神鳴もふんどしかきたる君様……………	一五二
三、雪の夜の情宿……………	一六一
四、世に見をさめの櫻……………	一七一
五、様子あつての俄坊主……………	一八〇

好色五人女 卷五

さつまいに戀の山源五兵衛物語

- 一、連吸の笛竹息の哀や……………一九〇
- 二、もろきは命の鳥さし……………一九五
- 三、衆道は兩の手に散花……………一九九
- 四、情はあちらこちらの遠ひ……………二〇九
- 五、金銀も持あまつて迷惑……………二二二

西鶴胸算用選釋

穎原退藏著

目次

解題……………	一
序文……………	二
卷一……………	四
問屋の寛瀾女……………	五
長刀はむかしの鞆……………	一三
伊勢海老は春の袍……………	二二
鼠の文づかひ……………	三一
卷二……………	三八
銀一匁の講中……………	三九
訛言も只はきかぬ宿……………	四八

二

尤始末の異見……………五六

門柱も皆かりの世……………七〇

卷 三……………七七

都の顔見世芝居……………七九

餅はなは年の内の詠め……………八七

小判は寐姿の夢……………九五

神さへ御目遠ひ……………一〇一

卷 四……………一〇七

闇の夜のわる口……………一〇八

奈良の庭電……………一一五

亭主の入替り……………一二一

長崎の餅柱……………一二七

卷 五……………一三六

つまりての夜市……………一三七

平太郎殿……………一四六

西鶴「五人女」評釋

解 說



「五人女」正しく云へば「好色五人女」である。後には好色の二字を憚つたものか「當世女容氣」と改題してゐる。五冊物で各巻それぞれに異なつた説話を含む短篇小説集である。奥附を見ると、貞享三龍集丙寅歲仲春上旬日と日附があり、攝州書肆 北御堂前、森田庄太郎板とされる。作者井原西鶴の創作過程から云へば、この貞享三年（時に四十五歳）と云ふ年は油の乗りかゝつた頃で、夏六月には「好色二代女」を、冬十一月には「本朝二十不孝」を出してゐる。「五人女」以前を顧みれば小説の初筆たる「好色一代男」は天和二年十月の板、「好色二代男」は貞享元年、續いて同二年正月には「近代諸國ばなし」（一名「大下馬」）が出で、三年孟春と誌した「扶桑近代艶陰者」（これを西鶴の作とするに質疑を持つ人もある）が刊行されてゐる。貞享三年孟陽の「好色三代男」は西鶴の作から明確に削除したい。——かくの如く四五種の商品によつて筆ならしめると共に作家としての自覺も強くなり、かの「一代男」のやうな所謂てんがう書き（冗戯半分の享樂氣分のもとに筆を弄ぶこと）から、やゝ遠のいて、こゝに「五人女」が現はれたのである。

「五人女」以前に於ける西鶴の創作を見るに、奇談異聞を素材とする「諸國咄」などは勿論のこと、騙樂を主題とする好色本系統の作品でも、時代と密接な関係を保ちながら、また人物に多少のモデルを思はせながら、所詮は架空的な構想を中心として取扱つてゐるのであつた。然るに「五人女」になると、凡てが市井の閑書、街巷の噂話と云ふ事實をもととする説話ばかりである。お夏清十郎の話、樽屋おせんの話、おさん茂右衛門の話、お七吉三郎の話、おまん源五兵衛の話、即ちこれであるが、西鶴と同時代の淨瑠璃作家近松門左衛門や、紀海音の作品に同一題材のものが見出される程、人口に膾炙した巷談街説ばかりで、謂はゞ當代の社會相に浮ぶ艶種つやなむねである。この事實そのものゝ考證はその條項ごとに解説するつもりであるが、かゝる題材を取あげた西鶴がどの程度までそれを藝術化し得たか、當面の問題はこゝにあると思ふ。

「五人女」の文學的價值に就ては講了の後を俟つこととし、作者西鶴の略歴を叙して、直ちに本文の評釋に移りた

す。

井原西鶴の經歷は近世期に於ける多くの文藝家と同じく至つて曖昧である。これは藝術の人、特に戯作者の社會的地位を甚しく低く評價した時代の反映として洵に已むを得ない事であらう。それで僅かな資料から知り得るのは次の如き條々である。西鶴は寛永十九年大阪に生れた。若い頃にはかなり旅もしたらしいが後には大阪に住みついて館屋町に卜居した。松壽軒と號して俳諧の點者をしてゐたが職業柄として幫間ばんまめいた事もやつたと推測される生活であつ

た。貞享の頃は鶴永と號してゐたが、後西鶴と改めた。「嬉遊笑覽」の説によれば、延寶五年館林宰相綱吉の娘に鶴姫と云ふのが生れ、同八年に宰相が五代將軍となつたので元祿三年には鶴と云ふ字を遠慮する事となり、西鶴も西鶴と改めたと云ふ。この改名の件は「俳諧團袋」の序にも見えるけれど、元祿四年の俳書「石車」には西鶴の署名があるから年代に就ては疑問があると云はねばならない。

俳諧に志したのは十餘歳の頃で、明暦年間に西山宗因の門に入つたのを初めとする。當時宗因は大阪天満の向榮庵に寓してゐた。西鶴は宗因門下の俊秀として、その談林風の俳諧師の驍將として、精力絶倫な多作達吟を以て當代を壓倒したのである。たゞその弊が放埒至極と非難せられる程奔放不羈であつたがために阿蘭陀オランダ西鶴の渾名さへかち得た。彼は貞門（松永貞徳及びその門流）の俳諧に反抗して立つた當代の新派「談林」の徒ではあつたが、時代の波は再び革新の機運を生みこゝに蕉風が勃興した。彼はこの新彩を瞥見しつゝ天和二年（四十一歳）を以つて小説の方面に逸出したのである。但、彼の小説即ち浮世草子はその俳境の散文化であると共に、長く俳諧をも捨てなかつた事は注意せねばならぬ。

かくして俳書十部、小説十數部（質疑本もあるので確かな数はあげられない）を遺して、元祿六年八月十日、五十歳を一期として世を去つた。

人間五十年の究り、それさへわれには、あまりあるにましてや

浮世の月見すごしにけり末二年

とはその辭世であつた。墓は「大阪八丁目寺町誓願寺本堂西のうら手南向にあり^{三〇〇}」と馬琴の「壬戌露旅漫録」巻中に見えるが今は同寺（大阪東區上本町四丁目西側）の本堂から南の隅に當る所に、「仙崎西鶴」の四大文字を刻した墓石が落葉の中に荒れたまゝに立つてゐる。——因に墓の棹石の高二尺餘、横一尺、臺石の高八寸ばかり。左側に元祿六癸酉年八月十日、右側に丁山鶴平・北條園水の名が併記してその下に建の字が刻してある。

こゝで一言して置きたいのは、今「五人女」を採擇した理由に就てである。西鶴の數ある創作の中、その傑出したものを物色するならば、何人も好色本と町人物とに心を惹かれるであらう。町人物の代表作「日本永代藏」でも「世間胸算用」でも、まことに本講座には適切な材料である。しかし創作家西鶴の辿つた路をあとづける時、比較的晩年の町人物——（いぶし銀のやうな感觸を持つ蒼枯な作品）——を取りあげる前に、驕樂と意悦とを以て「生」を味得した好色本——（絹行燈の灯影に金屏のきら／＼するやうな花やかさと若々しさとに踊躍する作品）——に當つて見るのが一まづ順序らしく思はれる。それにしても「一代男」は餘りに大びらであり長篇でもある。その上、最近、三田村鳶魚氏や林若樹氏など斯界のお歴々によつて論議が次々と刊行されつゝある。「一代女」は「一代男」ほどでなくとも性のうごめきが深刻で、若輩のわれら風情では手を出しかねる。又「二代男」がさして優れてゐないとすれば、残るところは「五人女」である。しかもこの一篇は、必ずしも西鶴作中の第一位とは思はないが、とにかく傑作の一つと思惟するので、殊にとり出したのである。先頃「西鶴好色本全釋」の名の下に岡部美二二君が頭註と口語譯附のものを

出した。至極結構ではあるが、また自ら異なる點もあらうかと敢て筆をとる次第である。たゞ、私は掛値なしの淺學菲才、不備な點はもとより思ひもよらぬ誤解があるかも知れない。そのところは斯界の先輩學友の批正によつて漸次に完璧を期したいと思ふ。

猶、西鶴の筆癖の一つとして周知の事實、即ち如何がはしい叙述に關しては、有朋堂文庫、日本古典全集等の刊本として許認されてゐるものを参考し、その範圍内で削除するつもりである。それから假名遣や漢字の誤りも、原文通りに保存して敢て改訂を施さない態度を取つた。たゞ読み誤り易い送り假名（括弧して）と濁音とだけは誌してある。

好色五人女 卷一

ひめぢに
すげがき 姿姫路清十郎物語

目 録

- 一、戀は闇夜を畫の國
室津にかくれなき男有
- 二、くけ帯よりあらはるゝ文
姫路に都まさりの女有
- 三、太鼓に寄る獅子舞
はや業は小袖幕の中に有

西鶴「五人女」評釋

四、狀箱は宿に置いて來た男

心當の世帯大きに違ひ有

五、命のうちの七百兩のかね

世にはやり歌聞けば哀有

六

卷一

ひめぢに
すががま

姿姫路清十郎物語

一、戀は闇、夜を晝の國

春の海しづかに、寶船の浪枕、室津は賑はへる大湊なり。爰に酒造れる商人あいにんに和泉清左衛門と云ふあり。家榮えて萬に不足なし。然も男子に清十郎とて自然と生れつきて昔男をうつし繪にも増りま、其さまうるはしく、女の好きぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし、此津の遊女八十七人ありしを、何れかあはざるはなし。誓紙千束につもり、爪は手箱に餘り、切せし黒髪は大綱になはせける。是には悟氣深き女も繋がるべし。毎日の届け文一つの山をなし、紋付の送り小袖その儘に重ねすてし、三途川の姥もこれ見たらば欲を離れ、高麗橋の古手屋もねうちは成るまじ。浮世藏と戸前に書付けて詰め置きける。

【語釋】 ○戀は闇 これは俚諺。「闇」の縁で「夜」とつゞけ「夜を晝の國」はこの章の内容(後段のやうな)に即してつけたのである。

○寶船 寶船は七福神や寶運し等を舟に載せた様を描いて「長き夜のとをの眠りのみなめさめ浪のり舟の音のよきかな」と云ふ廻文歌(上からよむも下からよむも同様の歌)を添へたもの。居家必要に云「夢ニ船渡」主ニ大富貴云々、靈ニ感觀音以「義實」貨備「船歸」。實は積み重ねと云ふ義に取る。関書風俗志に云、「正月紙にて作り瘧氣を送る」と云々。今俗に船を晝き枕の下に敷き其夜夢見よければ其船をつなぐとて悦び、凶夢なれば流すとて敷ひすつる也(鹽尻第十四)惡夢を川に流す事はもと韓愈の「送窮鬼文」に見ゆる

ものの、轉化したのであると云ふ。こゝでは、船の縁語で浪枕とつけ、「春の海」をうけてゐるが、たゞ室津と云ふ地名を出さ
んがための條辭にすぎない。穏やかな初春の頃、白鷗の夢も静けき瀬戸内海の船つき「室」の淡は、出船入船も賑やかなところ
であると云ふ位の意味である。殊に室の津が遊女町で有名な水郷であることが「春の海靜かに寶船の浪枕」なる一句を生み出し
た所縁とも見られる。○室津 播磨國揖保郡にある町。古くは裡生泊と云ふ。「友誘ふ室の泊の朝風に聲を帆にあげて出づる
浦人」(新拾遺集、卷九、彌旅、大江茂重)。○昔男 伊勢物語の「昔男ありけり」から出た語で、在原業平を指す。「昔男をう
つし繪」は、昔男を寫したところのうつし繪の意で、西鶴特有の省略法である。即ち、清十郎と云ふのがあつてその名通りの清
い綺麗な生れつきで、業平の繪姿よりも立ちまさつてゐると云ふ意味である。○身をなし 身を任す。色道にとあるから耽溺
の意になる。○誓紙 起請文のこと。熊野午王の群鳥の印影ある紙を用ふ。男女が夫婦約束の契約の印として取交はすもの。
千束はたばねた数が千にもなる位で多いことを云ふ。爪を切り髪を切るは遊里の常であつた。○黒髪は大綱に 多くの女に髪
を切らせたことを云ふ。俚諺に「女の黒髪は大象をも繋ぐ」とあり。徒然草に「女の髪すぢにてよれる綱には大象も能くつな
れ」とあり、また「以ニ女人髪、爲ニ綱維、香象能繋、況丈夫輩、云々」(大威徳陀羅尼經第十九)と見えるので、後の「繋がる
べし」と云ふ語が自然にうけさられる。○送り小袖 遊女がその志を見せるために男に送る小袖である。小袖は絹の綿入。も
と大袖に對して云つた語であるが、こゝは布子(木綿着)に對して云ふ。○三途川の姥 三途川は冥途にある川で、三瀬川とも
云ふ。そこに奪衣婆と云ふ姥がゐて亡者の着衣を剥ぐ。「露頭河曲有奪衣婆、脱亡人衣」(十王經)。○高麗橋 大阪にあり。今
日その橋畔に里程元標がある。此邊り古着屋が多かつたと云ふ。○ねうち 「値打ち」で、値段をつけること。○浮世藏 遊

蕩の藏の意。當時の浮世と云ふ言葉は「憂き世」とか「浮游の世相」の意ではなく、浮世草子・浮世繪・浮世笠などの浮き世
で、即ち現代とか當世風とか云ふ現實諷刺の意味合のものである。「浮世狂ひ」として遊里に耽溺する意味の言葉もあるので、この
「浮世藏」の語には明らかに頹廢的氣分が含まれてゐる。それで遊蕩の意にとつて差支へなからう。

【評釋】 處は室の津である。家は造り酒屋である。そこに生れた一人息子として、まづ主人公を點出した。室は
輛・宮島・下關と並んで、瀬戸内海に於ける殷盛なる紅燈の巷として知られた舟泊であつた。この水郷の灯に絡む
幾多の戀のロマンスは近代文藝に咲く一つの妖艶な花である。――嘗て松岡映丘畫伯の彩筆に成つた文展の「室君」
のやうな古典的情趣にも、云ひしらぬ感興はあるが、元祿前後の文藝に現はれた室津の遊女には、より爛れた、よ
り濃艶な、色彩と感觸とが漂つてゐるやうに思ふ。――さうした港の町に生れた清十郎は業平に比べられるだけの
優男であつた。かゝる環境と素質とから立派な遊蕩兒となりすました徑路を、宛も一刷毛でなすりつける様に書き
つゞけたのがこの一節である。

八十七人と數字を擧げたのはこの作者の筆辭の一つで、「一代男や」「一代女」には常に出て來る筆法である。た
ゞ概數と見て差支へない。届け文が山の様に積まれ、送り小袖が重ねたまゝには、かしてあり、それが奪衣婆も古着
屋もあきれ返る程なので、一切を藏の中に詰めこんで浮世藏と扉に書きつけたと云ふ。これも作者が持前の誇張と
諷刺とに外ならない。

しかし讀者は、この諷刺と誇張とに深く囚へられることなく、冒頭の「春の海靜かに寶船の浪枕、室津は賑へる

大湊」と、筆拍子も軽く爽やかに書き出した紺碧の波を彩どる海郷の戀が、いかなる姿態を以て眼前に展開されるかに心を惹かれて行く。

此たはけいつの世にあがりを請べし、追付勸當帳に付てしまふべしと、見る人は是をなげきしに、やめがたきは此みち、其比はみな川といへる女郎に相馴、大かたならず命にかけて人のそしり、世の取沙汰なんともおもはず、月夜に灯燈を晝ともさせ、座敷の立具さし籠、晝のない國をしてあそぶ所に、ござかしき太鼓持をあまたあつめて、番太が拍子木蝠蝠の鳴まね、やりてに門茶を焼けて哥念佛を申し、死もせぬ久五郎がためとて尊靈の棚を祭り、揚枝もやして送り火の影、夜するほどの事をしつくして後は、世界の圖にある裸島とて、家内のこらず、女郎はいやがれど無理に帷子ぬがせて、肌の見ゆるをはぢける。中にも吉崎と云へる十五女郎、年月かくしきたりし腰骨の白なます見付て、生ながらの辨才天様と、座中拜みて興覺ける。其外氣をつくる程見ぐるしく、後は次第にしらけておかしからず。

【語釋】 ○たはけ 戯(たはけ)にて、阿呆、馬鹿と同意に用ふ。 ○あがり 終局、最後の意。あがるとは魚の死してはたらかざる貌を云ふ。遊蕩兒が財産をつかひはたして後も遊里に歩を入るゝを「あがり鮫」と云ふなど参照せよ。「いつの世に」云々は、いつになつたら此の馬鹿遊びが已むだらうの意に外ならない。 ○勸當 罪を勤へて法に當つるの義で、「大政官式」に「若致_二關意_一者、罪_レ情勸當」とある。近世では子が親から見放される場合のみを云ふ。こゝは今に(追付け)新章から勸當せられ

るだらうの意で、勸當帳と云ふ不良少年の黒表らしいものが有るのではない。尤も世間の勸當仲間に入る位の意味合はあらう。 ○月夜に灯燈を云々 灯燈は提燈の誤。「月夜に提燈をこもす」は俚諺で、無用の喩である。(毛吹草)。こゝではそれを「晝ともさせ」として一層むだな事の意を強めると共に、標題に「夜を晝の國」とある如く、晝間に夜の眞似事をした遊蕩ぶりに渡し込んだ敘述である。 ○ござかしき 踏しき、小賢しき。わるく小利口ぶる事。 ○太鼓持 幫間のこと。遊客に侍して酒興を助くる者を云ふ。「色道大鑑一」——「太鼓持と云ふは傾城買の客付き従ふものを云ふ。此名目の起りは紀州雜賀踊に始る。鉦を持ちたる者は首にかけて踊る、其中に鉦を持たぬ者は太鼓を持する也」と。即ち金を持つ大盡に従ふ者は、金を持たぬ太鼓持である。 ○番太 番太郎の略。江戸時代、市中に辻木戸を建て、自身番を設けた時、その番所の雜役に従ふ者を云つた。夜廻りの拍子木もこの男の役である。 ○遣手 「傾城に付て其の請待する揚屋へやりわたす故に遣手と云ふ(色道大鑑、一)。妓樓にて諸種の取持ち、また遊女の監視と云ふ格の女である。 ○門茶 門前で茶攝待すること。 ○歌念佛 伏鉦を叩き念佛の節にて唄ふ俗曲の一。元祿から享保にかけて行はれた。「それ念佛と云ふは萬徳圓滿の佛號なり、然るをそれに節をつけ歌ふべきやうはなけれども、末世愚鈍の者を導き、せめて耳になりさふれさすべきこの權者の方便ならむ、それを猶誤りて色々の唱歌を作り、是を鉦に合せてはやし淨瑠璃説教のせずと云ふ事なし、末世法滅の表じなり。悲しむべし嘆くべし。(八人倫訓蒙圖彙、七)。 ○尊靈の棚 聖靈棚である。このあたり盆の佛事の眞似をしたのである。 ○十五女郎 かこひとは元祿以前、京の島原、大阪の新町で、大夫・天神に次ぐ第三流の遊女を云つた。圖・鹿戀・鹿子位とも書く。圖とは大夫天神に比べると侘びてゐると云ふ意から茶席に擬らへて圖と云ふとの説。鹿戀とは其の閑かなところから深山の鹿が牡を戀ふるに比べたのであり、鹿子位とは

揚代が十六夜であつたから四四の十六で、四四はし、(鹿子)だと云ふ説。どれが當つてゐるかは知らない。而して「十五」と書くのは博奕の術語で、十五と云ふ数をかこひと云ふところから、それを揚代の十五夜にかけたものと云ふ説である。(色道大鑑・好色訓蒙圖彙・俳諧通言等)。○なまづ なまづ、歴傷。皮膚病の一種。○辨才天 正しくは辨財天で、印度傳來の女相の佛神である。智慧によつて福を資くる功德ありと云ふ。七福神の一として信仰されてゐる。この神は水邊に祀れるので、なまづを鮎と見て、そこに因縁をつけ「生きながらの辨才天様」とふざけたのである。○しらける 坐が白けるは、その席上での感興が失せること。皆々が氣まづくなつて面白味がなくなるのである。

【評釋】 蕩兒の進むべき路を具象的に描いたのがこの一節である。強い刺戟と濃い感覺とを漸層的に追求してやまない「歡樂の鬼」は常軌を逸するに至つて、猶拵舞する。清十郎が晝を夜にしての陀々羅遊びは自然の徑路を猪突したのにすぎない。聖靈祭りと云ふやうな縁起でもないふざけ振りは遂に裸形國と云ふ官能の世界にまで押し移つて來た。

死人の眞似する久五郎とは帮間の名か、或は清十郎のためには苦手に當る家の手代の名か(その席にゐない男であるが面當てのために)考へると不明になるが、まづは前者に屬するであらう。拍子木叩く番太郎の所作する男も、蝙蝠の鳴くまねする者も、歌念佛唄ふ連中も、さてはいや／＼ながら帷子脱ぎすつる女共も、すべては金がせしめる喜劇の一齣にすぎないのである。而して年頃隠して來たなまづを、計らずも發見された一挿話は、哄笑の種類ではあらうけれど、少し冷靜に眺めかへせば、誠に興ざめの限りにちがひない。後は白けておかしからずとは、も

つともの次第である。たゞこの一節には作者一流の大びらな、のふうぞうの態度が見られる。そこに顧慮や逡巡から解放された自由闊達の氣分が漲つてゐる。

語句に就て一二附言する。「肌の見ゆるを恥ぢける」の主格は勿論女どもであるから、上の「脱がせて」を「脱がせければ」とするか、下を肌見らるゝを恥ぢさせける」とでもしなければなるまい。即ち文脈の振れてゐる一例がこゝに見られる。又「座中拜みて興覺めける」も意味を成さぬ語句である。このあたりは「これは生辨天様だと、ふざけて一座の者が拜んだが、冗戯が過ぎては興も覺めて來た」の意であるが、どうかすると「座中拜みければ吉崎は興覺ましける」の意にもとられる。しかしさう取つてはならない。

かゝる時清十郎親仁腹立かさなり、此宿にたづね入、思ひもよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、是で焼とまります程にゆるし給へと、さま／＼説ても聞ず、兎角はすぐにいづかたへもお暇申で、さらばとてかへられける。みな川を始女郎泣出してわけもなふなりける。太鼓持の中に闇の夜の治介と云ふもの少もおどろかず、男は裸百貫たとへてらしても世はわたる、清十郎様せき給ふなといふ、此中にもおかしく、是を肴にして又酒を呑かけ、せめてはうきをわすれける。はや揚屋にはげんを見せて手扣ても返事せず、吸物の出時淋しく、茶のともいへば兩の手に天目二つ、かへりさまに油火の灯心をへしてゆく、女郎それ／＼に呼たつる。さてもさても替は色宿のならひ、人の情は一步小判あるうちなり。みな川が身にしてはかなしく、ひとり跡に残り、

涙に沈みければ清十郎も口惜きとはかり言葉も命はずるにきはめしが、此女と同じ道にといふべき事をかなしく、とやかに物思ふうちに、みな川色を見すまし、かた様は身を捨給はん御氣色、去迎はくおろかなり、我身事ともにと申たき事なれ共、いかにしても世に名残あり、勤はそれ〴〵に替心なれば、何事も昔々是迄と立行く、さりとはおもはく遠ひ、清十郎も我を折て。いかに傾城なればとて今迄のよしみを捨、淺ましき心底、かろは有まじき事ぞと、涙をこぼし立出る所へ、みな川白装束してかけ込、清十郎にしがみつき、死すにいづくへ行給ふぞ、さあ〴〵今じやと剃刀一對出しける。清十郎又さしあたり是はと悦ぶ時、皆々出合兩方へ引わけ、皆川は親かたの許へ連かへれば、清十郎は人々取まきて内くの御説言の種にもと、且那寺の永興院へおくりとゞける。其年は十九、出家の望哀にこそ。

【語釋】

○荷をのける 暗喩の事でどうする事もできないさま。火事に喩へたのである。○焼けとまる 前をうけた語で、馬鹿遊びもこれで止めにするの意。金錢を浪費するさまが火事で焼け失すると同然なるに據れるものか。○男は裸百貫 俚諺。○てらして てらしての誤記であらう。てらしては禪のことで、即ちふんざし一つで世間を渡るの意である。前の「裸百貫」後の「此中にもおかしく」の言葉に照應しても、てらでなくては納るまい。○せき給ふな せくは忙く・急ぐである。即ち泡くつて無分別を起してはならないの意。○うきを忘る 酒は愁を拂ふ玉筍と云ふ。「應呼三釣詩釣亦號三掃愁帚」(東波の「飲酒の詩」)。○揚屋 遊女を招きて遊ぶ所。水茶屋。遊里にある茶屋はみな揚屋と云ふ。「物類稱呼」。○げんを見せて 「げん」

は験である。功德・効能。こゝは親父が見放した効能が既にあらはれたと云ふのである。○天目 万ん茶碗の略。元來、淺くて開いた鐘鉢形の抹茶々碗の事であるが、後には茶碗の總稱となつた。○一歩小判 一分判金の事であらう。江戸時代一兩の四分の一に當る判金。こゝでは單に金と云ふだけの意。○勤 賣笑の稼業を云ふ。「勤の身」うき川竹の勤」なども云ふ。○我を折る 閉口すること。見えも外聞もなくへこたれるさま。○傾城 遊女に同じ。もとは美人の稱である。李延年歌曰「北方有佳人、絕世而獨立、一顧傾人國」(漢書外戚傳)。○今じや 今ぢや。○親方 抱主のこと。「堪くはどこしも親方の習」(天の細島)。○丹那寺 わが家の歸依する寺。菩提寺に同じ。丹那(檀那)は梵語。財物を施與する信者を僧より呼ぶ言葉である。

【評釋】 この節の當初の部分は特殊の表現法であるから、説きほぐして見よう。「そこへ清十郎の父親が、これまで怵え〴〵てゐたのであつたが堪忍袋の緒を切らして遂にこの家を尋ねあてて飛込んで來た。清十郎にとつては意外な突發事件でまさか親仁が怒鳴り込まうとは思つてゐない。火のある所へ俄風が吹き襲つたと同様に、隠れるの其場を繕ふのと云ふ隙もない。どうする事も出来ないで平あやまりにあやまる外に手段なく、これでもう遊びは致しませんからと、いろ〴〵詫びたけれど、親仁はこれまで重ね〴〵だまされてゐるので、いつかな聞入れない。詫にも辯解にも耳をかさず、直接揚屋の亭主にも花車にも、女たちにも幫間にも、向後、清十郎に關しては一切責任を負ひませぬ、もう何事も私は預り知りませぬ、それではこれで御免蒙ると、口早に云つてのけて、さつさと歸つて了つた。そこで皆川を初め女どもが泣き出して宴席はからだいなしになつた」と云ふのである。恰度、「とか

くはすぐに何方へもお暇申して」の一句が分りにくい文辭になつてゐるが、以上の如くに解したい。而して「腹立重なり」以下の叙述はいかにも引締つた筆觸である。短い詞章のうちにかなり複雑な情景を匂はせ諸の人物の風姿を言外に躍動させてゐる。殊に闇の夜の治助と云ふ太鼓持の言草が振つてゐる。闇の夜と云ふ渾名は闇夜に鐵砲で向ふ見すの意か、「清十郎様せき給ふな」はいやにおちついて幫間根性をさらけ出したものである。また、「はや揚屋にはげんを見せて」以下は現金な水商賣の姿態を寫して辛辣を極めてゐる。いくら何でも餘りてき、面すぎると思はるゝふしも無いではないが、さりとして輕佻浮華な氣分の瀾漫する特殊郷の事として、これに近い目堵の事實も作者の眼には映つてゐたのであらう。「兩の手に天目二つ、歸りさまに油火の灯心をへしてゆく」の一句には點出された人物の態度さへ眼前に浮彫にされてゐるやうである。思ひなしか、その冷やかな笑をふくむ目元口元すら躍如として胸に迫るのである。而して「人の情は一步小判のあるうちなり」とは此の世界に於ける不磨の箴言であらう。

さて、「皆川の身にしては悲しく」以下の一節を見るに、清十郎はさすがにお坊つちやんらしく現はされてゐる。親仁には見放され、揚屋には掌をかへすやうに冷遇される。そこで、とりのぼせて死なうと思ふ。しかも命をかけた皆川の愛想づかしめいた言葉にぶつかつて、ふら／＼となつて了ひ、ぼんやりと出て行かうとする。「此女の同じ道にと云ふべき事悲しく」と自己よりも、まづ戀女の心持を掛念する、うら若さと甘さ。これは痛切な實際問題に直面した時、漫然と「死」を思念しながらも、それが單なる因襲的概念に止まり、深い内省に振返るだけの精神的修練に缺けた青年の常として、十分に肯定される。これに反して皆川には流石に手管があつた。二三歳年上らしい

氣もするが、彼女には清十郎の様子を観察するだけの餘裕があつた。しかもこの場合、女の方のなづみ方が深いだけ、よけいにその風情が躍動して見える。「色を見すまし」の平靜をよそはふ態度。「しがみつきの」狂亂せる姿態。一は靜、一は動。様相こそ變れ、皮一重の奥に燃ゆる情炎の亂舞に至つては同一である。このあたりに於ける西鶴の敘述は、たとへ十分でない憾みはあつても、皆川の風格にこれだけの情熱を揣摩させるだけの筆觸を感じさせるのである。次章の冒頭を見るに及んでも、何等不自然の思ひを惹き起さないだけの用意は、こゝに介在すると云はねばなるまい。

第一章を通覽するに、清十郎の前半生を寫したものは相違ないが、その素材はありふれた蕩兒の一面であり、狹斜情調の一瞥にすぎない。西鶴にして見れば、既に「一代男」「二代男」で幾度か繰返した當代時勢粧の片影である。たゞ其等の作品で、背景過重とも觀らるゝ風俗描寫が、こゝでは餘程その色彩を稀薄にしてゐる。この點に却つて風情ある味が感得される。要するにこの章は第二章へ多少の交渉があると云ふ以外、全篇に對しては相關的に重要な内容は持つてゐないのである。

二、くけ帯よりあらはるゝ文

やれ今の事じやは、外科ゆくは氣付よと立さはぐ程に、何事ぞといへば、皆川ちがいと皆々なげきぬ。まだどう

ぞといふうちに、脈があがるとや。さても是非なき世や、十日あまりも此事をかくせば、清十郎死とおくれつ
れなき人の命、母人の申こされし一言におしからぬ身をながらへ、水みづ興おこ院いんをしのび出で、同國姫路ひめぢによしみあれ
ばひそかに立のき、爰にたづねゆきしに、むかしを思ひ出であしくはあたらず、日數ふりけるうちに但馬屋九
右衛門といへるかたに、見世をまかする手代をたづねられしに、後々はよろしき事にもと頼たのにせし宿しゆくのきもい
られて、はじめて奉公の身とは成ける。人たるものゝそだちいやしからず、こゝろさしやさしくすぐれてかし
こく、人の氣に入べき風俗なり。殊に女の好する男ぶり、いつとなく身を捨て、戀にあきはて、明あくれ律りつ義ぎかま
へ勤つとめるほどに、亭主も萬事をまかせ、金銀のたまるをうれしく、清十郎をすへく頼たのにせしに、九右衛門妹
におなつといへる有ける。其年十六迄男の色好このて、いまに定る縁えんもなし。されば此女田舎にはいかにして、都
にも素人女しやくじんには見たる事なし。此まへ島原に上羽あかばの蝶てつを紋所もんじよに付し太夫有しが、それに見増程成美形みづかと、京の
人の語ける。ひとついふ迄もなし、是になぞらへて思ふべし、情なさけの程もさぞ有へし。

【語釋】 ○脈があがる 死ぬ事。

○よしみ 親しき交り(また、人)。因縁ある人。

○きもいる (肝煎)。世話する、周旋す

る。「宿の」は宿の主人。寄寓してゐる家の主人である。

○身を捨て 身を捨て、働くの意。身なりかまはず働くのである。

○島原 京都西新屋敷の遊廓を云ふ。「色道大鑑、十二」に「寛永十八年又六條より今の新屋敷に遷さる、此時より此處を島原と
も云ふ。或云、肥後國島原陣落去の砌として郭の構、一郭一門にして四方掻揚の如なるが、有馬の城に似たりとてかく云ひしと

聞けど是はおぼろげのたとへとや申すべからん」とあり、更に二三の説をあげてゐる。

○太夫 遊女の最上位を云ふ。「洞房

語聞」によれば「太夫。これ藝の上の名なり。慶長年中まで遊女ども亂舞仕舞を習ひ、一年に二三度づゝ、四條河原に芝居を構

へ、能大夫舞太夫、皆傾城ども勤めし也。尤も大人歴々の御方も御見物あり、種々の餘情花麗なる事ども多かりしとなり。さる

により、今日の太夫は誰家の何と云ふ太夫が勤めるなど云ひしより、自ら遊女どもの總名となりけるよし」とあるが、これが正

しいと思ふ。「吉野傳」には「傾城の上首を太夫と云へるは元和の頃よりの稱なり」とあつて年代も前説と略同様である。かの秦

の始皇が封松の故事に因んで太夫を松の位と云ひしたのは今少し後の事らしい。○美形 婦女の容色秀れしもの。後の美

人、明治の小説家でも元祿復興の氣運ありし頃の紅葉や一葉の作品にもこの言葉を見る。○情の程云々 姿がそれだけ嬌麗で

ある以上は、その女の心意氣・情味もさぞかし深いだらうの意。

【評釋】 冒頭の一節は前章の後日談——時間的には直ちに持續してゐるが——で、皆川の深情けを敘すると共に、

清十郎の姫路に来る素因を語るものである。しかし後段への説話展開の契機としては彼女をして自害せしめるのは

無用と思ふ。皆川なる一人物は決してこの作で重要な地位を占めてゐるのではなく、作者は一篇の構想上單に清十

郎が半生の遊蕩生活を提撕すれば足るのであるから、この場合の自殺は事件の切實な割合に無力になつてゐる。

次に奉公の徑路と主家の娘の艶色とを示し、心を入れかへた清十郎の眞摯な態度に照應して、自墮落さうな色娘

を以てしたのは、男の前半生があるだけに、事あり顔な脚色をほめかしてゐる。かくして説話そのものは次第に

緊張されて行く。

表現上の手法に就て一二を云へば、「やれ今の事ぢや」云々は起し得て妙と云はねばなるまい。人々の立騒ぐ氣分も汲みとられよう。但、「脈が上るとや」は「脈が上りしとかや」であり、「清十郎死に後れてつれなき人の命母人の申越されし一言に」は「清十郎は死に後れしが、つれなきは人の命と母人の申越されし一言に」とあるべきものと思ふ。こゝの所を「生き長らへるのも、つれなき我が命なれど」の意と解した人もあるけれど、私は上のやうに釋きたい。言を添へて云へば彼は機會を失つて死に後れたが、母親から、どうせ人間の命は果敢ないもの、諦めが大事と、云つて來た一言によつて惜しいとも思はぬ命をそのまゝして永興院を忍び出たのである。

又、「此女田舎にはいかにして」は「此女程の者田舎にはいかでかあるべき」と云ふところであらう。上羽の蝶の紋所をつけた島原の太夫は實際モデルがあつた事と思はれ、紋所から推して時代をきめてかゝれば案外、その名が分明するかと思ふが、その邊はまだ未考に屬する。

有時清十郎龍門の不斷帯、中巾のかめといへる女にたのみて、此幅の廣をうたてし、よき程にくけなをしてと頼しに、そこ〜にほどきければ、昔の文名残ありて取亂し讀つゝけるに、紙數十四五枚有しに、當名皆清さまと有てうら書は違ひて、花鳥うきふね小太夫明石卯の葉筑前千壽長劔市之丞こよし松山小左衛門出羽みよし、みな〜室君の名ぞかし、いづれを見ても皆女郎のかたよりふかくなづみて、氣をはこび命をとられ、勤のつやらしき事はなくて、誠をこめし筆のあゆみ、是なれば傾城とてもにくからぬものぞかし。又此男の身

にしては浮世ぐるひせし甲斐こそあれ、さて内證にしこなしのよき事もありや、女のおまねくおもひつくこそゆかしけれと、いつとなくおなつ清十郎に思ひつき、それより明暮心をつくし、魂身のうちをはなれ、清十郎が懐に入れて我は現物が物いふごとく、春の花も闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙も白くは見えず、夕されの時鳥も耳に入らず、盆も正月もわきまへず、後は我を覺ずして耻は目よりあらはれ、いたづらは言葉にしれ、世になき事にもあらねば、此首尾何とぞと、つき〜の女も哀れにいたましく思ふうちにも、銘々に清十郎を戀詫、お物師は針にて血をしほり心の程を書遣しける。

【語釋】 ○有時 ある時。 ○龍門の不斷帯 龍門は龍紋に同じ。白色の絹織物で織目が斜に高く地質厚きもの。不斷帯は常用でよそ行(上品品)に對する語。 ○うたてし 憂いつらい。即ち嫌だの意。幅の廣いのが氣に入らぬのである。 ○そこ〜に手早くするさま。 ○名残ありて 残つてゐたの意。「取亂し」は幾通の圖書を亂し散らけて見るさまにも解せられるし、又讀み人が心をわく〜させて妙に上氣したやうになつてゐる意にも解せられる。おそらく兩様に掛けた言葉であらう。 ○氣を運び命をとられ。情に溺れるさま。俗に血道をあげると云ふやうである。 ○闇らしき 浮つはい事。 ○浮世狂 遊蕩の意。(浮世蔵の條参照)。 ○内證 この語は元來、經濟上に用ひられ、懷勸定の狀態をあらはすのであるが、こゝは、「金遣ひのさつぱりした」と云ふ意味では、むしろなくして「表面にあらはれぬ所作・素質」の意であらう。 ○しこなし 様子、ふるまい。 ○春の花も云々 「闇となし」は花を見るべき春の晝も一間にとちこもつてゐるうちに徒らに夜となつて了ひ、「晝となし」は、

秋の月見の夜もそのままに過して空しく明けて了ふの意であらう。凡てこゝは人の心を惹くべき雪月花の眺めも一切目に入らず、ひたすら戀に憫む風情を寫したのである。

○夕され 夕さり、夕暮に同じ。

○盆 孟蘭盆の略梵語。倒懸を解くの義。

種々の飲食を盆に供へ、佛及び死者の靈を祀り、冥途の苦患を救はんとすること。魂祭り。「七月十五日謂之中元、爲荷葉餅、土塵

互相拜賀、略如三歲朝、俗自二十四日至二十六日、具麵餌百味、以荷葉、貯瓜果、祀先靈、喫僧尼、展掃墳墓、謂之孟蘭

盆、因以中元、爲盆節、遂有盆前盆後稱、藝苑日涉七。 ○お物師 裁縫専門で奉公せる女。

【評釋】 文章はきれてゐるが内容はこゝで段落にすべきではない。召使の動作をこれから列擧しようとする所であつて後まで續いてゐるが、長くなるので句切をつけたまでである。本来、お夏の叙述で一旦文を結び、更にお物師以下の痴態は改めて筆にすべきである。西鶴が章句の斷續に殆んど無關心らしい態度を把つてゐる一例はこゝにも見られる。

お夏は女にせ、男の色好もなし

文殺から「これなれば傾城とても悪くからぬもの」と思込み、多くの女を惱殺したからは「内證にしこなしのよき事も」と感ずるお夏は、良家の處女としては餘りに浮華であり輕佻である。「男の色好んで今に定まる縁もない」所謂人形喰ひの面影を見せる娘で、いかにも爛れきつた情緒の持主である。これはお夏自身の個性らしく見せかけてはあるが、太平に化育された元祿前後に於ける社會相の一面ではあるまいか。感情生活の上に、かなり奔放であり自由であつた當代の風潮が、女性心理に影響して、頽廢の色彩に浸染した一群の「女」を生み出したと見たいのである。このお夏でも、後に云ふおさんでも、お七でも、又、近松に現はれた「波の鼓」のお種でも、「重帷子」の

お才でも、同じやうな思想傾向に左右せられてゐる。「元祿女性の遊女化」は即ちこれであるが、この點は講了の時、總括として更に觸れることとして、こゝにはこれだけに止める。

猶、「春の花を闇になし」以後の一聯の章は、俳諧風の表現を思惟させるが、散文としては簡潔にすぎはしないか。それから室君の名をづらりと並べ立てたのには恐れを抱くが、大事な皆川の名の見えないのはどうしたものか。或は鶴翁千慮の一失かもしれない。とかく微笑を禁じ得ない底の事項である。遡つて此節の初めの方に「かめと云へる女に頼みて……直してと頼みしに」は、いくらお龜さんへの頼みでも御丁寧すぎる。

中居は人頼みして男の手にて文を調へ袂になげ込、腰元ははこばでも苦しからざりき茶を見世にはこび、抱姥は若子さまに事よせて近寄、お子を清十郎にいだかせ膝へ小使しかけさせ、こなたも追付あやかり給へ、私もうつくしき子を産でからお家へ姥に出来ました、其男は役に立ずにて今は肥後の熊本に行て奉公せしとや、世帯やぶる時分暇の狀は取てをく、男なしじやに、本におれは生付こそ横ぶとれ、口ちいさく髪も少しはぢみしにと、したゝるき獨言いふこそおかしけれ。下女は又それゝに金じやくし片手に目黒のせんば煮を盛時、骨かしらをゑりて清十郎にと氣をつくるもうたてし。あなたこなたの心入、清十郎身にしては嬉しかなしく、内かたの勤は外になりて、諸分の返事に隙なく、後には是もうたてくと夢に目を明風情なるに、なをおなつ便を求てかすゝのかよはせ文、清十郎ももやくとなりて、御心にはしたがひながら、人めせはしき宿なれば

うまひ事は成がたく、しんいを互に燃し、兩方戀にせめられ、次第やせにあたら姿の替り行く月日のうちこそ是非もなく、やうく聲を聞あひけるをたのしみに、命は物種、此戀草のいづぞはなびきあへる事もと、心の通ひちに兄姉の關を居へ、毎夜の事を油断なく、中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、神鳴よりはおそろし。

【語釋】 ○仲居 仲働の女。 ○世帯破る時分 破産して夫婦別れた時の意。 ○暇の状は取てをく 離縁状は取つておいたの意。こゝは「夫婦別れする時には離縁状を取つて置くから」の意味にも取れるけれど、前述の如く過去の敘述と見たい。 ○男なしぢやに 夫は持つて居ないから。「獨身だからさ」と云ふ語氣。 ○舌たるき 甘つたるい嬌語。 ○せんば煮 鹽物の肴を煎物にしたもの。 ○骨頭を五りて 「五りて」は「えりて」擇る。 ○内かたの勤 商賣上の仕事。 ○諸分 いろ／＼の取り捌き。こゝは諸方への鬻書の返事である。(参考)「わけをたつる。——當道にて他の批判にあづからぬやうにする事也、たとへば女郎の身にしてさし合などきらびやかにくるか、買手ならば買ふやうにむさけなく買ふか、やるべき時分にまぎらはさず縁をつかはすか、あげ屋などもくもりたる事なく欲を離れて客をかけひくなどの類なり」(色道大鏡、一)。 ○夢に目を明く風情 夢心地に同じ。呆然たる状態。 ○もやく 涼々。むらくと情熱の起るさま。 ○しんい 眞意。(十惡の一)。怒り憤る。但、こゝでは煩惱の炎と云ふに同じく無情に燃ゆるを云ふ。 ○命は物種 (但諺)、命あつての物種、何事も命があつての上の事。「命が物種ぢや、急いで落ちさせませ」(狂言「武悪」)。 ○關を居へ 「關を据え」である。兄姉の用心するを驗ふ。 ○

めしあはせ 引合せの戸で、こゝのは車戸になつてゐるらしい。

【評釋】 前段のお物師から此段に於ける中働腰元乳母下女、それ／＼の痴態は相應な道具立によつて取扱はれてゐる。殊に乳母の人を喰つたやうな押の強い云ひ分と、下女のそれらしい仕科には一脈の滑稽味が流れてゐる。半ば遊戯的な筆致を否定する事はできないが、多少の諷刺は認められる。最後の兄嫁は直接姿を出してゐないけれど、利かぬ氣の神經質な世話女房の風手が髣髴される。而して主人公の戀の昂揚は「次第瘦せにあたら姿の替りゆく」で十分に窺知されるやうである。但、前段と照應すれば、お夏に於ては特にこの風情は濃く反映するが、清十郎にはむしろ當らない感が深々。

語句には例の體をなさないものが一二、目に當るやうである。例へば「苦しからざりき茶」は「苦しからざる茶」とあるべきもの、「聞きあひけるを樂みに」は「聞きあふを樂みに」であり、又「なびき合へる事も云々」は「なびき合ふ事もあらんと思ふ心の通路に」とつゞくべきところである。破格の文章も面白い點があるが、僅かな注意によれば、文情を損ぜずして正格に訂し得るものまで放膽に委した事は、西鶴のために惜しむべき事と思ふ。

翻つて、この第二章を見るに、遊蕩によつて人生の一角を知つた清十郎と、世間知らずではあるが環境と素質とによつて頹廢的傾向あるお夏とが、何の異常味もない徑路の下に育まれてゆく戀の序曲にすぎない。而して作者得意の個所は云ふまでもなく、清十郎を中心として但馬屋の女達の間で捲き起された情炎の渦巻であらう。

三、太鼓による獅子舞

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行くは今の世の人心なり。兎角女は化物、姫路の於佐賀部狐もかへつて眉毛よまるべし。但馬屋の一家春の野あそびとて、女中駕籠つらせて、跡より清十郎萬の見集に遣しける。高砂曾根の松も若縁立て、砂濱の氣色又右まじき詠ぞかし。里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ、松露の春子を取など、すみれつばなをぬきしや、それめづらしく、我もとりくの若草すこしうすかりき所に、花莖毛氈しかせて、海原靜に夕日紅、人々の袖をあらそひ、外の花見衆も藤山吹はなんともおもはず、是なる小袖幕の内ゆかしく、眼をくれて歸らん事を忘れ、樽の口を明て酔は人間のたのしみ、萬事なげやりて此女中をけふの肴とてたんとうれしがりぬ。こなたには女酒盛、男とては清十郎ばかり、下々天目呑に思ひ出申て、夢を胡蝶にまけず、廣野を我物にして息杖ながくたのしみ、前後もしらず有ける。

【語釋】 ○尾上 峯のこと。山の尾の上である。但、こゝは播磨加古川の東岸にある名所でもある。 ○ひけらかし 見せびらかすに同じ。「ふけらかす」とも云ふ。人をして羨しがらせるの意味が働いてゐる。こゝの所は「母も惚れ手の數に入り」の格である。 ○於佐賀部狐 姫路城中に祭られてゐると云ふ妖怪である。「甲子夜話」(續篇、八〇)に「扱天守は下より上まで五層に

て下の段の廣き間傳へは千疊鋪と云ひ候、(中略)上層は五間方も候はんが、長壁の宮は此所に候、當所にては長壁大明神と稱す。宮は赤く塗り金もの打ち、圍には幕を垂れてあり。處の長源寺眞言宗、此神のこと承り、日々占の刻に供物をそなへ候、素木の三方膳に土器を置き、一つには小豆飯一つには油揚げ豆腐を盛ると間傳へ候。供物明朝には皆失せさりて無く神の食ひたまふと申候云々」と見える。又「おさかへ狐の赤手拭」といふ俚言もある。西鶴の「天下馬」には「年久しく播磨の姫路に住み馴れて、その身は人間の如く八百八疋の巻風を従ひ、世間の眉毛を思ふまゝによみて、人をなぶる事自由なり」と書いてある。 ○眉毛よまる だまされる。よむは勘算すること。 ○見集め 取締、監督の意。 ○高砂 加古川の河口にあり。高砂の松は歌名所。 ○曾根 印南郡にあり。松は天神社内にある。 ○さらへ 熊手。落松葉を掻きよせる道具。 ○春子 春季に出来たもの。 ○小袖幕 花見の時、小袖を脱ぎ、引き張つたる綱に掛けつらねて幕のやうにしたもの。 ○たん と 澤山。大いこの意。 ○下々 駕籠舁、下男どもを云ふ。 ○天目呑 天目から飲む。い、呑みである。 ○思出申す これを思出でにすると云ふので、大いにメートルをあげることであらう。 ○夢を胡蝶にまけず云々 莊周夢に胡蝶に化るの故事を思合せたのである。即ち莊子の胡蝶もどきに、この廣い野原はおれの庭ださか何とか、上機嫌になつてゐる體を敍したのである。○息杖ながく 息杖は駕籠舁の持つ杖。その長いのを長く樂しむさ下に掛けたので、すつかり腰をおろして大きい氣になり、べろ／＼になつて飲んでゐる状態である。

【評釋】 第三章は説話の絶頂に當るが、前半のこの一節はその序曲たる花見の光景である。時は春、人も春櫻は咲いて蝶鳥は舞ひ囀る。「神空を知らしめず、すべて世は事もなし」と「ヒバの歌」の詩人な

ら歌ふところであるが、わが元祿時代の詞宗は、より現実的であり、より世俗的であつた。彼の寫すところは自然の背景に萬遍なく人間のほひが浸みこんでゐた――。

久しぶりで郊外に出た女たちが、落葉に埋づもれた松露をころ／＼と掘りだしたり、蕁や茅花の春草を摘んだりする風姿は鮮やかに映つて来る。きやつ／＼と笑ひさゞめきながらはしやくさまも髣髴される。それが小袖幕を張つて、女だてらに酒事を始める。寛濶にして華美な世相の斷片が的確に繰り展げられたと云はねばならぬ。だからこそ、花は見ずして見られに行く彼等の自負矜持も看取せられるのである。容色を鼻にかけてつんとすました女。妖艶な厚化粧に媚を湛へてしやなり／＼と漫歩する女。こんな女は元祿の昔と昭和の今と何等の逕庭はない。「今の世の人心」は「女」の本質が改造せられぬ限り、いつの時代にも適應する。「殊に色ある娘は母の親ひけらかして」はいかにもうまい。語釋にも記したやうに、娘にとつて第一の惚手は母親である。着飾らした娘の後から嬉しさうに眺め／＼行く母は、街頭小景の一として永久の好世相畫であらう。享保期の小説家江島其蹟はその「世間娘氣質」の「侍の娘」の條で、この一節の冒頭を、二三字改竄したのみでそのまま流用してゐる。

さて、但馬屋の女連中が、かう云ふ環境に育ち、かう云ふ風尚の中に生活する女性たるは云ふまでもない。それを「けふの看」として眺める花見の男どものあるは、言葉こそ少し猛烈すぎるが、心持はそつくりその儘であらう。元祿町人（こゝは主として町人階級であらうと思ふ）の女性觀と、現代の民衆のそれには甚しい距離はあるまい。女と見れば何はともあれ、その容色姿態の如何と云ふ點にのみ眩惑を感じるのが俗衆の常である。「覗きおくれて歸らん事を忘れた」のは決して誇張ではない。

小袖幕の中のさゝごと。これを看にしていゝ氣な凡俗仲間。すつかり頂戴して酩酊仕つた駕籠屋の連中。この三つのグループが、折からの春の夕暮に砂白く松青き高砂の汀浦を背景として展開してゐる。遠のいて眺むれば極彩色の一幅の繪畫、近づいて見れば類唐の色に染む市井の俗圖。作者西鶴はその後者に屬するものを、印象的筆致を以て克明に描き出したのであつた。

語義の一二。「跡より清十郎萬の見集めに遣はしける」は「清十郎を萬の見集めとして云々」とある筈のところ。「蕁茅花をぬきしや」のや、は感動詞であらうが、「ぬくなど」として下につゞくべきであらう。即ち「松露の春子探り蕁茅花ぬくなど」である。

「我もとり／＼の若草少し薄かりき所」の「とり／＼」は我と若草の双方にかゝる言葉。「薄かりき所」は例の筆癖で「薄き所」である。而して、「毛氈敷かせて」以下は、「毛氈敷かせるに（折柄）海原靜かに夕日紅にして、人々の袖とその美を競ひければ」と普通ならば叙するのであらうが、文趣は原文の方が異常なる詩味を盛りあげてゐる。

其折から人むら立て、曲太鼓大神樂のきたり、おの／＼のあそび所を見掛、獅子がしらの身ぶり、扱も／＼仕くみて皆々立こぞりて、女は物見だけくて只何事をもわすれ、ひたもの所望／＼とやむ事をおしみけり。此獅子舞もひとつ所をさらす、美曲の有程はつくしける。おなつは見ずして獨幕に残りて虫歯のいたむなどすこ

しなやむ風情に、袖枕取亂して帯はしやらほどけを其まゝに、あまたのぬき替小袖をつみかさねたる物陰に、うつゝなき空齋心にくし。かゝる時はや業の首尾もがなと氣のつく事、町女房はまたあるまじき粹さま也。清十郎おなつばかり残りおはしけるにこゝろを付、松むら／＼としげき後道よりまはりければ、おなつまねきて、——(二十四字略)——胸ばかりおどらして、幕の人見より目をはなさず、兄娘こはく跡のかたへは心もつかず、起さまにみれば、柴人壹荷をおろして鎌を握しめ、——(四字略)——あれはといふやうなる貌つきして、こゝちよげに見て居ともしらず、誠にかしらかくしてや尻とかや。此獅子舞、清十郎幕の中より出しをみて、かんじんのおもしろひ半にてやめけるを、見物興覺て残り多き事、山々に霞ふかく、夕日かたぶけば萬を仕舞て姫路にかへる。おもひなしかはやおなつ——(十字略)——なりぬ。清十郎跡にさがりて獅子舞の役人に、けふはお影／＼といへるを聞ば、此大神樂は作り物にして手くだの爲に出しけるとは、かしこき神もしらせ給ふまじ、ましてやはしり智慧なる兄娘などが何としてしるべし。

【語釋】 ○曲太鼓 太鼓の曲打をする囃物。 ○大神樂 獅子舞、品玉などする曲藝の一。『人倫訓蒙圖彙、七』に舞手の乙女もなく、たゞ鼓太鼓ことやうに叩きたて、太鼓打つ面つき狂人のやうなるを見て嬉しがる。しかのみならず、獅子が立ちて扇の手をつかひ、一の谷節で舞ふ。最も珍らしき事ども也」とある。『嬉遊笑覽』によれば「思ふに寛文延寶頃より始まりしことゝ見えたり」とある。又『守貞漫稿』の第六編雜業の部には英一蝶の繪が掲げてある。 ○物見だけく 「物見長く」である。好奇心に富むを云ふ。 ○ひたもの ひたすらに同じ。 ○美曲 おもしろい興味ある曲目。 ○しやらほどけ いやらは洒落で、それから婀娜めくの意を生じた。だらしくなく、解けさうになつてゐるさま。 ○ぬき替 着替に同じ。 ○心にくし こゝでは「奥ゆかし」の意味は勿論ない。心引かれる強さはあるが、むしろ小僧い程の魅惑的な氣分を持つてゐる意味合がある。その心持を表現した言葉。 ○町女房 單に「市井の女」の意。女房はこゝでは人妻の意ではない。勿論お夏を指してゐる。 ○粹氣のきいた人の意。情事に關して理解あるを云ふ。こゝは浮氣者ぐらいの意味である。粹さは「京島原あたりの言葉なり」(異本洞房語圖)。「案内知れる人を云ふ。粹さ書き、粹は米をしらげたる也」(同、考異)と見える。 ○人見 幕の縫目に少し縫ひ合せてない所、透見するためにあけてあるところ。 ○柴人 袖、柴刈りの男。 ○頭かくして云々 「頭かくして尻かくさす」の俚語。一方を秘しながら、他よりあらはるゝを覺らぬを云ふ。 ○作り物 豫め相談したこしらへ事。 ○手替 手段。他をとりなす事の巧妙なるを云ふ。管槍のくだの如く自在に言語を云ひ廻すより起る山崎美成は『疑問録』で説いてゐる。 ○走り 智慧先走りする智慧。自分だけ賢こさうにえらがるを云ふ。

【評釋】 こゝでは清十郎の詭計が巧みに取りこなされてゐる。説話の推移から云へば、前段の序曲が核心に進展したのである。女の特性たる好奇心をうまく利用して、女連中を幕の外に誘ひ出し、お夏の婀娜娘らしい風情と絡んで、クライマックスに到達せしめたのである。柴刈男の點出は緊張の後の弛緩であり、照應がもたらす微笑である。而してこの獅子舞なるものが、清十郎の企んだ狂言である事を最後に持ち出して、「走り智慧なる兄娘なると」擲論一番、以て章を結んだあたりは妙手靈腕と云はなければなるまい。

但「お夏ばかり残りおはしける」は鄭重極まる言葉づかひである。玉だれの奥深き上臈でもある事か、痛くもない齒をいたさうに假病つかつて、狸寝入する姫路あたりの町人の色娘には勿體なすぎる。それから「残り多き事、山々に霞深く」の山々は上と下とにかゝる掛詞で嫌味に思はれるし、結びの句「何として知るべし」は例の破格で、「何として知るべきか」とある筈のところである。

この節で、大略四十字(漢字假名とり交せて)ばかり省略した。現在の西鶴物に對する當局の方針を考慮に入れる時、遠慮した方が刊行物の性質上、無難と思つたからである。また、明らかに書き込んだところで、西鶴の藝術的價值は高まらないと思ふからである。尤も、西鶴の表現上の一特色として省察し、その大びらな筆致に、作者の人となりや、時代の傾向を摸索しようとするなら、問題は自ら別になつてくる。本講ではこの種の僅少な削除が時折、讀者諸君の眼ざはりとなるであらうが、その邊はしばらく諒とせられたい。

四、状袋は宿に置いて來た男

乗かゝつたる舟なれば、しままづより暮をいそぎ、清十郎おなつを盗出し、上方へのぼりて、年浪の日數を立て、うき世帯もふたり住ならばとおもひ立、取あへずもかり衣、濱びさしの幽なる所に舟待をして、思ひくゝの旅用意、伊勢參宮の人も有、大坂の小道具うり、ならの具足屋、醍醐の法印、高山の茶筌師、丹波の蚊屋うり、京のごふく屋、鹿島の言ふれ、十人よれば十國の者、乗合舟こそおかしけれ。船頭聲高にさあゝ出します、銘々の心祝なれば、住吉さまへのお初尾とて、しやく振て又あたま數よみて、呑ものまぬも七文づゝの集錢出し、間鍋もなく小桶に汁椀入れて、飛魚のむしり肴、取いそぎて三盃機嫌、おのゝのお仕合、此風真體で御座ると帆を八合もたせて、はや一里あまりも出し時、備前よりの飛脚横手をうつて、扱も忘たり刀にくよりながら、状箱を宿に置いて來た、男磯のかたを見て、それゝ持佛堂の脇にもたし掛けて置ましたと働さける。それが爰から聞ゆるものか、ありさまにきんたまが有かと、船中辭々にわめけば、此男念を入れてさぐり、いかにも二ツござりますといふ。いづれも大笑になつて、何事もあれじや物、舟をもどしてやりやれとて、楫取直し湊にいれば、けふの首途あしやと皆々腹立して、やうゝ舟汀に着きければ、姫路より追手のもの、爰かしてに立さはぎ、もし此舟にありやと人改めけるに、おなつ清十郎かくれかね、かなしやといふ聲、斗、衰れしらすども是を耳にも聞かれず、おなつはきびしき乗物に入、清十郎は繩をかけ、姫路にかへりけ

る。又もなき歎見し人、ふびんをかけざるはなし。

【語釋】

○乗りかゝつたる舟 諺。行きがかり上、中止しがたいの意。一旦乗船したら航行中は下船し難いからである。舟を出したのはこの場合、船旅をさつたから、わざと書いたのではあるが、別に世俗で云ふ、下がかつた意味も含まれてゐる。○しかまづ 飾磨津。播磨國飾磨郡にある地名。○年浪の月日を立て 長い月日を暮すの意。「年浪」は浪の寄るが如く年がよると云ふ意味である。又、浪の縁語から「立て」と云つたのである。○かり衣 假衣と狩衣とを掛けた言葉。こゝは狩衣の意はなく、假衣(ふだん着)のまま取りあへず急いで出て来たの意である。○漬びさし 演庇。海濱にある小屋。苔葦の家である。○具足庵 甲冑を作り商ふ者。○法印 僧位の最高位。「法華一乗の法を以て衆生を利する事、月光の江水に印する如し」(法印經)。法印の下には法眼、法橋とつく。たゞこゝでは山城醍醐寺の坊さんの意。○高山の茶筌師 高山の茶筌は大和名物である。「大和國圖を檢するに高山と云ふは添上郡の内にて河内國と山城國に境したる處にして傍に平尾中村時田高山と五村を云ふなり田原と云ふも高山の近所なり宇治よりも程遠からぬ處なり」(柳菴隨筆、八)又「和漢三才圖會」には按茶筌、削竹作、穂、如、帚、莖、織、密、振、茶、發、泡、也、和州高山石政之作爲勝。○鹿島の言ふれ 常陸鹿島神社の神託としてその年の吉凶を觸れ歩くものを云ふ。「折鳥朝子に狩衣着せる神巫一人、襟に幣帛を挟み手に劍柏十を鳴らし、鹿島大明神の神勅と稱し、當年中に某々の天災あり或は某々の疾病流布す、免之と欲せば秘符を授くべし等の、妄言を以て愚民を惑はし、種々の巧言を以て頑夫を欺き、金二朱或は一分或は二三百文の錢を貪り取る也、實に鹿島より来るにはあるべからず」(守貞漫稿六、雜業)○住吉様 攝津住吉郡住吉村(今、大阪に含まる)。本國一の宮祭神は表筒男命、中筒男命、底筒男命、及び息長帶姫命。○お初尾 お初穂である。その年最初に出来た穂。それから神佛に捧げる供物(金銀米菜)を云ふやうになつた。○しやく振つて 約振

つて。杓子をさし出して、その中に寄附金をうけるのである。○間鍋 燗鍋に同じ。○眞鍮 まともにも吹く風。順風である。○八合 八分に同じ。○狀箱 手紙の入つてゐる箱。○持佛堂 佛間。念持佛、父祖の位牌を安置する所。○どやどやめく。騒ぐ、喧しく云ふ。○ありさま われさまの轉訛。貴様。お前と云ふに同じ。

【評釋】

初めのところを少し解きほぐして見る。「乗りかゝつた舟だから行けるところまで行けと思ひ定め、飾磨の港から上船せんものと、暮れぬうちにと心急ぐ清十郎は、お夏を囁かして出奔したのであつた。それは上方へ行つて末長く暮したい所存、世帯の苦勞などは二人一所に住めば極樂も同然である、かう決心する上は一刻の猶豫もできず、着のみ着のまゝで抜け出して来た。濱の苦屋の寂しげなところで船を待つてゐると、いろ／＼の人がそれ／＼の旅姿をして集つて来る。……」

乗合船の様子から、船頭の縁起祝ひのあたりは時勢粧の一片として鮮やかに情景が映し出されてゐる。而して飛脚の失念が思はぬ悲劇の素因を作る渡し込みも、わざとらしい風趣は見えながら、人生の不可思議、宿命の語る奇しき因果律を思はせる。特に飛脚のぼけたやうな人物は、例の諧謔の下に的確に把握されて、まさ／＼とその姿態が眼の前に浮き上つて見える。

文章からのみ見れば、脈絡上、省略されたり前後したりした箇所が多い。例へば——
「清十郎お夏を盗み出し云々」は文意から云へば冒頭に置くべき文句。但、情趣の上では原文に味がある。
「船待をして、思ひ／＼の旅用意」は船待をしてゐればの意たるは云ふまでもない。

「状箱は宿に置いて来た男磯の方を見て」は、前の言葉の續き具合からして「置いて来たとして、その男」と補ふべきであらう。

又、「いづれも大笑」したものが「皆々腹立」するのは矛盾してゐるとも見えるが、尤も笑つたのは、飛脚の八厘位なのろま加減を嗤笑したので、船出の縁起が悪いと皆がブツ／＼云つたのは、冷靜に返つてからの本音である。

その日より座敷籠に入れて、浮難義のうちにも我身の事はない物にして、おなつは／＼と口ばしりて、其男目が状箱わすれねば、今時分は大坂に着て、高津あたりのうら座敷かりて、年寄たか／＼ひとりつかふて、先五十日斗は夜ひるなしに肩もかへずに(四字畧)、おなつと内談したものを、皆むかしになる事の口惜や、誰ぞころしてくれいかし、さても／＼一日のながき事、世にあきつる身や、と舌を齒にあて目をふさぎし事千度なれども、まだおなつに名残ありて、今一たび最後の別れに美形を見る事もがなと、耻も人のそしりもわかまへず、男泣とは是ぞかし。番の者ども見る目もかなしく、色々にいさめて日数をふりぬ。

【語釋】 ○座敷籠 座敷牢。人を閉ぢ籠めおくために鎖し固めた座敷。室内監禁の私刑の一。 ○入て 「入れて」であるが「入れられて」とあるべきところ。主格たる清十郎が省略されてゐる。 ○浮難義 憂き難義。 ○なひ物 ないもの。我身はどうなつても關はないと云ふ心。 ○其男 あの男、即ち飛脚を指す。 ○高津 大阪の地名。天王寺以北空堀に至る一帯の高地を云ふ。 ○かゝ鼻。賤しい身分の者の人妻の意であるが、こゝは年輩の麗女のこと。 ○肩もかへず 凝つさして、動かぬ姿態の意。 ○むかしになる事 空想になつた。豫定の外れたの意。見はてぬ夢である。 ○美形 美人、こゝはお夏のこと。

【評釋】 戀に感傷して、盲目同然になつてゐる青年の激情としては、如上の心持は自然であらう。うすの飛脚が何よりも恨めしいのはもつともである。「まづ五十日云々」はこれまで人目の關のしげさに、おちついた語らひも出来なかつた彼等が、その埋合せに、心ゆくばかり新世帯享樂を欲求する言葉として肯定すべきであらう。しかしその口吻には當代の遊蕩的青年の風格が揣摩されると共に、一面には作家自身の類唐的な趣味性奔放な洒脱味のおはれでもあると思ふ。この一節は自然に叙述されてゐると云ふだけで、特に際立つたものを認めない。

おなつも同じ歎にして、七日のうちはだんじきにて、願狀を書て室の明神へ命乞したてまつりにけり、不思議や其夜半とおもふ時、老翁枕神に立せ給ひ、あらたなる御告なり。汝我をいふ事よく聞べし、惣じて世間の人身のかなしき時いたつて無理なる願ひ、此明神がまゝにもならぬなり、俄に福德をいのり、人の女をしのび、悪き者を取ころしての、ふる雨を日和にしたいの、生つきたる鼻を高ふしてほしひのと、さま／＼のおもひ事、とても叶はぬに無用の佛神を祈り、やつかいを掛ける。過にし祭にも参詣の輩壹萬八千十六人、いづれにても大欲の身のうへをいのらざるはなし、聞ておかしけれ共散錢なげるがうれしく、神の役に聞なり。此参りの中に、只一人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足手そくさいにて又まいりましょと、拜て立しが、こもどりして私もよき男を持してくださいませいと申、それは出雲の大社を頼め、こちはしらぬ事といふたれども、あきかずに下向しけり。その方も親兄次第に男を持たば別の事もなひに、色を好て其身もかゝる迷惑なるぞ、汝おしまぬ命はながく、命をおしむ清十郎は願最期ぞと、あり／＼との夢かなしく、目を

覺して心ほそくなりて泣明しける。案のごとく清十郎めし出されて、思ひもよらぬ証義にあひぬ。但馬屋内藏の金戸棚にありし小判七百兩見えざりし、これはおなつに盗出させ清十郎とりてにげしと云觸て、折ふし悪敷、此事ことはり立かね、哀や廿五の四月十八日に其身をうしなひける。さてもはかなき世の中と、見し人袖は村雨の夕暮をあらそひ、惜みかなしまぬはなし。其後六月のはじめ萬の虫干せしに、彼七百兩の金置所かはりて、車長持より出けるとや、物に念を入べき事と子細らしき親仁の申き。

【語釋】

- だんじき 斷食。
- 願狀 祈願の趣きを記せる狀文。
- 室の明神 掃磨室津にある社。「活所遺業」に「筑紫雜誌三十條中、室明神。明神之創社於室津也、不知其時、室人曰從日和國、御舟先泊此津、而後遷山背賀茂、賀茂有船祭、此神御船之儀式也、先於賀茂也必矣、賀茂人曰、先遣宮賀茂、社司各受田、後勸請室津、故室人來受賀茂五段田、此後於賀茂無疑矣、是以兩家不相降、此是室社家、鳥井大内大膳大夫證平之說也……」(「類聚名物考」による)室津は既出。
- 枕神 枕上、枕もとの意。神はあて字であるが、枕もとに立つた神と云ふ意味で書いたものかもしれない。○あらた 「あらたか」とも云ふ。功驗著しきさま。
- 散錢 賽錢。神佛に奉る錢、元來は一文二文のバラ錢である。○下向 本來は高きより低きへ、又都より地方へ行く事であるが、こゝは尊い神前より鄙しい家に歸るので、「罷る」(參るに對する)と同意義に用ひてある。
- 詮議 罪人を審問するを云ふ。吟味。
- 内藏 家の内に設けたる土藏。店屋に接續するもの。○小判 天正時代から江戸幕府の末まで鑄造せられた隋圓形板狀の金銀貨の總稱。一枚一兩に相當するもの。○こさわり 辨解する。事を理けて辨疏するのである。
- 虫干 虫拂、土用干とも云ふ。夏の土用中に衣服書籍を日に干し風にあて、黴・虫のつきのを防ぐ。
- 車長持 底部に車をついた長持。非常時の搬出に便ならしめためである。
- 子細らしき 分別のあるらしい。勿體ぶつた。

た。

【評釋】

この一節の前段は室の明神の御告である。枕上の神様が立たれたとて不思議はない。——この頃の民間信仰として許容すべき事柄であり、且、當代小説界の一方に大なる勢力を把持してゐた怪異小説がこの方面に浸染した結果と見る事もできるが、それはともかくも——この超自然的要素の取扱は、かなり人に喰つたものである。明神さんの口吻は宛然酸いも甘いも噛みわけた譯知りの老爺の言振りでである。この場合、お夏の灼熱せる戀の苦悶に解決を與へんとするものとしては、そぐはぬ事夥しい。娘心の眞剣味をあたまから茶化してかゝつてゐるところに「戯れ」が跳躍する。かゝる跳躍は作者の自己陶醉を示す以外に何等の意義も持たぬものである。西鶴の常套的筆致ではあるが、内容から見て甚しい嫌味になる。たゞ、明神の口を藉りた世間一般への諷諷と見る時、自ら異つた意味合が浮び出して来る。世俗の「信心」なるものゝ内質、人間の利己主義、隱微なる人情の因めき。それらを捕捉して縦横に振つた批判は、肯綮に當り辛辣に響く。もしそれ「一萬八千十六人」に至つては例の數學辯にすぎない。

後段は清十郎の最後の條であるが、これは餘りにあつけない取扱方である。第一章でわざ／＼姫路以前の遊蕩の場面を點出してまで、精細に描寫した主人公の悲劇的破綻が、かく簡單に素氣なく片つけられた事は、前後の均整の上からも大なる缺陷である。しかもその叙述が單なる報告的に書き流してある事は、痛切にその不備と枯燥とを非難したいと思ふ。

物には念を入れよとの教訓も、木に竹をついた感が深い。五十筋の分別顔は見えるけれど、びつたりと胸に迫る何物も發見し能はざるを憾みとする。

五、命のうちの七百兩のかね

何事もしらぬが佛、おなつ清十郎がはかなくなりしとはしらす、とやかく物おもふ折ふし、里の童子の袖引連て、清十郎ころさばおなつもころせとうたひける。聞ば心に懸ておなつそだてし姥に尋ければ、返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きておもひをさしやうよりもと、子供の中にまじはり、音頭とつてうたひける。皆々是をかなしく、さま／＼とめてもやみがたく、間もなく泪雨ふりて、むかひ通るは清十郎でないか、笠がよく似たすげ笠が、やはんは／＼のけら／＼笑ひ、うるはしき姿いつとなく取亂して狂出ける。有時は山里に行暮て、草の枕に夢をむすめば、其ま／＼につき／＼の女もおのづから友みだれて、後は皆々亂人となりけり。

【語釋】 ○知らぬが佛 謬「毛吹草」に見ゆ。佛は柔和忍辱のもの、その如くに何事も知らねば感情を動かさぬこと佛に同じとの意である。 ○「清十郎殺さばお夏も殺せ生きて思ひをさしよよりも」。——當時の流行唄と見ゆ。 ○お夏そだてし お夏はわれを育てし意。 ○狂亂 氣狂ひに同じ。 ○音頭 數人合唱又は奏樂の時、一人がまづ發聲して調子をとるもの。 ○涙雨 悲しみの甚しいため其の涙が化して雨となつて降る。それを涙雨と云ふ。「虎が雨」、「圓の小高の涙雨」の類。但、こゝ

では季節の上から五月雨を指すものと見たい。 ○菅笠の唄 當時この事件に絡んで出来た流行唄らしい。寶永六年正月竹本座上演の近松門左衛門作「五十年忌歌念佛」お夏笠物狂の條にも見える。又、寶永七年版「吉日燈曾我」(當時の流行唄を集めたもの)には「向ひ通るは清十郎ぢやないかいの、ヨイ／＼笠がよく似た菅の小笠が、さりとはいえいやらえいそりや、サアえいやらえい、笠が似たとて清十郎であるかいの、ヨイ／＼、お伊勢詣りは皆清十郎かさりとはいえいやらえい」とある。 ○やはん唄の拍子、「はは」は笑ひ聲。 ○けら／＼笑ひ げら／＼と笑ふ狂人の笑ひ聲である。 ○有時 ある時。 ○友亂れ 氣狂ひの感染するのである。 ○亂人 氣狂ひ、物狂ひに同じい。

【評釋】 「胸をそゝるやうな嗚咽の聲と、心をかき亂す濕つばい感觸とが、滲み出してゐるのがこの一節である。道義的批判から離れて、ひたすら感情の世界に浸潤させるだけの魅惑がこゝには潜んでゐる。春も逝いて、たゞさへ惱ましい初夏である。折から、人の心を幽暗の國に引込まねば止まない、陰鬱な五月雨が降りしきる。降る雨を衝いて菅笠の人が通る。その横顔をのぞきこむやうにして、濡燕がついと赤い腹をひるがへしてゆく。心の平靜を失つた戀の殘骸の、お夏がしどけないさまをして後を追ふのに無理はない。山里の方へ迷ひ出た彼女は、暮れるがまゝに草枕して、果敢ない眠りに見はてぬ夢を趁はんとする。灼熱の戀から夢幻への憧れよ。悲しい宿命の彷彿者お夏の姿は、くづれた鳥田、亂れた緋鹿子の袖と共に、鮮やかな色調を以て讀者の眼底にまさ／＼と映じ来るであらう。

こゝに於てわれ／＼は次の句を聯想せずにはゐられない。

清十郎聞け、夏が来てなく時鳥

靈元院

(前の句「甲子夜話」には後水尾院として孫引してゐるが、年代の上から、誤記である事が推測される、又江戸の齋藤得元の句と云ふ説もあるけれど、今は普通に從つておく)事叢聞に達す、彼等まさに以て嘆すべきであらう。次に「つき」の女の友亂れ」は少々筆が外れたもので、例の誇張が一層の擴大性を示した結果と見たい。

清十郎年ころ語し人ども、せめては其跡残しをけとて、草芥を染し血をすゞぎ、尸を埋みてしるしに松柏をうへて、清十郎塚といひふれし、世の哀は是ぞかし。おなつ夜毎に此所へ來りて弔ひける。其うちにまさくとむかしの姿を見し事うたがひなし。それより日をかさね、百ヶ日にあたる時、塚の露草に座して、守り脇指をぬきしを、やう／＼引とどめて、只今むなしうなり給ひてやうなし、まことならば髪をもおろさせ給ひ、すへ／＼なき人をとひ給ふこそぼだいの道なれ、我々も出家の望といへば、おなつころをしづめ、みな／＼が心底さつして、ともかくもいづれもがさしづはもれじと、正覺寺に入て上人をたのみ、十六の夏衣けふより墨染にして、朝に谷の下水をむすびあげ、夕に峯の花を手折り、夏中は毎夜手灯かゝけて大經のつとめおこたらず、有難びくにとはなりぬ。是を見る人殊勝さまして、傳へきく中將姫のさいらいなるべしと、此庵室に但馬屋も發心おこりて、右の金子佛事供養して、清十郎を弔ひけるとや。其頃は上方の狂言になし、遠國村々里々迄ふたりが名を流しける。是ぞ戀の新川舟をつくりて思をのせて、泡の哀れなる世や。

【語釋】

○草芥 草叢である。芥は草の葉莖のすたりもの。(元來、草芥とは「くさ・あくた」のやうにつまらぬものゝ意である。)
 ○まさ／＼ 明らかに。
 ○露草 露おける草の意であらう。こゝは鴨跖草の事ではあるまい。
 ○とひ給ふ 弔ひ給ふ。
 ○ぼだい 梵語、菩提。無上の正覺の意。即ち佛果を得て極樂往生すること。そのための修行をも云ふ。
 ○出家 家を出て佛門に入る。「われ／＼も出家の望み」は、「私たちが貴方の出家なさるのを望んでみます」の意。「私たちが出家しますから貴方も」の意にもとられるが、さうではない。
 ○いづれもがさしづはもれじ 皆の指圖通りに致しませうの意。
 ○夏中 一夏九十日(陰曆四月十四日より七月十六日まで)修行する。この間に讀經寫經などをなす。
 ○手燈 手づから御灯をかゝげする。
 ○比丘尼 梵語、具足戒を守る婦人。出家した女を云ふ。
 ○中將姫 横佩大臣藤原豊成の女。繼母に仕へて至孝、大和國富麻寺を興し、寶龜六年三月十六日二十九歳を以て逝くと。
 ○發心 菩提の心を發起すること。
 ○右の金子云々 右の金子を佛事に供養してとあるべきところ。これは清十郎に疑のかゝりし金子を指す。供養は三寶(佛、法、僧)に財と行とを進むるを供と云ひ、舞養を養と云ふ。而して財供養は飲食、衣服、香華を供ふること、法供養は講説說法することである。
 ○狂言 歌舞伎狂言の略。この句を信ずればお夏清十郎の事實を脚色した演劇が「五人女」以前にあつたものと見える。
 ○泡 うちかた。泡沫のはかなきに喩ふ。因果經の「如夢如泡影、如露亦如電」である。

【評釋】

こゝは説話として後日譚に當る部分である。男の塚の前で自殺しかけ助けられて尼になる。近世初期の小説、假名草子に於ける構想そつくりで、あまりに型にはまつた行き方である。前代小説の様式を打破して、新しく浮世草子の世界を樹立した作家としては、殊に陳套の感を深うせしめる。但、一步退いて事實に即したものと見れば、この感じは餘程薄らひで行く。けれどこの創作が

どの程度まで事實を辿つたものであるかは容易に決せられぬ。「亂脛三本鍵」(享保三年刊、西澤一風作)の一挿話たる晩年のお夏の風手に接する時、片上在の茶店の婆さんとしての彼女と、墨染の衣に珠数つまぐる若々しい可憐な尼姿の彼女との間には、大なる距離がある。すれば事實も程度問題であつて、こゝには單に普遍的な結末の下に、美しい詩的幻影を追ふの態度に出たものとのみ觀じたい。

朝に閨伽を掬ひ夕に香華を献げる。まことに上臈にも紛ふばかりの殊勝さである。中將姫は御迷惑であらうが、これに較べられたお夏は、大分と品位を高めたわけである。美の蠱惑はすべてを陶醉させる。うたかたの哀れはかない世相ではあるけれど、戀の國の美しい巡禮として、お夏の名は永遠に、詩の中に生き夢の園に甦る事であらう。

「五人女」卷一、お夏の篇は終つた。これに關する構成、人物等に就て述ぶる筈であるが、全卷講了の後、他の篇と共に比較對照したいと思ふので、しばらくさし控へたい。それでこゝには、事實に就ての文献と同じ素材の作品に就て一瞥を與へるに止めようと思ふ。

お夏清十郎の物語が文學に現はれて、しかも現存するものは「五人女」を以て嚆矢とすると云つてよからう。近松の作が寶永六年で、「五十年忌歌念佛」と云ふ事から逆算すると清十郎の刑死は萬治三年に當り、且、「五人女」の「哀れや二十五の四月十八日にその身を失ひける」とあるのによつて、それを信すれば、年月日が確定するわけである。

然るに「甲子夜話」卷二十八に「玉滴隠見十五の卷に寛文二年のことあり、五人女に四月十八日とあり、此二本をあはせ見れば、清十郎が罪せられしは寛文二年四月十八日なるべし」と見える。萬治三年と寛文二年とは僅かに足かけ三年の差であるから、近松が漫然と五十年忌と稱したものとせば、推定年代の萬治三年説は消滅する事になる。たゞ「玉滴隠見」の記事の確否は論ずるだけの材料がないから、そのまゝに肯定するか否かは任意であらう。猶「五人女」に「その頃は上方の狂言になし遠國村々里々まで二人の名を流しける」とあるのを見れば、多少言ひ振りは大袈裟でも、歌舞伎方面に仕組まれた事實は存在しよう。

こゝで近松の「歌念佛」と對比する事は回避するが、事實と云ふ點からのみ見れば「五人女」の方が本當に近いものではあるまいか。「歌念佛」の構想は精緻であるだけ作爲が加つてゐるやうに思ふ。淨瑠璃の本質上、「歌念佛」が「五人女」に比して、遙かに細密な技巧と濃艶な措辭とによつて、戯曲的發展を遂げてゐる事は當然であらう。しかし初戀の娘心の遺瀨なさと、壊れゆく愛欲の嘆きを叙したものである。「五人女」の優越を感じるのである。かく多少の距りはあつても、大體の筋書は共に當時流布した巷談から遠く離れてはゐないものと信じたい。主要人物の年齢にも變りなく、流行の小唄も取入れ、ほろ／＼と崩れ落ちる牡丹の花のやうな戀に、作者は滿腔の涙を流してゐるのである。

猶こゝに同一素材の作品を列挙して見るが、未定稿ではあり、ほんの一部分にすぎない。單に参考までに記すだけである。

一、小説

文化六年 風流伽三味線、一〇 山東京傳 勝川春亭畫
 文化七年 常夏草紙、五 曲亭馬琴 春亭畫
 文化十二年 中昔戀道種、三 十返舎一九 歌川美丸畫
 文化十四年 魁對盃、三 歌川國信 白畫
 文政十一年 近世説美少年錄初集 曲亭馬琴
 天保十年 縁結月下菊、六 柳亭種彦 歌川國貞畫
 安政五年 都正本製、十二 松園梅彦 歌川國輝畫

二、上方淨瑠璃

寶永二年十一月 お夏清十郎笠物狂 (外感年鑑による) 竹本座
 寶永六年正月 五十年忌歌念佛 近松門左衛門 竹本座
 正徳年間 飾磨襦布染 (歌念佛改題) (京) 神山四郎太郎座
 享保十六年四月 和泉國浮名溜池 並木宗輔 豊竹座
 安田 蛙文
 寶曆十年七月 極彩色娘扇 近松半二 松洛外二名竹本座
 安永七年十二月 夏浴衣清十郎染 三好松洛 北堀江座

天明元年七月

おなつ清十郎

森羅 萬象 双木 千竹

(江戸にて)

三、江戸淨瑠璃

寶曆五年春 家名所妹背笠紐 (常盤津) 中村座
 天明元年四月 道行比翼菊蝶 (富本) 市村座
 寛政十一年二月 亂咲縁花笠 (常盤津) 中村座
 享和三年 錦車縫裾卯花 (富本)
 天保二年 最迫戀男容 (富本) 河原崎座

四、歌舞伎その他

寶曆十二年初演 極彩色娘扇 中村座
 明治四十一年 お夏狂亂(振事劇) 坪内逍遙

お夏清十郎笠物狂道行 (一中)
 お夏清十郎沖中川 (一中)
 ひめぢ笠おなつさいこの段 (豊後)

好色五人女 卷二

てんまに
たる 情を入れし樽屋物語

目録

- 一、戀に泣輪の井戸替
あひ釣瓶も思ひに亂るゝ細有
- 二、踊はくづれ桶夜更けて化物
人は恐ろしや蓋して見せぬ心有
- 三、京の水漏らさぬ中忍て合釘
目印の錐紙に書付て有
- 四、こけらは胸の焼付新世帯
心正直の細工人天満に有
- 五、木屑の杉楊枝一寸先の命
りんき逆目をやる杉有

一、戀に泣輪の井戸替

身はかぎりあり、戀はつきせず、無常は我手細工のくはん桶に覺へ、世をわたる業とて錐のこぎりのせはしく、鮑屑のけふりみちかく難波のあしの屋をかりて、天満といふ所からすみなす男有。女も同じ片里の者にはすぐれて、耳の根白く足もつちはなれて、十四の大晦日に親里の御年貢三分一銀にさしつまりて、棟たかき町屋に腰もとつかひして月日をかさねしに、自然ミ才覺に生れつき、御隠居への心つかひ、奥さまの氣をとる事、それよりすへんの人に迄あしからず思はれ、其後は内藏の出し入をもまかされ、此家におせんといふ女なふてはと、諸人に思ひつかれしは、其身かしこきゆへぞかし。され共情の道をわきまへず、一生枕ひとつにてあたら夜を明しぬ。かりそめにたはふれ、袖つま引にも遠慮なく聲高にして、其男無首尾をかなしみ、後には此女に物いふ人もなかりき。是をそしれど人たる人の小女はかくありたき物なり。

【語釋】 ○戀に泣輪の。 戀に泣くと云ふのこ、泣き佗ぶの「わ」を掛け言葉にしたものか。無理な言ひ廻しではあるが、俳諧風の筆柏子として認めたい。○身はかぎりあり戀はつきせず。 人の身には限りがあつて壽命が盡きれば死ぬが、戀の道には限りがない。いつまでも続き、またいつでも存在するの意。「遙ふまでや限りある覺と思ひしを戀はつきせぬ物にぞありける」(後拾遺集戀三、源政成)など云ふ歌もある。○無常は我手細工の云々。 この篇の主人公の職業が桶桶を作るので、かく云つたのである。

○短く難波のあしの屋。 「難波遠短き産のふしの間も逢はで此夜を過してよとや」(新古今集、戀一、伊勢)の歌から出た文句。あしの屋は茅屋、小さい家。あしは難波の縁語。○「鮑屑の煙短く」は「錐錐のせはしく」の對句。これも樽屋の商賣を利かせた文句である。○天満といふ所がら。 大阪の北部、淀川筋の北、所がらは邊僻の意。○片里。 片田舎。こゝは「場末の町」ぐらいの意であらう。○耳の根白く。 ちよつと滲皮のむけた、即ち小綺麗な女を形容した語。○足も土氣はなれて。 田舎臭くない、即ち前條と同意味になる。○十四の大晦日は。 十四歳の時の大晦日にはの意。○三分一銀。 上納金である。當時關西では租税として米二銀一(田は米を以て知は銀を以て納めるのを常法としたと云ふ)の率で納めた。○棟高き町屋。 立派な町人の家の意。○腰元つかひして。 「腰元仕へして」で、女中奉公したのである。○才覺。 伶俐。すべて物事に敏活で氣が利く。○氣をさる。 氣心を呑み込んで、御機嫌に遣はぬやうにする。○なうてはま。 無くては、即ちおせんが居なければ困る、無くてはならぬ人と、皆からもてはやされる。○情の道。 色戀の方面。○あたら。 可惜。惜しい事には。○袖つま引にも云々。 袖や襟を一寸引いても「あれつ」と大聲をあげる。○これをそしれど。 これを非難する者もあつたけれど。

【評釋】 「身は限りあり、戀はつきせず」と云ふ冒頭の一句は俗情俗意の眼から觀じた變らぬ人生の姿であらう。それから神祇釋教戀無常と云ふ成語のあるところからして、無常は云々と樽屋の商賣柄に渡し込んだのは例の筆法である。この樽屋が棺桶専門でない事は明らかであるが「無常はわが手細工の棺桶に覺え」こやつたところは鋭く印象づける。まづ、さう云ふ男が天満にゐるとして、次で「女も同じ片里の」こつづけ、こゝに女主人公を點出し

た。而して男の叙述がむしろ簡略に委ねられてゐるのに反して、女の素性、氣質とを一氣呵成に井堰を決した水の勢で以て寫し出した。一見、行き當りばつたりの書振らしく思はせるけれど、當初に男をあらはし、一轉して女にばかり即して筆を走らせ、更に井戸替の場を男を引き出して來る手法は、かなり巧緻を弄したものと云はねばなるべし。

さて、女の身の上では、親里の事情を簡明に叙して初奉公の因縁を語り、主家の誰彼の機嫌氣づまをうまく取りこなす恰愴な性質は、「内藏の出し入れをも任せられ」たので十分に看取されよう。それから「されども」と鋒先を換へて「情の道を辨へず」云々と叙し去つた一聯の文章は、おせんの性格を把握すべき緊要な個所であるが、筆致は多少ふさげ氣味で、作者の浮かべるいつもの薄笑ひが覗いてゐる。「一生枕一つ」にての一生は誇張でもあり餘計な文字でもある。「あたら」は例の調子と云へばよい。「その男無首尾を悲しみ」はいかにも適切ではあるが、これも叙しすぎた感があらう。「是をそしれど云々」はさきの薄笑から念にまじめに復歸した状態で、木に竹を繼いだぶさまは否定できない、この分別顔は「五人女」のところ／＼に見らるゝもので、時には尤もらしいしんみりした情味を湛へるけれど、こゝは落語家にお説教を聞くやうで、そぐはない事夥し。

折ふしは秋のはじめの七日、織女に借小袖とて、いまだ仕立てより一度もめしもせぬを、色々七つめんどりばにかさね、かぢの葉に有ふれたる哥をあそばし祭給へば、下々もそれ／＼に唐瓜枝柿かざる事のおかし。横

町うら借屋迄竈役にかゝつて、お家主殿の井戸替けふことにめづらし。濁水大かたかすりて眞砂のあがるにまじり、日外見えぬとて人うたがひし薄刃も出、昆布に針さしたるもあらはれしが、是は何事にかいたしけるぞや。なをさがし見るに、駒引錢目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫、つき／＼の涎掛、さまざまの物こそあがれ、蓋なしの外井戸こゝろもとなき事なり。次第に涌水ちかく根輪の時、むかしの合釘はなれてつぶれければ、彼樽屋をよび寄て輪竹を新しくなしぬ。爰に流ゆくさゞれ水をせきとめて、三輪組すがたの老女、いける虫をあひしけるを、樽屋何ぞと尋しに、是はたゞ今組あげし井守といへるものなり、そなたはしらすや此むし竹の筒に籠て煙となし、戀ふる人の黒髪にふりかくれば、あなたより思ひ付事ぞと、さも有のままに語ぬ。

【語釋】 ○秋の初めの七日。 七月七日。普通に云ふ七夕。即ち支那傳來の乞巧奠の行事である。星祭とて牽牛織女の二星を祭る。「本朝にては仁明天皇の御時、天長十年初めて行はる」(諸國年中行事)。 ○借小袖。 『七夕考』に「多奈波多の訓、たなつもの畑に成るの路にて、田畑の穂見えて農家聊の隙を得たり、牽牛織女は農民夫婦の事なり、高貴尊長は耕さずして食ひ、織らずして著る。農民は耕し織ると雖も衣食に貧しきを以て衣を借すといふ」これで借小袖の意味が分るであらう。 ○色々七つ。 小袖をいろいろ取交へて七つの意。七つは七夕に縁のある数を探つたのである。 ○めんどりば。 雌鳥羽の義。右の羽で左の羽を掩ふを雌鳥羽メトリバと云ひ、左の羽で右の羽を掩ふのを雌鳥羽メトリバと云ふから、七つの小袖の重ねかたを云つたのである。

○梶の葉。七夕の歌は梶の葉に書くを風習とする。「御湯殿の記に、七月七日、七色御たむけとて御歌・御鞠・御葎・御花・御貝・おほひ・御揚弓・御香ありと見えたり。御硯七面御筆七封梶葉七枚梶皮七條をかざりて、その梶の葉を御染筆あるなり」(儀訓栞)。「七夕のとわたる舟の梶の葉に幾秋かきつ露の玉章」(新古今集秋俊成) ○籠役。一戸を立つるもの、義務。○かすりて。水の分量が少なくなつて、汲む器の井底に擦れるさまを云ふ。○薄刃。薄刃の庖丁の略。○昆布に針。呪咀の一と思はれる。○駒引錢。人が駒を引いて行く圓柄ある錢、一文で錢十文に當る。これも呪咀に用ひたと云ふ。○目鼻なしの裸人形。明らかに呪咀のためである。○くんだり手のかたし目貫。田舎同の目貫でかたしとは目貫、刀の柄の目釘を覆ふ金具の片方異つたものを云ふ。○根輪。井戸の最下部の桶輪。○三輪組む。老人の姿を云ふ。「みづわざず」とも云ふ。「みづわは三句、さすは氣さす等のさすの義。老人の腰まがり膝まで折れ屈みて殆んど三句さも云ふべきさまをなす」(比古婆衣)。又、みづわはみづはであると云ふ説がある。「稚齒にて長壽の人の落ちたる齒の痕に稚齒更に芽さす」(儀訓栞) ○井守 蟻蝨。井守の黒燒は媚薬として用ひらる。井守は性多淫なるの故を以てと云ふ。「以器養之、食以米砂、體盡赤、重七斤、掃萬杵、以點ニ女人體、終身不滅、淫則點滅、故云ニ守宮、漢武試之驗也」(博物志)。「浪華百談」によれば大阪高津社の西に黒燒店が二軒あつてその地の名物であつた。二軒とは津田佐兵衛(屋號天満屋)と、島居市兵衛(屋號鳥居)とである。

【評釋】 「折ふしは秋の初め」と七夕祭を叙して「唐瓜枝柿かざる事のかし」と筆を切つたと思ふと、「横町裏借屋までかまど役にかゝつて」と七夕とは何の關係もないお家主殿の井戸替を持出し、讀者が一寸面喰つたところで、「けふ殊に珍らし」とするりと抜ける、肩すかしを喰はした體であるがけふの二字の出し方は全くうまい。千鈞の重みはなくとも、文字の位置が確然と鋭つて、奇矯な文章家としての風格を十分に現はしてゐる。

さて、この一段はかうした井戸替の場面となるが、井戸替する家主は即ちおせんの主入の家。井戸の根輪を修繕に來たのが樽屋で、前段にあらはした此篇の主要人物二人の近づく連因をこゝで取り結んでゐる。而して曰くのありさうな婆さんを點出し來つて、この二人を結合するに更に一步を進める。説話展開の段取は自然に運ばれてゆく。

この婆さんは「流れゆく水をせきとめて」井戸から出た井守をもてあそんでゐる。子供でもあるなら格別、みづわぐむと云ふ年輩の女の分際として、只者でない事を思はせる。何かこれを契機として一事件起しさうな婆さんである事は、その所作から推測するに難くならぬ。

猶、井戸から出て來た品々はありふれた物ではあるが、これも觀察の仕方によつては、深刻な社會相がまぎくと洞察される。此の作者ならずとも眞に「蓋なしの外井戸、心もとなき事なり」で、單に物の落ち込むだけの事ではなく、世間と云ふものが、考へれば考へる程、おかしく、恐ろしくはた心もとなき、思はずにはゐられなくなるのである。

此女もとは夫婦池のこさんとて、子おろしなりしが、此身すぎ世にあらためられて、今は其むごき事をやめて、素麵の確など引て一日暮しの命のうちに、寺町の入相の鐘も耳にうとく淺まし、いやしく身に覺ての因果、なをゆくすへの心ながうおそろしき事を咄けるに、それは一つも聞もいれずして、井守を焼て戀のたよりに

なる事をふかく問に、おのづと哀さもまさりて、人にはもらさじ、其思ひ人はいかなる御方様ぞといへば、樽屋我をわすれてこがるゝ人は忘れず、口の有にまかせて樽のそこを叩てかたりしは、其君遠にあらす内かたのお腰もおせんが、百度の文のかへしもなきと泪に語れば、彼女うなづきて、それはいもりもいらす我堀川の橋かけて、此戀手に入れてまなく思ひを晴させんと、かりそめに請相ければ、樽屋おどろき、時分がらの世の中、金銀の入事ならば思ひながらなりがたし、あらば何かおしかるべし、正月に木綿着物染やうはこのみ次第、盆に奈良ざらしの中位なるを一つ、内證はこんな事で埒の明やうにとたのめば、それは欲にひかるゝ戀ぞかし、我たのまるゝは其分にはあらず、おもひつかする仕かけに大事有、此年月數千人のきもいり、つゐにわけのあしきといふ事なし、菊の節句より前にあはし申べしといへば、樽屋いとゞかしもゆる胸に燈付、かゝ様一代の茶の薪は我等のつゞけまいらすべしと、人はながいきのしれぬうき世に、戀始とて大ぶんの事をうけあふはおかし。

【語釋】 ○夫婦池。天満大鏡寺より北、池田町筋にあり。(後の地圖参照) ○此身すぎ。此の渡世即ち子おろしと云ふ職業。 ○改められ。禁止されること。 ○むごき事。惨忍な事。 ○入相の鐘も云々。鐘の音は無常を告ぐるもの。これまて人間らしくない職業をして、多くの嬰兒を闇から闇に葬つた事であるから、その罪業が恐ろしくて、鐘の音などは特に聞かれないのである。 ○賤しく身に。「賤しき身にも」とあるべきところか。 ○恐ろしき事を咄しけるに。罪亡ぼしのために

子おろし時代の話をいろ／＼と語りつづけたの意。 ○それは一つも聞かず。この上に「樽屋は」と云ふ主格を挿んで見なければならぬ。樽屋は婆さんの迷憐なんか聞かうともせず、井守の黒焼の話熱心に問ひかけたのである。 ○堀川の橋かけて。地名を出すと共に「戀の橋渡し」の意味を掛けた言葉。(地圖参照) ○まなく。間もなく。 ○かりそめに請相。安請合ひに請け合ふのである。 ○時分がらの世の中。何事も金次第の當世のここだからの意。 ○あらば何か惜かるべし。「あらば何か惜しかるべき」で、もし金があるなら何でも出すけれど、無いから金が入用ならば思ふ心に變りはないが致し方ないの意で。上からつゞく語氣である。 ○正月に云々。この位の事なら御禮は出来る。即ち正月には木綿の着物一枚、その染様はお好みに任せる。それから盆には奈良晒の中位なのを一反云々と云ふのである。 ○盆。孟蘭盆の略(既出)。盆は大晦日と並んで一年中の節季であるからである。 ○奈良晒。奈良の名産。「京阪上置の民は褌にも越後縮を用ふれども小民及び手下女は奈良縮を専用する也。江戸は奈良縮を用ふるもの稀にて坊間の手代炊婦迄も縮布を着す」(守貞漫稿十七)奈良晒の代價は「三四十匁より金一兩ばかり」と同書に見える。 ○其分にあらず。報酬を目的として世話するのでないの意。 ○思ひつかする云々。先方から(女の方から)思ひつかせるやうな手段に秘訣がある。 ○菊の節句。九月九日。重陽。即ち今は七月の節句であるから、次の節句までにと大體の時日を云つたのである。因に、五節句は、人日(一月七日)、上巳(三月三日)端午(五月五日)、乞巧奠(七月七日)九月九日(重陽)である。

【評釋】 さきに唯者でないと見えた婆は、果してその前身は子おろしの女であつた。これまでの罪深い所業に夕の鐘も耳に疎く淺ましく聞きなされると云ふけれど、なか／＼入相の鐘の響ぐらいて無常を觀する婆ではない。情熱に我を忘れる樽屋の様姿を見ては、忽ちむら／＼といたづら氣を起すのである。「おのづと哀れさも増して」と作

者は庇つてゐるが、本來はそれより以上の享樂的氣分の方が強烈である。だからこそ「我堀川の橋かけてこの戀手に入れて」と洒落的澤山に乗り出して来る。彼女の云ふが如く報酬を眼中におくのでなく、面白半分の浮かれ心からとあつては、全く大變な婆と云はねばならぬ。「此年月、數千人の肝煎」は少々法螺として割引して聞いても、つねにわけの悪しきと云ふ事なし」とは吹きも吹いたり、自信のある事夥しい。

樽屋が婆の身の上話しには耳もかさず、ひたすらに井守の黒燒の一件を問ひ詰めるのは面白い。而して、その説明を聞いてから急に逆上氣味になり、「樽の底叩いて」語るは巧妙な筆づかひで、彼の熱中ぶりが見透かされる。婆が軽々と承け合つたのを見ますと、今度は「時分柄の世の中」と一寸反省する。この渡し込みも甘い。やはり大阪の職人らしい風格が働いてゐると感じさせる。それと共に貸殖を重視する上方の雰圍氣を的確に捉へてゐる作家としての西鶴を思念させる。

終りに「かゝ様一代の茶の薪云々」の叙述は諷諧よく堂に入るものと云ふべきであらう。贅言を費せば——樽屋は商賣柄として木片竹切が澤山できよう。それを焚付として婆さんに與へようと云ふ。これは極めて自然の事で安易な所業らしく聞き取られる。しかし人間はいつまで生きるか分らぬものである。して見れば婆さん一生涯の焚付の代價も、積つて見れば多大な事と云はねばならぬ。それを「戀路とて大分の事をうけあふはをかし」と作者は笑つたのである。簡明な諧謔の中に無限の眞實味が宿つてゐる。西鶴の長所はこんなところに潜んでゐる。猶、樽屋が「我を忘れてこがる人は忘れず」は語句の上の技巧。又、「もゆる胸に燒付」の次に「一代の茶の薪」

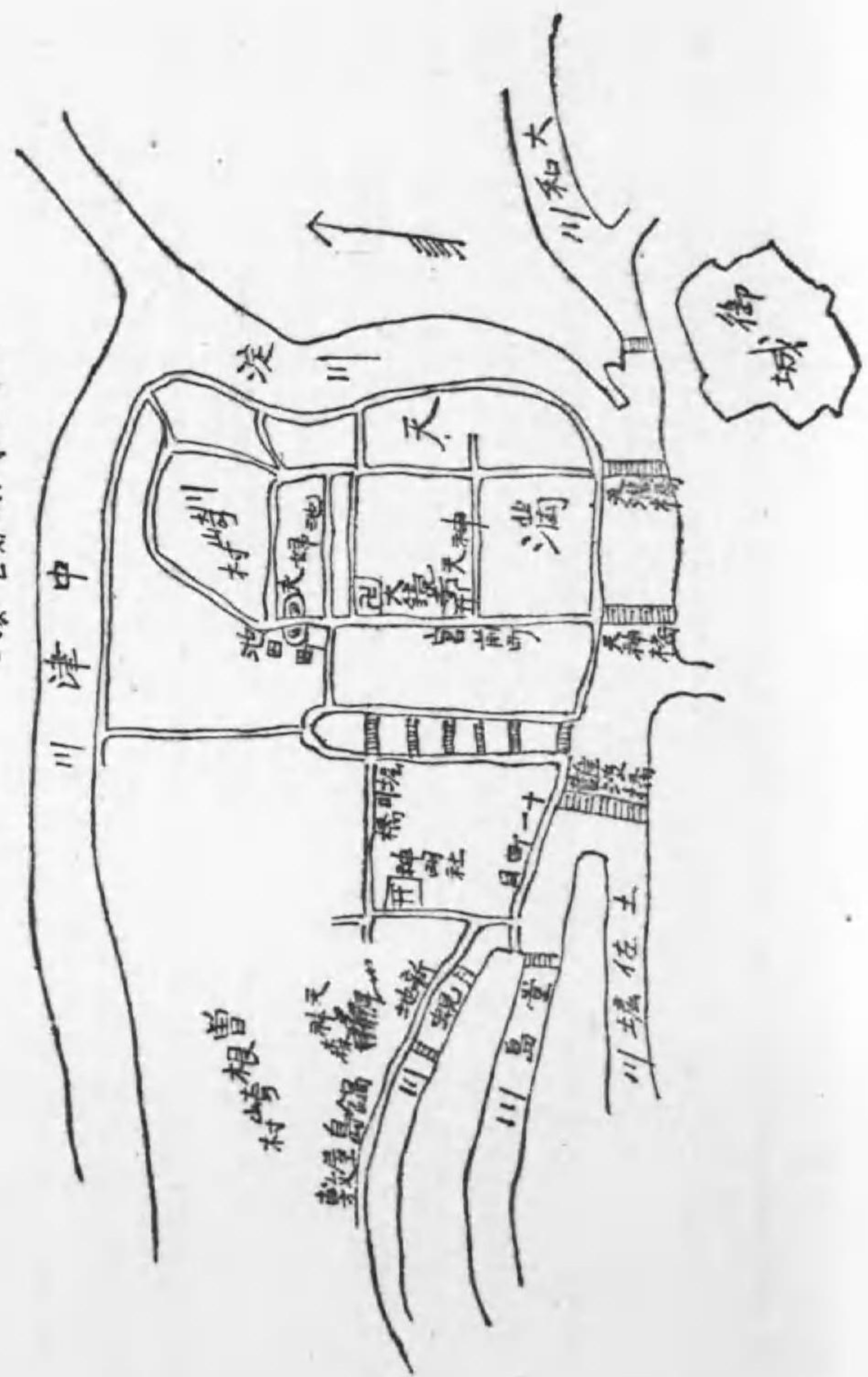
とあるは縁を引くの言葉である。

二、踊はくづれ桶夜更て化物

天満に七つの化物有(り)、大鏡寺の前の傘火、神明の手なし見、曾根崎の逆女、十一丁目のくびしめ繩、川崎の泣坊主、池田川のわらひ猫、うぐひす塚の燃からうす、是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし。世におそろしきは人間ばけて命をとれり。心はおのづからの闇なれや、七月廿八日の夜更て軒端を照せし灯籠も影なく、けふあすばかりと名残に聲をからしぬる馬鹿踊も、ひとりく己が家々に入て、四辻の犬さへ夢を見し時彼樽屋にたのまれのいたづらか、面屋門口のいまだ明掛てありしを見合(せ)、戸さしけはしく内にかけた、廣敷にふしまろび、やれくすさまみや水の呑たいといふ聲絶てかぎりの様に見へしが、されども息のかよふを頼みにして呼生けるに、何の子細もなく正氣になりぬ。内儀隠居のかみさまをはじめて、何事か目に見えてかくはおそれけるぞ。我事年寄のいはれざる夜ありきながら、宵より寝ても目のあはぬあまりに、踊見にまいりしほどに、鍋島殿屋敷のまへに京の音頭道念仁兵衛が口うつし、山くどき松づくし、しばらく耳にあかず、あまたの男の中を押わけ、團かざして詠けるに、闇にても人はかしく、老たる姿をかづかず、白き帷子に黒き帯のむすびめを當風にあぢはやれども、かりそめに我尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞとすこしはむかし

のおもはれ、口惜てかえるに此門ちかくなりて、年の程二十四五の美男、我にとりつき、戀にせめられ今思ひ死、ひとへ二日をうき世のかぎり、腰もとのおせんつれなし、此執心外へは行まじ、此家内を七日がうちに登人もこのさず取ころさんと、いふ聲の下より、鼻高く貌赤く眼ひかり、住吉の御はらひの先へ渡る形のごとく、それに魂とられ、只物すごく内かたへかけ入のよし語ば、いづれもをどろく中に、隠居泪を流し給ひ、戀忍事世になきならひにはあらず、せんも縁付ごろなれば、其男身すぎをわきまへ、世突後家ぐるひもせず、たまかならばとちすべきに、いかなる者ともしれず、其男ふびんやと、しばし物いふ人もなし。

【語釋】 ○踊はくづれ桶。 踊のくづれは踊の果てること。主人公の樽屋が戀のために憐んでゐるのに掛けて「くづれ桶」と書いたのであらう。 ○天満に七つの化物有り。 當時の巷談でもあらうか。その一つ一つは本文に擧げてある通りである。位置は略圖を参照せられたい。 ○からうす。 唐臼。 ○世に恐ろしきは。 この前に「されど」入れて見るべし。「人間化けて命を取れり」は人間が化けて人の命を取るのが、世の中で一等恐ろしい。天満の七化は狐狸の仕業でさほど恐ろしくはないと云ふ意がこめてある。 ○七月二十八日云々。 盆の「後祭」二十四日(俗に云ふうらばん)から引つゞいての行事か。「世事談」日後堀河院寛喜二年七月始て燭を燈す十四日の夜より晦日に至る。上元下元には燭なし云々。今世は三都ともに七月朔日より晦日に至り燈を點じ云々(守貞漫稿、二十四日)、「日次紀事」卷三、七月自二十四日至三晦日、八夜、大人小兒街頭催踊躍云々(民間時合、三)。 ○馬鹿踊。 無秩序な亂舞に躍り狂ふ踊。 ○面屋。 母屋。本宅である。「面屋の門口」である。 ○見合。 見すましに



天満略圖
正徳五年
板本に依る

同じ。門口の戸が少し開いてゐるのを見て「よしまだ起きてゐるな」と心に背いて計畫通りに事を行はんとするのである。○けはしく。險しく。荒々しくに同じ。○廣敷。廣間のこと。こゝは店先の間であらう。○すさまじや。凄い恐ろしい。○限りの様に。死んだやうに。○かみさま。妻女を云ふ『塵塚談』に「我等十四五歳までは御家人二三十俵高の妻女をかみさまと皆人稱せり。増して商人は富家にもかみさまと云ふ」。○我事。「私こと」である。こゝから「只物凄く内方に駈け入る」。まてが婆の言葉。○いはれざる。理由なき義で、「いらざる」に同じ。○鍋島殿屋敷。鍋島侯の藏屋敷か。位置は地圖参照。○音頭。踊り唄の音頭取の意。○道念仁兵衛。「京に道念山三郎と云ふ興梃の音頭あり。貞享の頃益踊口説と云ふ唄を歌ひ出したり。此節、踊の拍子によく合たる間なれば今以て之をよしとす」(世事談)。仁兵衛はその流派を汲む者であつたらう。○ろうつし。そのまゝの節廻しの意。○山くどき。「山づくし」「花くどき」「くどき」などを『松の葉』『若みどり』等に散見するが、この曲は見當らず。博雅の示教を俟つ。○松づくし。「二上り鳩の松山それからさきよ、志賀のうら葉のひとつ松、ずんとよいきなまつよは〜君を待つ夜は遠山松よ、山坂こえて〜見とてきた野の七本松よ、ほんに必ず青葉の松よ、のころきぬ〜衣掛松よ、嵐松山さら〜、どつこいさら〜どつこいさら〜さら〜さつと打つては濱松の香はざざんざん」(松の落葉。四) ○かづかづ。買ひかぶらずの意。○當風にあぢはやれども。當世風に氣取つては居たもの。○「あぢをやる」は洒落氣澤山の意。○ひと〜二日。「ひと〜に、この二日」の意か「一日二日」の誤か、不明。○住吉の御祝。六月晦日の名越祝である。この日の住吉祭には猿田彦の假面をつけ鳥兜に赤袴をつけたのが先驅を承ると云ふこと『守貞漫稿』や『年中故事』に見える。「鼻高く面赤く眼光り」は猿田彦の事である。○先へ渡り形の如く。先へ渡る形の如くであらう。○身すぎ。渡世の事である。職業に勤勉な事を「身すぎを辨へ」と云つたのである。○たま

か。實直に同。○其男ふびんや。この下に「云へど」と入れて見るべし。「此家の隠居がかく〜と云つたけれど、暫くは皆々黙つてゐた」と云ふのである。

【評釋】 この一節の冒頭にある天滿に七つの化物と云ふは、説話の本筋に見える男の執念を語る奇怪な出来事——勿論この場合は作り事であるが——の「枕」として、當時の巷談を誌したものである。而して「心は自の暗なれや」の一句を橋渡しとして「枕」と「本筋」とを繋いでゐる。暗は戀路の間をきかしてゐる事勿論である。

七月二十八日以下に寫された婆の行動は鮮明である。燈籠の影も寂しく、人々も散りぢりに歸り去つた夜更け、「四辻の犬さへ夢を見し時」は、點じ得て妙趣限りなき一句と思ふ。その時、おせんの主家の店先に轉げ込んだ婆の芝居は、仲々あざやかな所作を見せてゐる。「限りの様に見え」たのが、「何の子細もなく正氣になりぬ」は風手描くが如しである。まさか芝居とは氣のつかぬ内儀や隠居がまじめになつて問ひ訂すのに不審はない。その次の婆の言葉には、その半生の自墮落さが問はず語りにまさしくと浮き出してゐる。「女はわかきうちの物ぞと、少しは昔の思はれ」は、鬢に霜おく老女一般の暗愁ではあらうが、この婆の口の端から聞けば、嫌味たつぷりに耳に響き、「當風にあぢはやれどもかりそめに我尻つめる人もなく」の露骨な文句は今更のやうに彼女の人のなりを確實にうち剖いて見せて呉れる。

男の生靈か何かが凄い臺辭をならべ、それが猿田彦のやうな天狗姿をあらはしたと云ふあたりは、馬鹿々々しい話柄ではあるが、當代の世相としては眞實にうけ取られた事であらうから、その儘に肯定する外はあるまい。果し

て隠居は取る年浪に涙もろく、婆の書いた狂言にすつかり陥りこんで、男さへ實體ならばと情にほだされるし、その他の人々も亦「しばし物云ふ人なし」でまじめに考へ込んだものらしい。

要するに、前章で「思ひつかする仕かけた大事有り」と請合つた婆の根柢はこゝにあるので、その具象化の第一段はこの「騙込み狂言」であつたのである。多少その態度には人を喰つたやうな野ふう、どうな面影があるけれど、子おろし婆の所作としては頗る當然の道であらう。

此かゝが仕掛、さてもく戀にうとからず、夜半なりてをのく手に手をひかれ、小家にもどり、此うへの首尾をたくむうちに、東窓よりあかりさし、隣に火打石の音、赤子泣出し、紙帳もりて夜もすがら喰れし蚊をうらみて追拂、二布の蚤とる片手に、佛柵よりはした錢を取出し、つまみ菜買など物のせはしき世渡りの中にも、夫婦のかたらひを樂み、南枕に寢延しどけなくなりしは、すぎつる夜きのへ子をもかまはず、何事をか(三字略)やうく朝日かゞやき、秋の風身にはしまざる程吹しに、かゝは鉢巻して枕おもげにもてなし、岡鳥道齋といへるを頼み、樂代の當所もなく、手づからやくはんにてかしらせんじのあがる時、おせんうら道より見舞來て、お氣合はいかゞとやさしく尋、ひだりの袂より奈良漬瓜を片舟、蓮の葉に包て、たばね薪のうへに置醬油のたまりをまいらばと云捨てかへるを、かゝ引とめて、我ははやそなたゆへにおもひよらざる命をす

つるなり、自娘とても持されば、なき跡にて弔ひても給はれと、ふるき苧桶のそこより、紅の織紐付し紫の革たび一足、つきくの珠數袋、此中にさられた時の暇の狀ありしを是はとつて捨て、此二色をおせんに形見とてわたせば、女心のはかなく是を誠と泣出し我に心有る人、さもあらば何にとて其道しるゝこなた様をたのみたまはぬぞ、おもはくしらせ給はゞ、それをいたづらにはなさじと云、かゝよき折ふしとはじめを語り、今は何をかかくすべし、かねく我をたのまれし其心さしの深き事、哀とも不便とも又いふにたらず。此男を見捨給はゞみづからが執着とても脇へはゆかじと、年頃の口上手にていひつゞければ、おせんも自然となびき心になりて、もだくと上氣して、いつにても其御方にあはせ給へといふにうれしく、約束をかため、一段の出合所を分別せしと小語て、八月十一日立にぬけ参を、此道終契をこめ、行すへ迄互にいとしさかはゆさの枕物語、しみんとにくかるまじき、しかも男ぶりじやとおもひつくやうに申せば、おせんもあはぬさきより其男をこがれ、物も書きやりますか、あたまは後さかりで御座るか、職人ならば腰はかゞみませぬか、爰出た日は守口か牧方に晝からとまりまして、蒲團かりて早う寢ましよと、取まぜて談合するうちに、中居の久米が聲しておせんどのおよびなされますといへば、いよく十一日の事と申のこしてかへりける。

【語釋】 ○紙帳。紙で作つた蚊帳。 ○二布。女の腰巻。二幅の布で製する故に云ふ。 ○すぎつる夜。昨夜と云ふに同じ。

○甲子。甲子、庚申の夜は夫婦同衾せざるを習俗とす。その夜懐胎した子は盜賊となると云ひ傳ふ。田子は犬鬼神、庚申

は猿田彦の祭日であるのに身を誦まないから神罰が當ると云ふのである。○やくはん。薬籠。○かしらせんじ。煎薬の煮花。○片舟。瓜の片身である。舟の形をしてゐるから。○蓮の葉。盆の後祭と云ふ季節をあらはす。片舟の舟の縁語として蓮(池に縁ある)とつゞける氣持もあるであらう。○たばね薪。束にした薪。○醬油のたまり。「華味噌は今世田舎にて用ふたまりのこと也。溜也。味噌溜の上略也。味噌の上を凹にし炭を納れ置き溜る所を汲取る故に名とす」(守貞漫稿二十八)。現時も尾張美濃あたりは醬油のことも一般にたまりと云ふ。○参らば。「参らせば」ではあるまいか。即ち「参らせばよきに」でたまりも持つて来るとよかつたのですけれどこの意か。○芋桶。紡いた芋を入れる桶。○紫の革足袋。昔風の女足袋である。「都風俗鑑」卷二に足袋は白革にして紫足袋をはくものは、とつと氣のとほらぬ御方なり云々。明石物語に云「たびは白なめしよし、むらさきはむさし」とあれば、延寶の頃に至りては紫足袋やゝすたれたるならむ(骨董集上)。○さられた時。離縁せられた時。「暇の状」はその際に於ける例の三くだり半である。○其道知る。○其道知る。○其道知る。○其道知る。或は「知れる」とするか。○何をか隠すべし。「何をか隠すべし」とあるべきところ。○脇へは行かじ。「脇へは行かせじ」で、即ち他所へは縁附させないの意か。或はわが執着心は魂魄此世にとどまつて脇へは行かす、お前につき纏つて崇つてやるの意か。どちらでもとれる。○もだくと上氣。感情の昂ぶるさま。胸のどきどきとして顔の熱くなる様子。○一段の出合所。一段とよき鱗曳の場所。○拔参。主人又は父兄に無断にて伊勢参宮する事。「伊勢に拔参りと云ふ事、昔よりありと見ゆ、奇異雜談に文明年中のことを記して山崎にある人の下人、暇を乞はすして伊勢参宮を致す云々」(嬉遊笑覽、五)○悪かるまじき。悪くはあるまい。好もしかるの意。○而も男振じや。その上に男振が良いぞ。○物も書きやりますか。字も書く事がお出来ですか。當時は無筆の者が多かつたからである。○後さがり。髪結びの當世風なるを云ふ。○守口牧

方。大阪から二三里の行程の驛である。○取ませて談合。いろ／＼と話題に秩序もなく相談するのである。

【評釋】 前段の如く眞に「此噂が仕掛さても／＼戀にうとからず」で、海千山千のしたたか者であつた。おの／＼に手を引かれて自分の小家に立戻つたとあつては、ます／＼此女の圖太さが覗はれよう。而して、第二の方策を考へてゐるうちに夜が明けた。

「隣に火打石」以下は曉方の叙述には相違ないが、初めの書出しは明らかに此妻を主體として隣家の有様に筆を附けてゐる。しかるに「紙帳もりて云々」からは、隣家が主體の位置にいつの間にか乗込つて了つた。無頓着な筆觸と云はねばならぬ。しかし、この一節は下層階級の實生活の一面が明彩に、且深刻に寫し出されてゐる。たゞ例の如く、筆力の悪達者は當面の描寫を外してあらずもがなの叙述にまで脱線したのである。

「やう／＼朝日輝き」で筆は正しきに復歸し、婆さんの根柢の第二過程を叙する。この場合、頭痛鉢巻で煎薬を飲むのは至れり盡せりで、婆さんの狂言も懲得の道伴れでなく、やはり好者の好奇心が多分に手傳つてゐる事を思はせる。「藥代の當所もなく」はびりりと響くと共に、微苦笑を禁じ得ない。

さて、そこへ當のおせんが顔を出す。女主人公が直接に作中に現はれた最初であるから、普通の作家なら、彼女の容姿に就て何かしら形容の麗句があるべき所である。然るに西鶴は第一章で「耳の根白く」と叙しただけで、あとは樽屋が有頂天に迷つてゐると云ふ事實に凡てを託して、一言半句の美女禮讃をも敢てしなかつたのは、さすがに斯界の豪の者たるを思はせる。實際、これまでの説話は讀者を騙つて、おせんの容色を髣髴せしむるに十分の準

備を以て既に進行しつゝあるのである。

おせんの場合には普通の女らしい女として寫されてゐる。婆さんの手管により口車に乗つて、靡き心になると云ふのも自然にうけ容れられる。婆が哀つばい言葉で、忘形見にと取出す品々の正體には驚かされるが、西鶴なかに味な藝を見せると云ふ感じは深い。此中に「さられた時の暇の狀ありしを、是はとつて捨て」は、いつも乍らの諷刺で、拍手の興を喚び起す底の筆と云はねばならぬ。おぼこ氣のおせんを籠絡するには婆の手腕は餘りに強い。力まける位で、易々と事件は解決する。最初から婆が自信を仄めかした如く、彼女とおせんでは相撲にはならぬ。この氣分は讀過するものゝ誰しもに觀取せられるであらう。

かくして説話は急激に展開して拔參りの下相談にまで進捗する。おせんが「逢はぬさきより其男にこがれ」心になつたのは若い女、しかも物固く嫉られてゐるとは云へ教養の淺い女性の常として無理もない事である。此節の終り頃に見えるおせんの言葉はとりも直さず婆をして完全に凱歌を奏せしめた證左である。而して「談合するうちに後に、中居の久米をしておせんを呼びに來らしめたのは、時間的経過を忖度させるもので、此際適確に肯定し得ると思ふ。いかにおせんが、話に夢中になつて、空想やら豫感やらで氣もそゞろになつてゐたかが想像される。いよ／＼十一日の事と申し残して」歸る彼女の後姿には、いそ／＼とした軽い足どりまでが見えるやうである。

三、京の水もらさぬ中忍びてあひ釘

朝貌のさかり、朝詠はひとしほ涼しさもと、宵より奥さまのおせられて、家居はなれしうらの垣に腰掛をならべ、花氈しかせ重菓子入に焼飯、そぎやうし、茶瓶わたするな、明六つすこし前に行水をするぞ、髪はつみつをりに、帷子は廣袖に桃色のうら付を取らせ、帯は鼠繻子に丸づくし、飛紋の白きふたの物、萬に心をつけるは隣町より人も見るなれば、下々にもつぎのあたぬかたびらを着せよ、天神橋の妹が方へはつねの起時に乗物むかひにつかはせよと、何事をもせんにまかせられ、ゆたかなる蚊帳に入給へば、四つの角の玉の鈴音なして寝入給ふまで、番手に團の風靜なり。我家のうらなる草花見るさへかくやうだいなり、惣して世間の女のうはかぶきなる事是にかぎらず。亭主はなをおごりて、鳴原の野風新町の荻野、此二人を毎日荷ひ買して、津村の御堂まいりとして、かたぎぬは持せ出しが直に朝ごみに行よし見へける。

【語釋】 ○京の水もらさぬ中、忍びてあひ釘 水も漏らさぬ仲とは夫妻の交情の密なるを譬へる語。あひ釘のあひは逢ふの意に掛けた言葉。而していづれも椽屋の商賣の桶に縁がある。それに「京」の字を冠させたのは椽屋とおせんとの初契が京の宿にあつたからで、それをこの章の標題の文句としたのである。 ○涼しさも 涼しさもまさるの意。 ○おせられて 仰せられて。

○重菓子入 重箱の菓子入。 ○そぎやうし 削楊枝。 ○明六つ 朝の六つ時、今日の午前六時。 ○つみみつをり つみは

ついで、「ざつ」との意。みつをりは「三折返し」の略で。結髪の種類。元結一寸、髷一寸、はげ先一寸と三つに折る故に云ふ。
 ○ふたの物 二幅物の事で、女の腰巻。 ○つぎの當らぬ 纏いでない。即ちしきの當てない。 ○ゆたかなる蚊帳 廣々とした蚊帳。 ○番手に 替り番に、即ち替り合つて團扇で煽ぐのである。 ○やうだい 仰々しい。大げさに事をする。 ○うはかぶき 浮華虚飾、みえをかざること。 ○島原 (既出)島原は京、新町は大阪の遊里である。野風、萩野は當時の名妓の名。 ○荷ひ買 かたみ違ひに買ふのである。 ○津村の御堂 本願寺別院。 ○かたぎぬ 肩衣、繼上下。素袍の袖をさりたるもの。 ○朝ごみ 朝込。朝、廊の門の開くの待つて入る。

【評釋】 暮向に苦勞のない、當世のブルジョア階級が、贅澤三昧な生活様式の一面を寫したのがこの一節である。我家の裏庭に咲く朝顔を眺めるだけの準備がこれである。作者の言葉を取りて云へば斯く「やうだい」である。例の誇張もあらうけれど、これに似寄りな驕奢と華美とは、當代の餘裕ある町人社會には有り勝な事象であつたらう。花見場所のしつらひ、食べもの用意、行水結髪衣裳の好み。さては妹を迎への乗物の世話までの事々しさ。而して四隅に涼しき鈴の音する廣々とした蚊帳に入つてからは、腰元どもに寝入るまで團扇の風を送らしめる。いかにブルジョア氣分の横溢した叙述と云はねばならぬ。

「朝貌のさかり、朝詠めは一入涼しさもと、宵より奥様の仰せられて」云々と書き出したこの文情を、一應とくと玩味して、その妙趣を十分に鑑賞したいと思ふ。而して、われ／＼はこの格調——文章の旋律とでも云ふべき——の一種の調子を、明治の作家樋口一葉に見出すのである。一葉が西鶴の文趣を會得してゐた事は今更に持ち出すまでもないが、この表現上の一つのスタイルはかろ／＼しく看過し難いもの一つと考へる。猶、この裏庭の花見の行文はそつくり(二三語句の修正はあるが)、取つてもつて、享保時代の作家江島其磧が「世間娘氣質」の「世間に隠れない寛潤な嬌娘」の條に利用してゐる事に注意した。

さて、かゝる華奢な妻君を持つた亭主は如何と見れば、京と大阪との遊里で交み替りのたゞら遊に耽つてゐる。それでも妻君に氣兼があるのか、お寺詣りの口實の下に肩衣まで持ち出しての隠れ遊びである。いづれ太平に化育された類唐の人々ではあるが、所謂元祿時代に於ける浪華町人の片影が捕捉されてゐると思ふ。

これは一般の有産階級が消閑の事相としての反映に相違ないが、この場合、作者は女主人公おせんの仕事の主人家の實生活の投影として持ち出してゐるのである。

八月十一日の曙まへに彼横町のかゝが板戸をひそかにたゞき、せんで御座るといひもあへず、そこ／＼にからげたる風呂敷包一つなげ入てかへる。物の取おとしも心得なく、火をともししてみれば、一匁つなぎの錢五つ、こま銀十八匁もあるふか、白突三升五合ほど、鯉節一つ、守袋に二つ櫛、染分のかゝへ帯、きんすゝたけの拾、あふき流しの中なれるゆかた、うらときかけたる木綿たび、わらんじの緒もしどけなく、加賀笠に天満堀川と、無用の書付とよこれぬやうに墨をおとす時、門の戸を音信、かゝさま先へまいると男の聲してひ捨て行、其後せんが身をふるはして内かたの首尾は只今といへば、かゝは風呂敷を提て人しれぬ道をはしり

すぎ、我も大義なれ共神の事なれば伊勢迄見届てやるふといへば、せいのやな貌して、年よられて長の道思へば
 及びがたし、其人に我を引合せ、兎角伏見から夜船でくだり給へと、はやまき心になりて氣のせくまゝい
 そぎ行に、京橋をわたりかゝる時、はうばいの久七、今朝の御番替りを見に罷りしが、是はと見付られしは是
 非もなき戀のじやまなり。それがしもつね〱御参宮心掛しに、ねがふ所の道づれ、荷物は我等持べし、幸
 遣錢は有合す、不自由なるめは見せまじとしたしく申は、久七もおせんに下心あるゆへぞかし。かゝは氣色を
 かへて、女に男の同道、さりとは〱人の見てよもや只とはいはじ、殊更此神はさやうの事を堅く嫌ひ給へ
 ば、世に耻さらせし人、見及び聞傳へしなり、ひらに〱まいりたまふなといへば、是はおもひもよらぬ事を
 改めらるゝ、さらにおせん殿に心をかくにはあらず、只信心の思ひ立、それ戀は祈すとも神の守給ひ、心だ
 にまことの道づれに叶ひなば、日月のあはれみおせんさまの情次第に、何國迄もまいりて、下向には京へ寄て
 四五日もなぐさめ、折ふし高尾の紅葉、嵯峨の松茸のさかり、川原町に且那の定宿あれどもそこは萬にむつか
 し、三條の西づめにちんまりとした座敷をかりて、おかゝ殿は六條参をさせましよと、我物にして行は、久七
 がはまり也。やう〱秋の日も山崎にかたむき、淀堤の松蔭なかばゆきしに、色つくりたる男の人まぢ貌にて、
 丸葉の柳の根に腰をかけしを、ちかくなりてみれば申かはせし樽屋なり。不首尾を目ませして、跡や先になり
 て行こそ案の外なれ。

【語釋】

- そこ〱に 心せくまゝに大ざつぱに結びたる也。 ○物の取落しも心得なく 必要品を入れ落してゐるかも知れな
 いと云ふ心づかひを現はした言葉である。「心得なく」は「心もさなく」即ち不安心の意であらう。 ○こま銀 細銀、即ちは
 した錢のこと。 ○白突 白米。よく搗き白げたる米。 ○二ツ揃 前髪に二つ並べてます。 ○かゝへ帯 抱帯、今の扱帯(し
 こき)。 ○きんすゝたけ 銀煤竹である。 ○中なれ 中古になつたもの。 ○加賀笠 加賀より産出する笠。「天和の頃より
 大名衆女の用に加賀の菅笠を用ふ」(我衣)とあるが、一般の女も用ひたと見える。 ○無用の書付 この場合、住所などは書か
 ない方がよいから無用と云つたのである。 ○夜船 京の伏見と大阪八軒屋とを往復する船。一夜船とも云ふ。 ○まき心 隨
 伴する者を途中で「おいてけぼり」にするをまくと云ふ。辨はこの際、邪魔になる故中途で別れさせようと思ふおせんの手持であ
 る。 ○御番替 幕府直轄の城地に於ける城代の交替を云ふ。 ○此神は云々 天照大神は不義密通などはお嫌ひだとの意。
 ○世に恥さらせし人 伊勢参宮の途次、密通せし男女は神罰にて兩體離れずとの俗説。後の書ではあるが「きくのまに〱」の
 天保元年の條に、この實話を擧げ「せんすべなく長櫃に二人を入れて國許へ送れる」と誌してゐる。徳川期通じての俗説である。
 ○改めらるゝ 吟味穿鑿なさるの意。 ○心だに 「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとも神や守らむ」の歌を取り入れたので
 ある。この歌俗に菅公の詠と云ひ慣はす。 ○下向 歸り道。 ○ちんまり 小さくして整つたの意、「小ちんまり」とも云ふ。
 ○六條参 西本願寺か。 ○はまり 陥るの義にて、散財するの意である。 ○山崎 京街道の里、それと秋の日も山の崎に傾
 きと時間をも掛けたのである。 ○色作りたる男 洒落れた男。 ○目ませ 目くばせ。目色で心を知らせる。

【評釋】

この一節は拔参りの當初を敘してゐるが、作者はかなりトリツクを用ひてゐる。この場合に於ける核心た
 る世間馴れた娘が、おせん、久七、樽屋の三人へのそれ〱の心くばりは巧みに取さばかれてゐる。旅なれぬおせ

んがおどくしたやうな様姿で、投げこんだ風呂敷包の中味の亂雑さには、心忙しい焦燥と懸念との間に整へた品々である事も揣摩される。それを嫌が「物の取落し」もと氣をつけるところはいかにも自然であり、笠に書いた天満堀川の文字を洗ひ落すのは特に際立つて鮮かな手法である。嫌が、若いおせんの「氣が利いて間の抜けた」この所作を苦笑してゐるさまさへ浮き出して來よう。

さておせんが「年よられて長の道」云々と、お爲ごかしに嫌を邪魔者扱ひにして、所謂「まき心」になるのも面白いが、そんな幼稚な口車に乗るやうな嫌ではない。默笑默殺で随いて行く。而して久七の意外な出現に會ふや、忽ち「氣色かへて」排斥を企てる。彼女の本領はこゝにある。嫌は自分で建てたプログラムを嚴守するには、極めて誠實なしかも邁進的な女である。樽屋への取持も、おせんの「まき心」の默殺もまた久七排斥も、すべてが自己の献立中心によつて取捨してゐる。一種の「我」の女である。

久七には他を省察するだけの餘裕はない。行き當りばつたりの男らしい。おせんの抜參りを偶目して突如として豫定を企劃したのである。彼れは全く自己流義の空想兒にすぎない。現實家の嫌と空想兒の久七では、平行線に進むより仕方はない事になる。彼等は勝手氣儘に、それく徑路を動き出した。そこには人待ち顔の樽屋が淀堤の丸葉柳の下かげで首を長くしてゐた。

猶また、この節に於ける人物の點出方法は巧みに取扱はれてゐる。おせんの周章した氣味合を初めとし、次にはおちついた樽屋の出立、それから偶然が生んだ久七との出會、それく別趣を具へて、各自が活々と寫され、そ

れらを對象として嫌が、すべてを締めくくつてゐる。この事相の展開推移と、中心點の不動とには看過すべからざる巧緻が介在する。

かゝは樽屋に言葉をかけ、こなたも伊勢參と見へまして然もおひとり、氣立もよき人と見ました、此方と一所の宿にと申せば、樽屋よろこび、旅は人の情とかや申せし、萬事たのみますといへば、久七中々合點のゆかぬ貌して、行衛もしれぬ人を、ことに女中のつれには思ひよらすといふ、かゝ情らしき聲して、神は見通し、おせん殿にはこなたといふ兵あり、何事か有べしと、かしま立の日より同じ宿にとまり、おもわくかたらずきをを見るに、久七氣をつけ間の戸しやうじをひとつにはづし、水風呂に入てもくび出して覗、日暮て夢むすぶにも四人同じ枕をならべし。久七寝ながら手をさしのばし、行燈のかはらけかたむけ、やがて消るやうにすれば、樽屋は枕にちかき蓋蓋をつきあげ、秋も此あつさといへば、折しも晴わたる月四人の寢姿をあらはす。おせん空船を出せば久七右の足をもたす、樽屋是を見て扇子拍子をとりに、戀はくせもの皆人のと曾我の道行をかたり出す、おせんは目覺して、かゝに寢物がたり、世に女の子を産ほどおそろしきはなし、常々おもふに年の明次第、北野の不動堂の御弟子になりて、すへくは出家の望と申せば、かゝ現のやうに聞て、それがまし、思ふやうに物のならぬうき世にと、前後をみれば、宵にし枕の久七は南かしらに(七字略)ゐるは物參りの旅ながら不用心なり。樽屋は(二十字略)むねなる貌つきおかし。夜の内は互に戀の關をすへ、明の

日は相坂山より大津馬をかりて、三ぼうかうじんに男女のひとつにのるを、脇から見てはおかしけれ共、身の草臥くさび或は思ひ入れば、人の見しも世間もわきまへなし。おせんを中に乗のりて樽屋久七兩脇りょうわきにのりながら、久七おせんが足の指先を握れば、樽屋は脇腹に手をさし忍びくたはむれ、其心のほどおかし。

【語釋】 ○旅は人の情 諺、「旅は道伴れ世は情」など。 ○神は見通し 神様は何でも見通してお出でなさる。即ち神様の眼をこまかす事はできないから陰で悪い事はできないの意。 ○こなたと云ふ兵 賞方と云ふ、しつかりした男。 ○何事かあるべし 何事かあるべき。 ○かしま立 旅立の事。旅立する前日に阿須波神を祭る。この神は鹿島に鎮座ある故、かく云ふ。『雑長持』による。 ○すきを見るに 隙を見るに、即ち、よい機会を窺ふに。 ○水風呂 浴湯。桶風呂である。 ○行燈の土器 油皿のこと。 ○戀は曲者皆人の 「さりとても、戀は曲者皆人の、迷の淵や氣の毒の、山より落つる流れの身、云々」(近松、『世繼會我』虎の將道行三段目の文句)。 ○關を据ゑ 逢坂の關を利かせた文辭である。 ○寶荒神 馬の背の左右に杵を結び中央に一人乗り、その兩脇に一人づゝ乗るを云ふ、三寶荒神はもみ佛法僧の三寶を守護する神の名であつた。 ○人の見しも世間を辨へなし 妙な表現であるが、人が眺めても一向かまはないでゐたの意であらう。世間に對して是非辨別の念のない事を云つたものと思はれる。

【評釋】 此のかゝの樽屋への話し懸けは馴れ切つたものである。久七の不満をおつかふせて「神は見通し」を云つてのけるあたりは前節に於ける久七の言葉と照應して、その老獪さが著しく目に立つ。

一體、此節はそれ／＼の人物のそれ／＼の計畫が交互に喰違つて、そこから浮き上る悲喜劇風の場面の連続である。而してそれに對する諷諷とも擲論とも付かぬ作者一流の微苦笑がこゝに横溢してゐる。宿屋や道中の具象的敘述も彼にしては穩やかではあらうが、多少の脱線氣味も否定できない。

此場合のおせんが寢物語の言葉の如き、御挨拶至極なもので、批評の限りでなく、これに對する嬾の返事は相不變人を喰つてゐる。但、「現のやうに聞て」の一句は、點じ得て妙と云ひたい、要するに、特殊場面の描寫として相應の効果を收め、部分々々の印象はかなり鮮明に反映してゐる。所詮、この一節では、る、達者に書きのめしてあると云ふ感じが極めて強い。

いづれも御參宮の心ざしにあらねば、内宮二見へも掛す、外宮ばかりへちよつとまいりて、しるし計におはらひ串若和布を調へ、道中兩方白眼あひて、何の子細もなく京迄下向して、久七才覺の宿につけば、樽屋は取替し物共目のこ算用にして、此程は何分御やつかに成ましてと、一體いふて別ぬ、久七今は我物にして、それ／＼のみやげ物を見出して買てやりける。日の暮も待ひさしく、烏丸のほとりへちかしき人有て見舞しうち、かゝはおせんをつれて清水さまへ參るのよし、取いそき宿を出てゆきしが、祇園町の仕出し辨當屋の釣簾に、付紙目印に錐と鋸を書置しが、此内へおせん入かと思へしが、中二階にあがれば樽屋出合、すゑ／＼やくそくの盃事して、其後かゝは箱階子をりて、爰はさて／＼水がよいとて、せんじ茶はてしもなく呑にける。是を契のはじめにして、樽屋は畫舟に大坂にくだりぬ、かゝおせんは宿にかへりて、俄に今からくだるとい

へば、是非二三日は都見物と久七とどめられ共、いや／＼奥さまに男ぐるひなどしたとおもはれまははいかと、出て行く。風呂敷包は大義ながら久七殿頼といへば、かたがいたむとて持す、大佛稻荷の前、藤の森に休し茶の錢も、銘々拂ひにしてくだりける。

【語釋】

○内宮二見へも掛けず 内宮(天照大神)や二見の浦の方へは行かすの意。「掛くる」と云へば、ついでにその方面へも出向く事である。○外宮 豊受大神を祀る。○おはらひ串 お祓串。○才覺 こゝは肝煎、世話する意。○日のご葬用 目先で敷へる。大體の葬用で、正確を期したものではない。○見出して それ／＼に似合しい物を見立てるのである。○付紙 籠に紙切をつけておく。豫め約束してある證據である。籠と銘を書いたのは櫛屋をあらはしたものである。○末々約束 末々までの約束の意で、この至事は夫婦の契約のしるしである。○大佛 五條の東、今豊國神社のある所、大佛殿方廣寺。○稻荷山城、紀伊郡深草村稻荷山の麓にある社、倉御魂命、素戔鳴命、大市姫命を祀る。○藤の森 伏見藤の森神社のある所。

【評釋】

伊勢参宮に出かけながら、外宮ばかりで引返したのは、よく／＼氣づまりな旅であつた。娘が味方に附いてゐるだけ櫛屋は利口らしく立廻つてゐる。祇園町の忍び宿は、當初のプログラムにはなかつたであらうが、どこまでも結ぶの神を以て自任する娘が、臨機即ち妙の處置がこゝに導いたのである。旅立の初め、おせんの「まき心」をそのまゝにして同行したのは、長い道中を通じて、自分の立てた筋書どをりに、若い二人を操つて行く根柢であつたらしい。尤も久七の突然の出現が、すべてを畫餅に歸せしめたけれど、それだけ久七には辛辣に反撥して、痛

快に復仇(?)した結果となつてゐる。かのいもりの黒焼を弄んだ時から、たゞの夢ではなかつたのである。彼女が怒得づくの取持でないと廣言してゐる通り、若い二人の道中の享樂を、自分自らも第三者の位置から享樂したかつたのである。そこに「いたづら娘」の本領がある。「煎じ茶はてしもなく呑む」所作は、西鶴の興味本位の敘述でもあらうけれど、この娘にしては適切な極みである。

久七にとつては無用の神詣であつた。歸り路の風呂敷包に肩が痛むとて持たなかつたのは、もつともの次第で、彼の役柄はさしづめ道化役と云ふ格である。

さて、此章は抜参りを背景として、かの娘の肝煎により、おせんと櫛屋との仲が結ばれる場面が中心をなすものであるが、豫定を裏切つた思はぬ邪魔のために、すらく／＼と事が運ばないで、辛うじて所期の(標的)に事件は落ちついたのである。作中の人物としてよく動いてゐるのは、云ふまでもなく娘であるが、作者の感興が道中の宿驛にあつた事は極めて明白である。

たゞ、此節の初段、朝顔の花見は、單に當代ブルジョア階級の驕奢寛濶を描寫しただけのものか、或は他に作者の意圖があつての敘述が、判然しない。もし時代相の一面を提示するにおせんの主家を以てしたのみならば、必ずしもこの章の冒頭に置くを要しない。即ちこの場合に於ける存在の意義はかなり稀薄になつて来る。もし又、おせんが抜参の朝の出来事と解すれば、極めて緊密な契機を生じて来るけれど、それにしてはさう思はせるだけの力に乏しい。換言すれば、花見の忙しいどさくさ紛れに、おせんが飛出したと見るには、敘述が不確である。それだけ

奥様の朝顔の話と亭主の遊蕩との話とは、拔参事件から離れすぎてゐるのである。この場合、密接なるべき有機的統一を示す二三の文字を要求したいと思ふ。

四、こけらは胸の焼付さら世帯

参るならばまいると内へしらして参ば、通し駕籠か乗掛でまいらすに、物好なるぬけ参りして、此みやげ物はどこの錢でかふたぞ、夫婦つれだちてもそのくそんな事はせぬぞ、やうもく二人づれで下向した事じや迄、久七やせんが酒迎に寢所をしてもらせ、あれは女の事じやが、久七がすゝめて智慧ない神に男心をしらすといふ物じやと、お内儀様の御腹立、久七が申わけ一つも埒あかず、罪なふしてうたがはれ、九月五日の出替をまたず、御暇申て其後は北濱の備前屋といふ上問屋に季をかさね、八橋の長といへるはすは女を女房にして、今みれば柳小路にて鮮屋をして世を暮し、せんが事つゝわすれける。人はみな移氣なる物ぞかし。

【語釋】 ○こけら 次に焼付とあるからこゝでは「削り屑」、「木片」の意。椽屋の商賣に縁ある語。 ○通し駕籠 目的地まで駕籠を替へぬこと。 ○乗掛 乗掛馬のこと。駄馬の荷を二十貫として一人乗るのである。 ○酒迎へ 旅歸りの者を迎へて祝ふこと。もとは「境迎へ」で村境まで迎へるのであつた。それが京都では逢坂山まで迎ひに行つたので「坂迎」と云つたと『嬉遊笑覽』に見える。「坂迎」「酒迎」は音通で、後者には祝宴の意までこめてある。 ○あれは女じやが あれはおせんので、おせんは女だから仕方がないの意が含まれてゐる。 ○智慧のない神 おせんを指す。「智慧のない神に智慧をつける」と云ふので、この

智慧は色情を云ふ。 ○出替 奉公人の交替時期。 ○八橋の長 八橋は地名、長は女の名。 ○蓮葉女 問屋などに抱へられ
てゐる炊婦、實は賣色である。「難波の浦は日本第一の大湊にして、諸國の商人爰に集り、又上問屋下問屋敷を知らず、客馳走
のために蓮葉女と云ふ者を拵へ置ぬ。是は飯徒女の見よげなるが下に薄綿の小袖上に紺染の無紋に黒き大幅帯、赤前垂和髪に京
弁伽羅の油に固めて細緒の雪駄延の鼻紙を見せかけ其身持それとは隠れなし」(一代男)。

【評釋】 この節は久七の後日譚である。馬鹿を見たのは久七で、お内儀の腹立ちは、「そのくそんな事」や「や
うもく二人連で」の語氣で十分に看取し得られる。久七は遂に居心あしく、出替り前に暇とつて出た。而して北
濱の問屋に奉公してその邊りの抱女と夫婦になつて鮮屋を初めたと云ふ。彼も亦こだはりもなく人の世を流れて行
く漂泊の群の一人であつた。多くの人間の辿る路はこれである。思ひ込んだ女を忘れるともなく忘れて、微温的な
生活にその日くを暮して行く、蓮葉女を女房にしたと云ふだけで、また柳小路の鮮屋と云ふだけで——伊勢参り
の際の久七の態度を思ひ合せる時——久七と呼ぶ男の全風格が明らかに反映して来るやうに思ふ。かく軽く動い
て、目に見えぬある大なる力に引きづられて行くのが、人間の大多数の踏む徑路で、そこに人生本來の面目がある
やうに思ふ。こゝに於て「人は皆移氣なるものぞかし」の一句が悲しき呪咀の如く耳に響く。

もし、作家西鶴が斯般の消息を闡明するを以て、この作品主題としたならば、即ち樽屋とおせんとの戀の成就を
一方に置いて、久七の辿つた人生を核心とし、こゝに一篇を構成したならば、好個の寫實小説を所産したであらう
と考へるのである。しかし、西鶴は久七を單に客體として以上の如く片をつけ、更に描き足らざるおせんの方を

展開させたのであつた。それはそれとして肯定せねばならぬ。けれど最後に至つて、降つて湧いたやうな事件が樽屋事件を撥ね飛ばして、主體の位置に取つて換つてゐる。筆は先きに走るけれど、その位なら、樽屋と久七との説話だけで纏めて欲しかつたと思ふ。この點は今一度、その事件が現はれた時に觸れねばならぬからこゝではそれを豫告するまでに止める。

せんは別の事なく奉公をせしうちにも、樽屋がかりの情をわすれかね、心もそらにうか／＼となりて、晝夜のわきまへもなく、おのづから身を捨、女に定つてのたしなみをもせず、其さまいやしげに成て、次第／＼やつれける。かゝる折ふし難とほけて宵鳴すれば、大釜自然とくさりてそこをぬかし、突込し朝夕の味噌風味かはり神鳴内蔵の軒端に落かゝり、よからぬ事うちつゞきし。是皆自然の道理なるに、此事氣に懸られし折から、誰がいふともなく、せんをこがるゝ男の執心、今にやむ事なく其人は樽屋なるはと申せば、親かた傳へ聞て、何とぞして其男にせんをもらはさんと、横町のかゝをよびよせ内談有しに、つね／＼せん申せしは、男もつ共職人はいやといはれければ心もとなしと申せば、それはいらざる物好み、何によらず世をさへわたらば勝手づくと、さま／＼異見して、樽屋へ申遣し、縁の約束極め、程なくせんに脇ふさがせ、かねを付させ、吉日をあらためられ、二番の木地長持ひとつ、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の挾箱一つ、奥さま著おろしの小袖二つ、夜着ふとん赤ね縁の蚊屋、むかし染のかつぎ、取あつめて物數廿三、銀二百目付ておくられけるに、相生よく仕合よく、夫は正直のかうべをかたづけ細工をすれば、女はふしかね染の烏を織ならひ、明くれかせぎけ

る程に、盆前大晦日にも内を出違ふ程にもあらず、大かたに世をわたりけるが、殊更男を大事に掛、雪の日風の立時は食つぎを包をき、夏は枕に扇をはなさず、留守には宵から門口をかため、夢々外の人にはめをやらす、物を二ついへば、こちのお人／＼さうれしがり、年月つもりてよき中にふたり迄うまれて、猶々男の事をわすれざりき。

【語釋】 ○假の情 一時的の交情。 ○女に定まつてのたしなみ 女なら誰しもせねばならぬ嗜み。即ち髪容を整へる事。化粧と身嗜みと云ふ。 ○鶴とほけて宵鳴 鶴は曉を告げるもの、それが宵鳴すれば凶事ある前兆と云ふ。釜の底の抜ける、味噌の腐る、(こゝは突込みで大根漬などする標味噌を指す)、落雷、すべて凶兆とする俗説。 ○自然の道理 さう成るべくしてなつたので不思議はないの意。 ○心もとなし 不安心、氣にかゝる。 ○世さへ渡らば 世渡さへ出来れば、生活さへ出来れば。 ○勝手づくと それで十分だ、不足はないの意。「づくと」は「づくと」で、あちらも、こちらも勝手の手義。 ○脇ふさがせ 衣物の脇を塞ぐ。一人前の女の意味。「かねをつく」も商を染めるので、いづれも人妻になる表裏である。 ○あらためる 調査する。 ○伏見三寸の葛籠 嫁入道具の小つづら。伏見産。 ○糊地の挾箱 一團帳である。明の歸化人一團が京都で創めたとも、武野紹鷗が創めたものでその別號一團居士の名をとつたとも云ふ。 ○かづき 被衣。 ○ふしかね染 五倍子で染める。「烏」は綿のこと。 ○内を出違ふ 掛乞(借金取)を避けるために、わざと外出する。即ち節季に青息つく貧乏。 ○大方に世を渡る 相應に暮しを立てる。 ○雪の日云々 寒い頃は、飯糰を包んで冷えないやうにして置く妻の心づかひ。 ○夢々 ゆめ／＼。決しての意。 ○こちのお人 丹那様。物を言へば二つ目には「主人が主人が」を連發する現代で云ふハスノロ(サイン)に對すのである。

【評釋】 前半には戀に窶れたおせんの姿を點出し、それに因んで縁起の悪いくさくを並べあげてゐる。「自然の道理」とは云ふものゝ氣を腐らすのも亦自然である。そこへ梅屋の執心いまだ止まずと云ふ巷の噂を瀝ぎかけた。噂の種を蒔く者として、此際あの噂を聯想させるが、鶏の宵鳴や落雷までを人爲的事實は決しかねる。作者があつさりと言話を進めてゐるだけ、すべてがなるがまゝに繰り展べられて行つたと見るより仕方はあるまい。

主人から嬢へ縁談が持込まれた時、「男持つとも臧人はいや」とおせんが常々申してゐると、一寸氣を持たせる口吻は、この嬢らしくて面白い。どこまでも喰へない婆として現はされてゐる。

おせんの嫁入道具も奉公人らしい。朝顔の花見する主婦の、思遣りある取捌も自然に映つて来る。この主婦の單なる氣取り屋の驕り者でない事は、これまで所々に透見されたが、物持の奥様の風事はこれで十分に掬みとられよう。さきの伊勢参宮の段で、久七を叱りつけたのも、家庭の物堅さを示すと云ふよりも、おせんの可愛さが主であつた事も自ら首肯される。

次でおせんの新世帯であるが、これはいかにも亭主思ひに出来てゐる。曰く因縁付の夫婦である上は、さうあるべき筈と云はねばならぬ。その中に二人まで引つゞき子供が産れる。いよ／＼以ておめでたい。「猶々男の事を忘れざりき」は、その濃情の程度も推し測るに難くあるまい。細纏纏綿と云ふ格である。しかし筆は一轉する。

されば一切の女移り氣なる物にして、うまき色咄しに現をぬかし、道頓堀の作り狂言をまことに見なし、いつともなく心をみだし、天王寺の櫻の散前、藤のたなのさかりに、うるはしき男にうかれ、かへりては一代やし

なふ男を嫌ひぬ。是ほど無理なる事なし、それより萬の始末心を捨て大焼する甕をみず、鹽が水になるやら、いらぬ所に油火をともしもかまはず、身體うすくなりて、暇の明を待かねける。かやうのかたらひ、さりとはく／＼おそろし、死別れては七日も立ぬに後夫をもとめ、さられては五度七度の縁づき、さりとは口惜き下／＼の心底なり。上々にはかりにもなき事ぞかし。女の一生にひとりの男に身をまかせ、さはりあれば御若年にして河筋の道明寺、南都の法華寺にて出家をとげらるゝ事も有しに、なんぞかくし男をする女、うき世にあまたあれ共、男も名の立事を悲しみ、沙汰なしに里へ歸し、あるひは見付てさもしくも金銀の欲にふけて、噎にして濟し、手ぬるく命をたすくるがゆへに、此事のやみがたし。世に神有むくひあり、隠してもしるべし、人おそるべき此道なり。

【語釋】 ○されば「されど」とあるべきところ。○道頓堀の作り狂言 換座の淨瑠璃を云ふ。道頓堀は元和の頃安井道頓なる人、木津川口の荒地を開き、川を堀り南堀と名付け兩側に家を建てた、後この人の法號を用いて地名とした。○藤の棚 大阪谷町筋玉木町の觀音。寺は和勝院、大阪十六番札所。○始末心 儉約の心。○見ず 氣をつかず。甕に無暗と薪を燃すのである。○身體 身代で、財産の意。○暇の明く 離縁されること。○かやうの語らひ かくの加き夫婦仲。○道明寺 河内國南河内郡道明寺にある、眞言宗の尼寺、土師寺とも云ふ、土師氏の建つる所、後、菅原道眞の伯母覺信尼こゝに住す。○法華寺 大和國添上郭佐保村にある眞言律宗の寺。光明皇后の發願による。近世に至り近衛家の姫君落飾して住持となる。○何ぞ「何事ぞや」とあるべきところ。○男も名の立事を悲しみ 妻の不行跡を公にしては夫たる者まで、うき名が立つつのでそれを嫌に思つての意。○或は見付て 見付けてもの意。○噎にして 仲裁人の中にして、幾何かの手切金を取るのであ

る。即ち相手の男から料金を絞るので、懲得づくである。○手ぬるく云々 姦夫姦婦を正當に成敗せず、寛大にして命を助けてやるからの意。○此事 灯通沙汰。○世に神有、むくひあり。「世に神あり報いあり」で、世間には神様がお出でなさるから、それへの應報と云ふものが存在するの意。○人恐るべき此道なり「人の恐るべきは此道なり」で、此道は色戀の道を云ふ。

【評釋】 先きに「人は皆移り氣なる物ぞかし」とて久七の事を中心にして人生の姿を提擧したが、こゝにまた「一切の女移り氣」と疊みかけて、一層熾烈に浮華輕佻の世相を剔抉せんぞ試みたのである。

その敘述たるや、餘りに獨斷的であると思はせる節もあるけれど、當代の上方女、わけて西鶴の眼に映じた町人階級の市井の女性には、この氣風この傾向が、特に鮮やかな姿態を演じたであらう。早く離縁して欲しい人妻、七日たぬに後夫を求める後家、さては金に目が眩んで姦通を黙認する亭主。かゝる頹廢的風潮は時代の反影として家常茶飯事であつたかも知れない。上々には假にもなき事であるとして、道明寺や法華寺などの落飾の姫君を引合に出してゐるが、それは稀有の例外で、滔々たる社會の大勢は西鶴の小説近松の淨瑠璃を顧るまでもなく、口惜しきは「下々の心底」ばかりでなかつたに違いない。さればこそ、放埒至極の此作者までが、教訓味たつぷりの口吻を以つて諷刺したのである。

要するにこゝの一節は當代女性の亂倫的傾向を説破したのであるが、全體の過程から見ればおせんとの結婚生活の平和なる愉悅の境地の後を享け、更に次章に突如としてあらはれ来る大破綻への橋渡しの役目を擔つてゐるのである。

五、木屑の杉やうじ一寸先の命

来る十六日に無茶の御齋申上たく候、御來駕におゐてはかたじけなく奉存候、町家次第不同、麴屋長左衛門。世の中の年月の立(つ)事夢まぼろし、はやすぎゆかれし親仁五十年忌になりぬ。我ながらへて是迄事ぶ事うれし。古人の申傳へしは、五十年忌になれば朝は精進して暮は魚類になして、諺酒もり、其後はとはぬ事と申せし、是がおさめなればすこし物入もいとはず、ばんじその用意すれば、近所の出入のかゝども集り、椀家具盡平るすちやつ迄取さばき、手毎にふきて膳棚にかさねける。爰に樽屋が女房も日頃御念比なれば、御勝手にてはたらく事もと御見廻申けるに、兼て才覚らしく見えければ、そなたは納戸にありし菓子品々を縁高へ組付てと申せば、手元見合、まんぢう御所柿唐ぐるみ落雁榊杉やうじ、是をあらまじに取合時、亭主の長左衛門棚より入子鉢をおろすとて、おせんがかしらに取おこし、うるはしき髪かみの結目たちまちとけて、あるじ是をかなしめば、すこしもくるしからぬ御事と申(し)て、かい角ぐりて寮所へ出けるを、かうじやの内儀、見とがめて、氣をまはし、そなたの髪は今のさきまでうつくしく有しが、納戸にて俄にとけしはいかなる事ぞといはれし、おせん身に覺なく、物しづかに旦那殿棚より道具を取おとし給ひ、かくはなりけるとありやうに申せど、是を更に合點せず、さては晝も棚から入子鉢いれこのをつる事も有(る)よ、いたづらなる七つ鉢め、枕せずにはしく寝れば、髪はほどくる物じや、よい年をして親の弔ひの中に、する事こそあれと、人の氣つくして盛形さしみをなげこぼし、酢にあて粉にあて、一日此事いひやまず、後は人も聞耳立て興覺ぬ。かゝるりんきのふ

かき女かきめを持合もあはすこそ、其男の身にして因果なれ。おせんめいわくながら聞暮きんぼせしが、おもへばくにくき心中、とてもぬれたる袂たもとなれば、此うへは是非におよばず、あの長左衛門殿になさけをかけ、あんな女に鼻あかせんと思ひそめしより、各別かくべつのこゝろざしほとなく戀となり、しのびくくに申まはし、いつぞのしゆびをまちける。

【語釋】 ○木屑の杉やうじ 椽屋の商賣を利かした言葉。「一寸先」は杉やうじの縁語で、一寸先は問同然人の命もわからない意。 ○無菜 菜のなき事、副食物の少ない事を云ふ。 ○御齋 齋は僧家にて食事の稱である。食すべき時の食の義である。正午以前に食するを法とし、午後には食するを、時ならぬ食としこれを非時と稱ふ。こゝでは御齋と云つたのは法事の時の膳部のこと。即ち「無菜の御齋」申上たたくとは、何もありませんが法事の饗を差上げたいの意である。 ○「来る十六日……辱く奉存候」これだけは招待状の文面。「町衆次第不同」は招待する人名を書きならべて順次不同と斷り書した體。麴屋長左衛門はこの招待状の差出人の名である。 ○夢まぼろし 元來は無常迅速の「如夢幻泡影」であるが、こゝは月日のたつ事の早きに喩へてゐる。 ○これ迄早ふ事 五十年忌まで替む事である。 ○精進 野菜のみ食ひて肉食せぬこと。「精進の料理は大方致したれども魚類の義は心許なうござる」(狂言「俄道心」)。 ○其後は問はぬ事 その後は何をしてもよい、即ち無禮講にあつても關はぬと云ふ意。 ○おきめ 納め、即ち五十年忌が、子として替む最後の法事の意。 ○すこし物入もいとはず 少しの物入の意で、少々ぐらゐ費用がかゝつても關はないのである。 ○椀、家具、壺、平、るす、ちやつ、この内、壺は壺皿。平は平椀。るす(豆子)は深い猪口。ちやつ(椀)の字の宋音なるべし。(「嬉遊笑覽」は銘々盆、大にして淺く底に糸尻ある朱塗の木皿。 ○御勝手 臺所のこと。 ○働く事も 働く事もあらば御手傳ひ致しませうの意。 ○兼ねて才覺らしく 平常から利發らしく。

○納戸 衣服器具など納めおく室。 ○椀高 椀高折敷のこと、折敷の縁の高きもの、菓子を盛る器。 ○手元見合 「手元を見合せ」で、種類と分量とを見渡して、その取合せを考慮するのである。 ○唐ぐるみ 唐胡桃。 ○落雁 乾菓子的一種。「落雁、食菓」書(言字考、節用)。 ○入子鉢 小鉢の入子になつてゐるもの、「七ツ鉢」とも云ふ。 ○あるじ 長左衛門。 ○少しも苦しからぬ御事 おせんおせんの言葉。「いゝえ、かまいませんわ」の語氣。 ○かい角ぐりて 「かい」はかきで接頭語。角ぐるは束ねること。手早にぐるぐと束ねたのである。後の「角ぐり器」と云ふが如き足つた型のものではない。 ○あり様 事實のまゝ。 ○「さては晝も」から「ある事こそあれ」までは麴屋女房の言葉。 ○徒らなる みだらなの意。 ○けはしく 荒々しく。 ○人の氣盡して盛形さしみ 人が苦心して盛つた盛形のさしみの意。 ○酔にあて粉にあて 「何につけ彼につけ」で、事々に當りちらす様子を喩へたのである。この外、「酔にひき粉にひき」(徒然醉が川)。「酔につけ」(長町女腹切)など同様の諺である。 ○とても濡れたる袂 とてもは「いつそのこと」。濡れたる袂は普通に濡衣と云ふ。無實の罪、主として翻罪を云ふ。「名にしおはゞ仇にぞあるべきたはれ島浪の濡衣きると云ふたり」(伊勢物語)。また「倭訓栞」には「案ずるに日本紀に濡をかづく」と讀み今もなき名頁はするをかづけると云へり。さればかづく游人は皆濡衣きたれば活名を被ふるなどいふ意に、海人のかづきによせてぬれ衣とは云ひそめたるなるべし。故事にはあらず、後撰集に身にぬれ衣はひる事もなしとよめるも、ぬれ衣さいひしより乾るともよめるなるべしとある。 ○是非に及ばず 元來、「仕方がない、己むを得ず」の意であるが、こゝは、もつと力強い心持が漲つてゐる。むしろ「どうしても」の意である。 ○鼻あかす だしぬく。意表に出でて相手を失望させる。 ○各別の心ざし この特殊の心理状態。 ○いつぞの首尾 いつかよい機會。

【評釋】 初めに麴屋の招待状を突如として點出したのは面白い手法である。尤も西鶴の筆癖の一端、時々用いたものではあるけれど、やはり興趣にかはりはない。(日本永代藏卷三「世間の借屋大將」の借家請狀や本朝二十不孝卷

「旅行の暮の僧にて候」の雪やこんくの唄の點出法などは、その一例である。

次で麴屋の親仁の五十年忌の法事のどさくさを寫し、近所のお神さん連中が手傳に押しかけるところから、「爰に樽屋の女房も」と女主人公をあらはして、「御勝手に働く事も」ありますれば、行届きませんが何なりと御手傳をと、いかにも謙虛な態度を揣摩させるやうな筆致は、後段の狂瀾の大事件に照應する時、いかにも老獪な叙述であると云はねばならぬ。

しかも、「かねて才覺らしく見えければ」とおせんが日頃近隣に與へてゐる印象を活々と蘇へらせ、芋や牛蒡を煮たきする臺所の仕事を當てがはず、菓子配合と云ふ比較的格の高い方面を擔當させる。こゝもおせんの人となりが見透かされるやう、作者は注意を拂つてゐる。然るに偶發的事件が案外の結果を結んだ。小鉢が落ちて髻が解けたのである。何でもない、ほんの些細な事件にすぎない。しかし「時」と「處」とが悪かつた。運命の神の戯れとも云はうか、生憎と麴屋のお神さんの「人」も悪かつた。

麴屋のお神さんの露骨な言葉づかひと、氣狂じみた所作とには、ヒステリー式の年増女が十分に現はされてゐる。「酔にあて粉にあて、一日この事言ひやます」は彼女の風手寫し得て餘りありである。ちと脱線的ではあるが、事實世間にはこの種類のわからずやの女がゐるものである。これでは、何も事情を知らない人まで、「聞き耳立てゝ興覺」ますのが尤もであらう。眞に、「かゝる格氣の深き女を持ち合はすこそその男の身にして因果なれ」と云はねばなるまい。

さて、おせんはどうか、初めは「身に覺えなく、物靜かに」事實どほり説明した。それでも麴屋の女房は承知しな

い。そこで「迷惑ながら聞き暮せしが」、その誹謗と狂暴とには、強いて押へつけてゐた肝の虫も押へきれなくなつた。遂には「思へばく悪き心中、とても濡れたる袂」と云ふ反逆心がむくく持ち上げて來たのである。かくして「各別の心ざし程なく戀となつたと云ふ。この頃の作風、描法に望むには無理かも知れないが、この反逆的精神の擡頭と助長とは、あまりに急激にしかも皮相的に取扱はれてゐる。深い教養もない一介の女性おせんが、むらぐと憤慨して、あらぬ方向に心の駒を狂奔させる事相は、そのままに肯定して好いかも知れない。けれどこの心的過程は甚しい飛躍を敢てして、われくは作者から單に結果だけの報告しか享け取つてゐない事になる。この點が少なからず儻りない。

また、さきに、物を二つ言へばこちの人くと嬉しがつた「おせんとしては、此場合樽屋への反省をどうした事であらう斯般の消息に就ては、殆んど觸れてゐない。佛作つて魂入れずの感が深いものと云はねばならぬ。たとへ「一切の女移り氣なるものにして」と、當代女性の一般論は提擧してあつても、當事者おせんの心理的推移には、叙して猶ほ備はざるの甚しきを覺ゆるのである。

貞享二とせ正月廿二日の夜、戀は引手の寶引繩、女子の春なぐさみ、ふけゆくまで取みだれて、まげのきにするも有(り)、勝にあかずあそぶもあり、我しらす駢を出すもあけて、樽屋ももし火消かゝり、男は晝のくたびれに鼻をつまむもしらす、おせんがかへるにつけこみ、ないく約束今こいはれて、いやがならず、内に引(き)入(れ)跡にもさきにも是が戀のはじめ、下帯下紐ときもあへぬに、樽屋は目をあき、あはゞのがさぬと

聲をかくれば、よるの衣ぬき捨、丸裸にて心玉飛がごとく、はるかなる藤の棚にむらさきのゆかりの人有ければ、命からんぐにてにげのびける。おせんかなはじとかくごのまへ、匏かんにしてこゝろもとをさし通し、はかなくなりぬ。其後なまからもいたづら男も、同じ科野しやに耻をさらしぬ。其名さまんぐのつくり、哥まなびに遠國迄もつたへける。あしき事はのがれず、あなおそろしの世や。

【語釋】 ○戀は引手の 引手ひきて数多など云ふ成語もあり、引手は誘ふ人の意であるから、「戀は引手の」とつゞけて、次の「寶引繩」に掛けた言葉である。 ○寶引繩 福引の繩である。「福引、正月索ギ貫錢ツ、下見而引之(運歩色葉集)」。 ○女子の春なぐさみ 女の春(正月)の遊び。こゝは「寶引は女の春なぐさみであるので、夜の更くるまで取り亂して遊び耽り、負けて退くものもあり、勝つて乗氣になり、飽かず遊びつゞけるもあり」の意。 ○いやが成らず 嫌と云はれず。 ○心玉 肝、魂である。 ○藤の棚 大阪東區谷町筋、和勝院の界限を指す。紫は藤の縁語であり。藤はゆかりの色と云ふ。「紫の一本ゆへにむさし野の草はみながらあはれとぞ見る」(古今集、雜上)。 ○心もと 胸もと。 ○科野 科は刑罰、即ち刑場の意。 ○さまんぐの作り 歌。(後段參照)

【評釋】 最後の破綻に相當するのがこの一節である。正月のある日、近所合壁の女達が遊び耽ける一夜の中の出来事として書き込んでゐる。しかし、此の叙述はあまりに粗放である。こゝに寫されたやうな特殊場面を、一層細緻にと、寫實的な描寫を以てせよと云ふのではない。此一篇のカタストロフとしては、その筆致が極めて大ざつぱである。一言もつて云へば、場面の背景を鮮明にして欲しかつたのである。かゝる場合かゝる情景のもとに、かゝる事件が喚起されたとして、三個の人物の行動と心象とが描寫してもらひたかつたのである。この點に於

て樽屋物語の最後の悲劇は、極めて力の緩んだものと化し了つたと思ふ。

それからこの一節で「樽屋も燈火消えかゝり」以下の文章は解りにくい。と云ふよりも無茶な文章である。この點を解明すれば、かうである。まづ「おせんが歸るにつけ込み」の一句が變手古である。歸るとある以上、寶引をした家が樽屋でない事は明らかだ。而して内に引き入れとあるから、長左衛門を引き込んだのである。ところが樽屋が目を開いた。さうすると處はどこだらう。また「晝のくたびれに鼻をつまむも知らず」寢てゐた男は一體何者かと云ふ疑念が起きる。前の「我しらず軒を出すのもありて樽屋も」云々と續いてゐる關係上、とにかく、遊んでゐたその場所に樽屋も寢てゐる筈であるから、面妖な次第と云はねばならぬ。そこで、寶引繩の遊びをした家の出来事と見れば、「内に引き入れ」が、おかしくなる。「内」を「ある部屋」の意に解すれば筋は通るけれど、後の「匏にして心もと刺し通し」とあるので、どうしても樽屋での出来事ではなくてはならぬ。寶引遊びも出来事も樽屋でと解すれば初めの「おせんが歸るにつけ込み」の始末に困る。いづれにしても何處かでガタピンする文章である。それで、かう解する。「我知らず軒を出すもあつた」。と切つて遊び場所と放ち、「さてその頃、樽屋は夜更けの事であり晝の草臥もあつて鼻をつままれても知らずに寢てゐた。遊びに行つたおせんは歸らうと思つて立つと、長左衛門がその機會につけ込んで内々の約束は今だと云ふので嫌さも云はれず、内に引き入れ……」云々を續けて行く。筋を辿る上で、猶異説も立て得るがこれが、一番穩やかであらうか。

さて、第二説話の「おせん」は終つた。

この一篇を見ると構成に於て大なる缺陷が認められる。それは説話の分裂と云ふ事で、全體として統一が保たれ

ておない。具體的に云へばおせんと樽屋との馴れ染めに、久七の横戀慕を加味した場面が四章に亘つて詳叙せられてゐるに拘らず、作品の中軸たるおせん長左衛門の不義の場は、軽々にも四五行を以て叙し去つてある。

かくの如き不調和は短篇小説として存在の意義のないもので、かの「一代男」等の諸作品に見えた連歌的叙述の筆癖が、計らずもこゝに延長されたのであらう、強ひてこの一篇を生かさうとならば「取集めて物數二十三、銀二百目付て送られけるに相性よく仕合よく夫は正直に頭を傾け細工すれば、女はふしかね染の綺を織り習ふ」おせんの新世帯と共に、一方久七が「八橋の長と云へる蓮葉女を女房にして、今見れば柳小路に鉾屋をして世を暮らし、せんが事つい忘れける」と云ふ、世間並の色戀沙汰の結末で筆を收めたならば、こゝに人生の一断片が明瞭に投出されたであらう。これは既にその場面に指摘した通りである。もし、それでなければ樽屋との事件は全部割愛して、麴屋との不義事件のみを取扱ふべきであつた。かの「死別れて七日も立たぬに後夫を求め云々」も數行の文字に、世上の女が浮氣のために隠し男すると云ふ、當代の社會相から類推して、おせんの姦通を豫知せしめんとした後段への渡し込みも、あのまゝでは無力であり、且、全體としての効果も極めて稀薄である云はねばならぬ。要するに、この一篇は、中核たるべき力點を容體として、あらぬ方向に低徊した、緊密を缺く底の作品である。

次におせん事件の文献であるが、「五人女」以前には見當らない。貞享二年正月二十二日、大阪天満の出来事と云ふのが事實に近いものであらうか。

唄物には「松の落葉」卷二、半太夫節に「樽屋おせん狂女跡」あり、西澤一風編の小唄本に「垂井おせん」あ

り、また宮古路豊後の唄本「音曲大全」に「樽屋おせん二重帯昔噂」と云ふ一段物の淨瑠璃があり更に近松徳叟の「名作切籠曙」(享和元年九月、大阪中座上場)などがあるけれど、すべて、おせんの名が現はれるだけで、「五人女」のそれとは似つかしくないものか、全然關聯のない作である。詳叙は避ける。

好色五人女 卷三

目録 中段に見る曆屋物語

一、姿の關守

京の四條はいきた花見有

二、してやられた枕の夢

炎すゆるよりおもひに燃有

三、人をはめたる湖

死もせぬ形見の衣装有

四、小判しらぬ休み茶屋

都に見し土人形有

五、身のうへの立聞

夜の編笠子細もの有

一、姿の關守

天和二年の曆、正月一日吉書萬によし、二日姫はじめ、神代のむかしより此事戀しり鳥のをしへ、男女のいたづらやむ事なし。爰に大經師の美婦とて浮名の立つべき、都に情の山をうごかし、祇園會の月録かつらの眉をあらそひ、姿は清水の初櫻、いまだ咲かざる風情、口びるのうるはしきは、高尾の木末色の盛と詠めし。すみ所は室町通、仕出し衣装の物好み、當世女の只中、廣京にも又有べからず。人のこゝろもうきたつ春ふかくなりて、安井の藤今をむらさきの雲のごとく、松さへ色をうしなひ、たそかれの人立、東山に又姿の山を見せける。

【語釋】 ○吉書 こゝは年始の書き物、又書初とだけの意。吉日に見る文書の義で、公家又は武家にて年始に覽る政務上の文書を云つたものである。 ○姫はじめ 『和名抄』にひめは福標で、註に非米非粥義也とあり、『倭訓栞』にも「饌羞類考曰、福標は即ち平生所」食の飯の類也、古たゞ飯と稱するものは今の強飯なり、又曆家にひめはじめと云ふ事あり、これひめを供しはじめし也」と引用してゐる。又飛馬始とか、龜始の意などとの説もあるが、こゝはさうでない。『傍廂』に「年毎の正月の始にひめはじめと云ふこと、假名曆にあるをいかなる事とも定かに記したる書もなければ、大方は男女交通の始とは思ふれど、親子兄弟の中にてはつゝましさに、ささもえ云はぬは好色淫奔の心を恥づればなるべし」とあり、『類聚名物考』にも一説としてあげてあるやうに、その年の最初の情交をさしたるのである。 ○慈知鳥 鶺鴒のこと。諸冊二神に男女の道を教へたと云ふ俗説による。 ○大經師 曆間屋で、元來は朝廷御用の經師屋を云ふ。「元祿十一年官命して戸數十一戸に定む。今に至り然り。京師は大經師

隆屋内匠唯一戸製」えて大阪及び諸國に賣る、「守貞漫稿」第四。 ○祇園會 京都祇園神社(牛頭天王)の祭禮で、六月七日同十四日である。 ○月録 この祭禮の飾り屋臺の録の中に月録の名が見える。『日次紀事』六月の條参照)それと同時に美人の形容として月の眉、桂の黛などの成語があるので覆り合はしたのである。 ○清水の初櫻 清水寺の地主權現の櫻、また高雄山の紅葉。いづれも京洛の名所をあげて、美人の姿態を偲ばせた筆づかひである。 ○室町 京の町名、當時資産家が多く住んでゐた。『日本永代藏』卷六、「見立てゝ養子が利發」の章にも「京の室町歴々人の息子」の句がある。 ○仕出し衣裳 新調の着物。 ○當世女の只中 當世風の驕奢な女の生粹。 ○安井の藤 安井御門跡、東山松原通上るところ。 【評釋】 第三説話の女主人公おさんを點出したのが、この冒頭の一節である。但しその全姿はこの「姿の關守」の章の終りに於て描き出されてゐるから、こゝはおさん序説と云ふ形である。單に、茲に一美女ありとの印象を賦與するだけの役目しか演じてゐない。而して、「時」の觀念から見ると、この一節はわけの分らぬものになる事は殊に注意せねばならぬ。かう云ふ絶世の美女が東山あたりを漫歩して都人の目をそば立たしめたのは一體いつの事か。と云ふのが問題である。即ち、すぐ次の叙述で四人の男が女の品定をした時と解すれば、後段でこれらの男達の前を通る藤の花を手にした娘と照應して、まづ肯定できる。それはこの冒頭の花見の娘の歸り路を後段と解釋すればよいのである。然るに「大經師の美婦」の文句に抵觸して來てこの始末に困る事になる。室町に住む此の娘が、大經師の妻となつたのは後日に屬するからである。すればこの一節は人妻時代に於けるそゞろあるきの艶姿と見て了ふか。それには「住み所は室町」に差支へる。これもまた後の章節と矛盾する行文である。 理屈はさうであるが、作者になつて見れば、つい筆拍子で「大經師の美婦」とやつて了つたのであらう。何しろ後

に大経師の妻になると云ふ事が作者の頭脳には先入主となつてゐるから、注意の周到を忘れて、すらすらを筆を運ばせ、都にも稀な尤物の姿態だけを、第一に印象づけんとして投出したのに過ぎまい。そこで「大経師の美婦」を「京の美婦」とでもしてそつとしておかう。

次に、この「一節の修辭用法から云へば、亦かなり無理な表現法が目立つ。「二日姫始め」云々は、全篇にかゝる主眼點で男女の仲を指示したものとて首肯されるが、「浮名の立ちつゞき都に情の山を動かし以下は大分あくどい色彩と奇矯な詞章とで満たされてゐる。意味を辿つて書きほぐせば、まづこんなところであらうか。とても逐語譯はできない。

艶名を謳ひはやされて、満都の男共を惱殺しつくした、その美しさは祇園會に出る飾り屋臺と綺麗を争ひ、月の眉桂の粧そのまゝで、姿は清水の初櫻がやつと綻びそめた思はせぶりの風情であり、唇は高雄山の紅葉の梢の色盛り見るやうなさまであつた。その住居は室町通り、着けた晴衣の物好みも伊達に、當世風の隨一で廣い京洛にも雙ぶものなき様子である。人の心も浮々とする春も開けて、安井の藤が今を盛りと紫の雲の如くたなびき、緑の松さへ顔色なきさまであるが、それと同じく此の女の花見姿は、あたりを拂ふ水際立つたあでやかさ、たそがれ時でも人立がして、東山には群集で又山ができるやうであつた。(花を見るのか、「人の花」を見るのか、多くの人は藤の色をも美女の姿をも、取り巻き眺むる風情であつた)——「安井の藤」以後の行文も微韻縹渺の體たらくで糺糊たる中に美感をそるゝ詞章である。花三人とを釣り交ぜにしたので雙方を表現せんとした手法である。従つて以上の如く大意を掴み出したので試みにすぎない。

とにかく、作者が極力描き出さんとしたのは、美女の都に謳はれる京女の中に、すばぬけて優れた所謂命取りの女がこゝに一人ゐると云ふ一點にかゝる。

折ふし洛中に隠なき、さはぎ中間の男四天王、風義人にすぐれて目立、親よりゆづりの有にまかせ、元日より大晦日迄、一日も色にあそばぬ事なし。きのふは鳥原に、もろこし花崎かほる高橋に明し、けふは四條川原の竹中吉三郎唐松歌仙藤田吉三郎光瀬左近など愛して、衆道女道を晝夜のわかちもなく、さまざま遊興つきて、芝居過より松屋といへる水茶屋に居ながら、けふ程見よき地女の出し事もなし。若も我等が目につくしきと見しもある事もやと、役者のかしこきやつを目利頭に、花見がへりを待暮々、是ぞかはりたる慰なり。大かたは女中乗物、見ぬがこゝろにくし。亂ありきの一むれいやなるもなし、是ぞと思ふもなし、兎角はよろしき女斗書とめよと、硯紙とりよせてそれを移しけるに、年の程三十四五と見えて首筋立のび、目のはりりとて額のはへぎは自然さうるはしく、鼻おもふにはすこし高けれども、それも堪忍比なり、下に白ぬめのひつかへし、中に淺黄ぬめのひつかへし、上に樺ぬめのひつかへし、本繪にかゝせて、左の袖に吉田の法師が面影、ひとり燈のもとにふるき文など見てのもんだん、さりとは子細らしき物好、帯は敷瓦の折びろうど、御所かづきの取まはし、薄色の絹足袋、三筋緒の雪駄、音もせずありきて、わざさならぬ腰のすはり、あの男めが果報と見る時、何かしたじたへ物をいふとて、口をあきしに、下齒一枚ぬけしに戀を覺しぬ。間もなふ其跡より、十五六七にはなるまじき娘、母親と見えて左の方に付、右のかたに墨衣きたるびくにの付て、下女あまた六尺供をかため、大事に掛る風情、さては縁付前かと思ひしに、かね付て眉なし、貌は丸くして見よく、目

にりはつ顯れ、耳の付やうしほらしく、手足の指ゆたやかに、皮薄ふ色白く衣類の着こなし又有べからず。下に黄むく、中に紫の地なし鹿子。上は鼠しゆすに百羽雀のきりつけ、段染の一幅帯、むねあけ掛て身ぶりよく、ぬり笠にとら打て、千筋ごよりの緒を付(け)、見込のやさしさ、是一度見しに、脇腹に横に七分あまりのうち疵あり。更にうまれ付とはおもはれず、さぞ其時の抱姥をうらむべしと、皆々笑ふて通しける。

【語釋】 ○四天王 四人の代表的人物。こゝは勿論四人の道樂者である。元來、四天王は帝釋天の外臣で、持國天・廣目天・增長天・多聞天を云ひ、それ／＼東西南北を守る印度神である。 ○鳥原 京、朱雀野にある。此廓の起りは天正十一年足利家の被官、原三郎右衛門、林又一郎の二人、遊女渡世允許を願ひ出で、秀吉から萬里小路(今の柳の馬場)二條の南に二町四方の地を賜つたのが始である。それを慶長七年六條に移され寛永十七年更に朱雀野に移された。これを鳥原と呼ぶのは「肥前國鳥原陣落去の砌として郭の構一郭一門にして四方播揚の堀なるが有馬の城に似たりとてかく云ひしと聞けど、是はおぼるけのたとへとや申すべからん」(「色道大鑑」、十二)、とある。大鑑には猶一二の説があげてある。 ○もろこし 以下三名は當代遊女の名で、實在の人物であらう。西鶴の作品中に散見する。 ○四條川原 若衆歌舞伎の小屋ありし所。「六條の傾城町より佐渡島と云ふも四條川原に舞臺をたて、けいせい數多出して舞を踊らせけり」(東海道名所記)とは四條河原の芝居の始である。女歌舞伎は寛永六年十月風俗上よろしくないとて禁止されたので、それより先、元和年中既に七つの櫓を此所にあげてゐた若衆歌舞伎が、こゝに於て一段の隆盛を見たのである。竹中、唐松等は、皆樂座の名である。 ○衆道 若衆の道。男色。 ○遊興つきて 遊ぶ仕種がなくなる。 ○水茶屋 料理屋・刺烹店である。葉茶屋と區別してかく云ふ。 ○居流れ ずらりと並んでゐるさま。 ○地女 しろうと女(素人女、良家の子女)。くろうと(玄人、花柳界の女)に對する言葉。 ○美しきと見しもある事もや 「美しと見る事もやある」。 ○目利頭 鑑定(美女鑑賞)する大將。 ○女中乗物 女乗物(駕籠)に乗つてゐるのである。 ○心に

くし 奥ゆかしい。心を引かれる。即ち中の女が見たくなるのである。 ○亂れありきの一詳 ぞろ／＼と歩く連中。 ○いやなるもなし云々 見苦しいと云ふ程の者もないが、それかとてまた、是れはと目を留める程の美しいものもない。 ○移しける書きとめる。 ○首筋立ちのび 襟あしの長いこと。 ○ぬめ 絨。絹布の一種。綾、給子、縞子など光澤ある織物。 ○ひつかへし 襦袢りに表と同じ切地を用ふ。 ○本繪 繪師の肉筆で描いてあること。 ○吉田の法師 兼好。俗姓ト部氏、正平五年六十九歳寂。徒然草の著者たる事は云ふまでもない。 ○ひとり燈のもとに 文をひろげて見ぬ世の人を友とすることよなう慰むわざなれ云々(徒然草第十三段)。 ○子細らしき物好み 凝つた趣向。 ○敷瓦 石たゞみ式の模様か。後の市松染に似たもの(市松模様は元文の頃、役者佐野川市松の考案せる染模様である)。 ○御所かつき 都風の被衣。 ○取りまはし 着こなし。 ○三筋緒の雪路 鼻緒が細い三筋で出来てゐる。「雪路は千の利久初めてこれを作らしむ、雪中の露次入に濡り通るを思みて草履に又草履を重ね是を裡付草履と云ふ。猶濡りの透らぬことを計りて裡牛皮を以て造る雪の上を踏むと云ふ理に因て雪路と名付けたり」(世事談)。 ○あの男めが果報 あの女の夫はあんな美人を妻として仕合者だとの意。 ○したん、下々 即ち下木など。 ○六尺 下男。元來は貴人の駕を昇くもの、「かごかき」である。六尺は力者の訛と「梅園日記」に見ゆ。 ○かね付て眉なし お齒黒を付け眉を剃りたるは人妻の表象である。(「守貞漫稿」第九編、女扮上、齒黒の條を参照せられたし)。 ○指ゆたかに 指のしなやかなるさま。 ○黄むく 「むく」は羽二重。 ○地なし鹿子 ひつた鹿子のこと。江戸にては總鹿子と云ふ。「木綿に目結したるをむきみ或は有松紋と云ふなるべし。縮緬の鹿子絞りは緋を専とし、淺葱これに次ぎ他色稀なり」(「守貞漫稿」、第十七巻染) ○きりつけ 貼付。箱置きの縫付けである。 ○段染 だんだら染。 ○一幅帯 一幅の二ツ割で、長さ二丈二三尺位の帯。 ○塗笠 天和四年印本菱川師宣畫の塗笠の圖が「守貞漫稿」第二十六、編笠の條に掲げてある。黒塗の淺い笠である。「塗笠用薄片板、紙張之、漆黒色出三京師及大阪」(和漢三才圖繪)。 ○とら 金具の環。 ○見込 一寸

見。瞥見すること。○是一度見しに見直したのである。

【評釋】 いよく姿の關守をする條である。遊び惚けた蕩兒の群が所在なさに乗じては、遣りかねまじき所作であらう。しかも自分達だけの鑑賞眼では不確とあつて、女を見るに眼の肥えた役者を仲間に入れたのは、ますくみ取られぬ。それだけ計畫としては徹底してゐる。元祿風の豪快で寛濶な、何事も大びらな態度は十分に掬み取られる。

第一に書きとめられたのは三十四五の年増盛りの女。着付に關してはわれ／＼によく解らないが、徒然草の文言、しかも燈下讀書の條とあつては、實に「子細らしき物好み」で、その趣味風尙までが推測される。けれど蕩兒どもの特に目をとめたのは「わざとならぬ腰のすわり」である事に留意せよ。而して彼等は直ちに「あの男め」とその亭主を羨んだ事に注目せよ。「下齒一枚ぬけし」と云ふ一點で美の幻滅を味つたのもかゝる官能的な鑑賞態度であるからこそ、肯定できるのである。西鶴の物の見方が、かゝる方面に殊に精緻である事を忘れてはならぬ。以下、皆同じ態度を持してゐる事は云ふまでもない。

第二に採りあげたのが十六七の娘か人妻か。若盛りの華奢姿が克明に寫されてゐるが、これも見直した脇貌に。古疵の痕がまざ／＼と見えた。「さぞ其時の抱姥を怨むべし」の一句は點じ得て妙と云はねばなるまい。「皆々笑ふて」にはこれも落第と云ふ感じが語氣にあらはれ、見合すお互の顔には、こたはりのない微笑の影が漂つてゐるではないか。

さて又二十一二なる女の、木綿の手織烏を着て、其うらさへつき／＼を、風ふきかへされ恥をあらはしぬ。帯は羽織のおとしと見えて、物哀にほそく、紫のかわたび有(る)にまかせてはき、かたし／＼のなら草履、ふるき置わたして、髪はいつ櫛のはを入(れ)しや、しどもなく亂しをついそこ／＼にからけて、身に様子もつけず獨たのみて行をみるに、面道具ひとつもふそくなく、世にかゝる生付の又有物かと、いづれも見とれて、あの女によき物を着せて見ば、人の命を取べし、まゝならぬはひんふくこ、哀にいたましく、其女のかへるに忍びて人をつけゝる。誓願寺通のすへなる、たばこ切の女といへり。胸に胸いたく煙の種ぞかし。其跡に廿七八の女、さりとは花車に仕出し。三つ重たる小袖、皆くろはぶたへに裙取の紅うら、金のかくし紋、帯は唐織寄島の大幅前にむすびて、髪はなげ島田に平髻、かけて、對のさし櫛、はきかけの置手拭、吉彌笠に四つかはりのくけ紐を付て、貌自慢にあさくかづき、ぬきあし中びねりのありきすがた、是々是じや、だまれとをの／＼近づくを待みるに、三人つれし下女共にひとり／＼、三人の子を抱せける。さては年子と見へておかし。跡からかゝさま／＼といふを、聞ぬ振して行、あの身にしては我子ながらさぞうたてかるべし、人の風俗もうまぬうちが花ぞと、其女無常のおこる程どやきて笑ける。

【語釋】 ○手織烏 内織の織物である。○つき／＼ 「繼々」で、つきはぎになつてゐるもの。○風ふきかへされ 風に吹きかへされ。即ち裏がつきはぎになつてゐるのを風のために吹きかへされて人目に觸れるのである。○おとし 裁ちおとしの意であるが、こゝはむしろ着古しの羽織を、ほゞして此度は帯にこしらへたのであらう。○紫の皮たび 元祿頃には廢れてゐた足袋、時代遅れの意味もあるが、儉約な者は丈夫だとして穿いた。「むかしは足袋を革にて作る。女は晴に紫革を用ひて紫足袋として

下々の女は得はかざりしなり。この紫足袋は寛文延寶の頃まではヤリし也(本朝世事詩談)。しかし延寶九年板『都風俗鑑』には「紫たびをはくものは、とつと氣の通らぬ御方なり」と見え、同年の『あかし物語』にも「たびは白なめしよし、紫はむさし」とあるから、既に延寶の頃には廢れかけてゐたに違ひない。○奈良草履 奈良で産する藁草履。○置綿 眞綿を摘みひろげて前髪を蔽ふもの。○しどもなく「しどけなし」と同じ。しまりなき、だらしなきさま。元來「しど(尻頭)もなし」は幼稚の意。「しどもなき君達」(源平盛衰記、七)。○様子もつけず 氣取りず。洒落氣もなくの意。○獨たのみて 只一人。伴もなくの意。○面道具 目鼻だちの意で、顔容の義である。○人の命を取る 男子どもを惱殺する、所謂「男殺し」である。○煙草切 刻み煙草の賃仕事するを云ふ。○煙の種 煙草に縁ある語、胸が痛くなつて、涙が零れるの意か。○花草 華奢。濃艶なる容姿。「仕出し」は扮装の意。○かくし紋 衣の裏から付けるので仄かに見える。○投げ島田 根下りの島田雷。「島田といふは東海道島田宿の女常に此髪を結ひけるそれ故にこの名あり」(世事談、五)。○平元結 「今のたけながと云ふ物、近き者は平元結といへり、それを髷へむすびてはねそらしたるをはねいとゆひとて飾としたるなり」(歴世女裝考、四)。○はきかけ 曙染。○吉彌笠 延寶頃、俳優上村吉彌の冠り初めた笠。若い女の用ひしもの。○四ツがはり つけ紐が片身替りに染めてあるを云ふ。即ち右上と左下とが對、左上と右下が對になつて四つ替りになつてゐる。○一代男 卷五、「ねがひは振餅」の章の「四つ替りの大振袖」と云ふのと同じことであると思ふ。○かづき かぶること。○中びねり 腰のあたりをひねつて歩くを云ふ。○是々是じや 今日第一の美女はこれだの意。○あの身にして あの氣取屋にとつてはの意。○うたて「うるさい」位の意味。○無常のおこる程 「色氣をすて、身をはかなむ程」と云ふので、男共が口を極めて嘲笑したのである。勿論女の蔭で笑つたのである。「此女無常の云々」は「此女を無常の起る程」で、「此女が無常をおこす程」の意ではないと思ふ。○どやきて どよめき騒ぐ、大聲あげてしゃべるのである。

【評釋】 姿の關所はまだつゞいてゐる。

第三に帳付せられた女は、みすばらしい風體の者として寫されてゐる。對照を際立たせうとした技巧に外ならぬが、單調を破るものとして許容すべからう。手織木綿の着物、その裏はしきしだらけ。帯は羽織のおとしで、穿くは古風な紫足袋に、奈良草履。髪は云ふまでもなく亂れてゐる。この生活に疲れた佗び姿を、自覺してゐるらしく「身に様子もつけず」、足早に行く女の、これはまたどうした神様の皮肉さであらう。顔容の均整した事、無類飛切と云ふしる物であつた。「よき物着せて」の情は、關守する遊蕩兒のみの思わくばかりではあるまい。後つけて見させるのは、よくよく名残り惜しかつたのである。しかも塙末の長屋らしい所に、しがたない暮しをするものとは、いよ／＼胸痛くならざるを得ないのである。

第四には甘味盛りの二十七八年頃。しかも現代式の滿艦飾で押し出して來てゐる。目を圓くして眺める男どもの前を、「ぬき足で中びねり」と云ふ思はせぶりな歩きつき。「是々これぢや」の言葉は、自然に發した聲であらう。而して、お互に朋輩のはしやき出すのを制止する「だまれ」の一句は、びつたりと行文に納まつて、男どもの舉止動作が、この短い文句の裏に跳躍してゐる。ところがこの華美妖艶な女には、三人の年子がぞろ／＼と隨伴してゐた。「人の風俗も生まぬうちが花」とはこの場合、彼等の頭に痛切に響いた箴言である。たゞし、この思想は、家庭的な眞摯な氣風の人達の社會觀でなく、浮華輕佻な類廢的傾向にのみ生きんとした當世享樂兒の感想であつた事に注意せねばなるまい。さて初めに、乘氣になつて魅惑を感じただけ、その反動として「無常の起る程どやきて笑ひける」は、そのままに享け入れられる。けれど彼等の心の底には、軽い嫉妬(岡焼とも云ふべき程度)に似た一種

の感情が漂つてゐる事も否定できない。

またゆたかに乗物つらせて、女いまだ十三か四か、髪すき流し、先をすこし折もどし、紅の絹たゝみてむすび、前髪若菜のすなるやうにわけさせ。金髪にて結せ、五分櫛のきよらかなるさし掛、まづはうつくしさひとつゝいふ迄もなし。白しゆすに墨形の肌着、上は玉むし色のしゆすに、孔雀の切付見へすくやうに、其うへに唐糸の網を掛、さてもたくみし小袖に、十二色のたゝみ帯、素足に紙緒のはき物、うき世笠跡より持せて、藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬ斗の風義、今朝から見盡せし美女ども、是にけをされて其名ゆかしく尋けるに、室町のさる息女、今小町と云捨て行く、花の色は是にこそあれ、いたづらものと後に思ひあはせ侍り。

【語釋】 ○ゆたかに ゆつたり、鷹揚に。 ○髪のすき流し 下げ髪。 ○五分櫛 櫛の厚味を云ふ、當時の櫛の幅は普通三寸五分か四寸ぐらひ、櫛の厚味は三分半か四分。これは普通より厚味ある櫛と見ゆ。 ○墨形 紋所などに見る墨形の模様か。不詳。(後勘を期す) ○玉蟲色 虫青に同じ。もま製の色目の名。表は青黒、裏は二藍又は薄色。 ○唐糸 こゝでは絹糸のこと。「一代男」にもこの例ありと覺ゆ。 ○たくみし小袖 意匠を凝らした小袖。 ○たゝみ帯 芯の入らぬ帯。 ○うき世笠 當時の流行の笠。 ○藤の八房云々 こゝは「自分は藤の枝に花房が八つ連なり咲いてゐるのを手に持つて」の意。 ○見ぬ人のため云はぬばかりの風儀 まだ藤の咲いたのを見てゐない人のために見せようと思つて持つて來ましたと云はないばかりの様子をして……。 ○けおされ 壓倒される。 ○花の色は 今小町の縁語として出した言葉。「花の色はうつりにけりな徒らにわが身にふるながめせしまに」(古今集春下小野小町)。 ○徒ら者 淫奔者。徒らは前出の歌に縁がある。

【評釋】 姿の關も最後に達した。第五人目のがこれで、「今朝から見盡せし美女ども、これにけおされて」了つたのである。作者は單に「まづは美しさ、一つゝ云ふ迄もなし」と簡單に片付けてゐるが、衣裳附の精しい割にこれはまたあつけない。顔の道具立などはあまり精寫しない方が藝術的效果は豊かであると云ふけれど、この場合はむしろさきあげた三四人の女性描寫で既にくたびれた形である。それがために書かうとしても書き得なかつた、或は書く氣がなくなつてゐたと解する事が妥當と思ふ。

とにかく、女主人公はその全容をあらはしたので、徒ら者云々は後章への連絡である。かく第一章「姿の關守」は美女鑑賞に終始してゐるが、五人の女を點出するに就ては、作者が相當の用意の下に進捗させてゐる事は誰しも心づくところであり、それがかなり効果を收めてゐる事も是認するであらう。たゞ、初めの一節で指摘した通り、安井の藤と今小町の手にする藤花の枝との連關上、「時」の問題に於て、本文通りに讀過すれば、ある種の矛盾齟齬を否定する事はできないようである。

二、してやられた枕の夢

男世帯も氣さんじなる物ながら、お内儀のなき夕暮一しは淋しかりき。爰に大經師の何がし年久しくやもめ住せられける。都なれや物好の女もあるに、品形すぐれてよきを望ば、心に叶ひがたし。説ぬれば身を浮草のゆかり尋て、今小町といへる娘ゆかしく、見にまかりけるに、過し春四條に關居て、見とがめし中にも、藤をかざして覺來なきさましたる人、是ぞとこがれて、なんのかのなしに縁組を取りそぐこそおかしけれ。其比下

立賣丸上ル町に、しやべりのなるとて、隠もなき仲人が有(り)、是をふかく頼(み)樽のこしらへ、願ひ首尾して、吉日をえらびておさんをむかへける。花の夕月の曙、此男外を詠もやらすして夫婦のかたらひふかく、三とせが程もかさねけるに、明暮世をわたる女の業を大事に、手づからべんがら糸に氣をつくし、すへくの女の手袖を織せて、わが男の見よげに始末を本とし、籠も大きくせせず、小遣帳を筆まめにあらため、町人の家に有たきはかやうの女ぞかし、次第に榮てうれしさ限もなかりしに、此男東の方に行事有(り)て京に名残は惜めど、身過程悲しきはなし、思ひ立旅衣、室町の親里にまかりて、あらましを話しに、我娘の留主中を思ひやりて、萬にかしこき人もがな、跡を預て表むきをさばかせ、内證はおさんが心だすけにもなるべしと、何國もあれ親の慈悲心より思ひつけて、年をかさねてめし遣ひける茂右衛門といへる若きものを掣のかたへ遣しける。

【語釋】 ○氣さんじのんき。 ○やもめ住 獨身で暮す事。元來やもめは夫なき年とつた女・夫を亡つた女で寡婦の事。やもを妻なき年とつた男・妻を亡つた男で寡夫の事である。それが轉じてやもめの語がやもをの意をも含む事となつた。 ○都なれや さすが都だから。 ○物好の女 趣味好尚のあるすぐれた女。 ○よきを望めば よいのを望んでゐる故に。 ○詫いぬれば 心淋しく屈託して居ること。「わびぬれば身を浮草の根を絶えて誘ふ水あらば去なんとぞ思ふ」(小町)。 ○ゆかり 縁り、因縁ある。 ○今小町 前章に現はれた娘。小野小町の歌から今小町とつづけた文の技巧。 ○ゆかしく 心を引きつけられる。 ○覺束なきさま 藤の花と云ふ語にかけて幽婉なる風情を示す。おぼつかなきは、元來はつきりせぬ様子である。「山吹の清げに藤のおぼつかなきさましたる」(徒然草)。「見ても猶おぼつかなきは春の夜の霞のうちに咲ける藤派」(和泉式部)。 ○

なんのかのなし 何の彼のなし小面倒な事は一切やめにするので、血統家柄氣質など結婚時の調査など凡てしなかつたのを指したのである。 ○しやべりのなる しやべりはおしやべり女なので、それが渾名となつてゐる。なるは女の名。 ○樽 婚姻用の祝樽か。 ○べんがら糸 唐糸の異稱。次に手袖を織らせさあるから、べんがらの袖縞を手織にしたのである。「氣をつくし」はその仕事に熱心なのを云ふので、即ちいかにも世帯染みた風趣である。 ○始末 儉約質素のこと。 ○大きくくべはくべる 即ち燃すこと。大にくべる。むやみに薪炭を消費すること。それを「させず」である。 ○あらため 精査する。 ○身過ぎ 生活、過活、世渡りに同じ。 ○表向き 店の方面。 ○内證 こゝは表向きに對するうちはである。

【評釋】姿の關守を前章に置いて「花の色は是にこれあれ、徒ら者とは後に思ひ合せ侍る」と後日を匂はしたが、此章はその具象的展開である。

まづ、お内儀の無い、夕暮の一しほ淋しい男世帯の大經師が、容色好みのところからして、いつまでも不縁でゐたが、今小町の評判にその娘ゆかしく、見合に出かけると、それは過ぎし春、四條の水茶屋の店さきで關据ゑた折、特に心を引いたあの藤の花をかざして通つた常人であつた。話は急轉直下して縁は取り結ばれ三年越しの世話女房が出来あがる。簡略な筆の運びではあるが、「なんのかのなし」で大經師がのぼせ込んださまも明らかに、仲人娘がしやべりと渾名とつたその道の強の者とあつては、性急に纏めあげた口トも想像されるであらう。

戀女房を宿の妻として眺め得た果報者である。「花の夕月の曙、此男外をながめやらす」は、尤もの次第と云はねばならぬ。しかもこの女房、花見時の華奢姿に似合はず、案外にも世帯持がよい、織り紡ぎから、勝手元の何くれに至るまで立ち廻つて、働きのあるところを見せてゐる。「町人の家にありたきは斯様の女ぞかし」と作者はあが

め奉つた。奉つたものゝこれには多少筆が走りすぎた嫌はあるまいか。かく、至極堅手の世話女房としてしまつては、後段の振舞があまりに浮華輕兆に失するのである。楯には兩面あるから全然否定は出来ないけれど、少しお堅さが過ぎたものと見たいのである。

さて、支那のおぢさんも云ふ通り、好事魔多しである。嬉しさ限りもない平和な家庭にも、破綻の生ずる日が来た。生活のためには、懐しい京を離れ戀しい妻に別れて、江戸まで行かねばならなかつた。親は子を思ふに餘念はない。留守居の娘いとしさばかりに、我家から人を遣した。室町の兩親はこの人選にかなりの注意を拂つたらしい。それは次段の茂右衛門の風態で明らかである。しかし運命の神は不可思議な世界に跳梁する。不測の胞子は微細なる間隙をもとめて意外の實を結ぶのである。

此男の正直かうべは人まかせ、額ちひさく袖口五寸にたらず、髪置して此かた編笠をかぶらず、ましてや脇差をこしらへず、只十露盤を枕に、夢にも銀もふけのせんさくばかりに明しぬ。折節秋も夜嵐いたく冬の事思ひやりて、養生の爲とて茂右衛門灸をおもひ立(ち)けるに、腰元のりん手かるく居る事をえたれば、是をたのみて、もぐさ數捻て、りんが鏡臺に島の木めんふとんを折かけ、初一つ二つはこらへかねて、お姥から中あからたけまでも其あたりをおさへて、貌しかむるを笑ひし、跡程煙つよくなりて、鹽灸を待兼しに、自然と居落して、背骨つたひて身の皮ちぢみ、苦しき事暫なれども、居手の迷惑さをおもひやりて、目をふさぎ齒を喰しめ堪忍せしを、りんかなしくもみ消して、是より肌をさすりそめて、いつとなくいとしやとばかり思ひ込、人しれすこゝちなやみけるを、後は沙汰しておさんさまの御耳にいれど、なをやめがたくなりぬ。りんいやしか

るそだちにして、物書事にうとく、筆のたよりをなげき、久七が心覺ほどにじり書をうらやましく、ひそかに是をたのめば、茂右衛門よりは先へ、戀を我物にしたがるこそうたてけれ。是非なく日數ふる時雨も偽のはじめごろ、おさん様江戸へつかはされる御狀の次手に、りんがちは文書とらせんさざら〜と筆をあゆませ、茂のじ様まゐる身よりとばかり、引むすびてかいやり給ひしを、りんうれしくいつぞの時を見合けるに、見世よりたばこの火よといへ共、折から庭に人のなき事を幸に、其事にかこつけ、彼文を我事我に遣しにける。茂右衛門もなが事はおさん様の手ともしらず、りんをやさしきと斗に、おもしろおかしきかへり事をし又渡しける。

【語釋】 ○正直頭は人まかせ 正直で、若い者に似ず髪形などは他人まかせで、どうでもいゝと云ふパンカラであつたとの意。

「正直の頭に神宿る」と云ふ俚諺が取合せてある事は云ふまでもない。これは「日月雖照三六合、須照正直頂」(儂姫世紀)などより出づ。 ○額小く袖口五寸 これも流行遅れの風態、「額小く」は此頃額を抜きあげて廣く見せる事が「名月や来て見よが

しの額ぎは」(宗因)の句にも見えるやうに流行したのに、これは額の扱毛したのである。 ○髪置 頭髮を蓄ふる祝で、公家

では二歳、武家は三歳民間では男女共に三歳の時行ふ。式日は多く十一月十五日とする。(松屋筆記等)。 ○夜嵐いたく この

次に「吹けば」と補ひて見る。 ○島の木めんふとん 縞の木綿蒲團。 ○中あからたけまで 仲居女から下女のお竹まで。 ○

鹽灸 灸の据え終り、「ちりげ据えさせ玉ふ折ふし、黒ぶたに鹽をそまきまらせける云々」(一代男)・黒ぶたは灸の据え跡であ

る。又爰に鹽を混ぜて据えると熱さが弱いとも云ふ。 ○是より肌を 此時初めて男の肌を手を觸れたとの意。 ○猶やめ難く

獨この戀心やめ難くの意。 ○いやしかるそだち 卑しき育ち、生れがわるい。 ○心覺ほど 心覺え位の程度で。 ○にじり

書 やつと書く。金釘流で書くのである。○我物にしたがる。久七がおりんを自分の物にしたがるのである。○日敷ふる時雨も偽のはじめ頃 日敷が経るので、そのまゝ日が暮れて行く。ふるは経ると降るとの掛詞。時雨も偽は次の和歌に據る。「偽りのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけん」(續後拾遺集、藤原爲家)。即ち、日敷がたつて時雨の降る頃になつたとの意。○江戸へつかはされる御狀 江戸滞在中の夫への手紙である。○痴話文 戀文。○茂のじ様 茂の字で茂右衛門の略號。權兵衛なら權の字である。戀文の常套語。○身より 私よりで、御存知よりと同意。○引むすび 結び文である。○かいやり かきやり。かきは接頭語。○我事我と 我事でありながら我手での意。かゝる場合は大方、第三者に依頼するのであるが、こゝは直接手渡したのである。○ながた事 中味の意。○やさしきとばかり やさしき女とばかり思ひこみての意。

【評釋】 この前段は留守居役を承つて來た茂右衛門が、撲直實體の男である事を示し、次で秋の夜風の凄まじさに當年の冬のきびしさを思ふ極めて生真面目な性格をあらはして、灸据ゑの一段を點出したのである。

灸を据ゑる條は、なだらかに事件が取りさばかれてゐる。初めの一つ二つを泳へかねる様子を、女共が面白半分には押へるあたりは、三人寄れば姦しとやらで、好奇心に富む女性の常として、いかにも賑かな風情があらはれてゐる。次で茂右衛門が据手の迷惑さを察して、身の皮ちぢむ不慮の火傷をも、ちつと泳へる思ひやりは、實體な男と云ふだけ自然に亨けとられる。さて、その心遣ひの優しさに絆されて、戀心の萌しそめるおりんの心持にも無理がない。たゞそれを「肌をさすりそめて」と官能的に取扱つたところには、作者が觀照の態度が見透かされるやうな氣がする。

而して、この戀は自然と目婁をもれて人の口の端にかゝるまでになつたが、文はやりたし書く手は持たすのもどかしさに、店の久七に頼む。ところが久七、元來おりに心があつて我物にしたがるとは、例の諷諧味の進りであらう。且、さきの樽屋事件の戀の失敗者、同じく久七を思ひ合せるとき、西鶴の久七なる名前に對する特殊の感じが揣摩されて苦笑を禁じ得ない。

さて本筋に返つて、筆ついでに女主人のおさんが戀文の代筆をする。いかにも軽々しい態度と云はねばならぬ。微かな心の動きではあつたらうが、教養あり眞摯なる女性の執るべき態度ではない。このさゝやかな感情の搖ぎが、後段の大破綻を生ずべき機因を胚胎した。「引結びてかいやり玉ひしを、りん嬉しく」との筆致にはいかにも事もなげな輕佻な風格が浮動してゐる。それから、懸想文の手渡しも、此種の婦女としては不思議でない。

要するにこの一段は、灸据を契機とする説話展開が、穩藉の色調を以つて運ばれてゐるのである。

是をよみかねて、御きげんよろしき折ふし、奥さまに見せ奉れば、おぼしめしよりておもひもよらぬ御つたへ、此方も若ひものゝ事なれば、いやでもあらず候へども、ちぎりかさなり候へば、取あげばゝがむつかしく候、去たがら、着物羽織風呂錢身だしたみの事共を、其方から賃を御書なされ候はゞ、いやながらかなへてもやるべしと、うちつけたる文章、去迎はにくさもにくし、世界に男の日照はあるまじ、りんも大かたなる生付、茂右衛門め程成(る)男をそもや持かねる事や有(る)と、かさねて又文にしてなげき、茂右衛門を引なびけてはまらせんと、かづゝ書くどきてつかはされける程に、茂右衛門文づらより哀ふかくなりて、始の程嘲し事のくやし、そめゝと返事をして、五月十四日の夜はさだまつて影待あそばしける、かならず其折を得

てあひみる約束いひ越ければ、おさん様いづれも女房まじりに、聲のある程は笑て、さてもその事に其夜の慰にも成ぬべしと、おさんさまりに成かはらせられ、身を木綿なるひとへ物にやつし、りん不斷の寢所に曉がたまで待給へるに、いつとなく心よく御夢をむすび給へり。下々の女どもおさん様の御聲たてさせらるゝ時、皆々かけつくるけいやくにして、手毎に棒乳切木手燭の用意して、所々にありしが、宵よりのさはぎに草臥て、我しらす躰をかきける。七つの鐘なりて後茂右衛門(七十四字略)さし足して立退き、さてもござかしき浮世や、まだ今やなど、りんが男心はあるまじきと思ひしに、我さきにいかなる人か物せし事ぞと恐ろしく、重ねていかなく、思ひとまると極めし。その後おさんはおのづから夢さめて驚かれしかば(三十一字略)心はづかしく成て、よもや此事、人にしれざる事あらじ。此うへは身をすて命かぎり名を立、茂右衛門と死手の旅路の道づれと、なをやめがたく、心底申きかせければ、茂右衛門おもひの外なるおもはく違ひ、のりかゝつたる馬はあれど、君をおもへば夜毎にかよひ、人のとがめもかへりみず、外なる事に身をやつしけるは、追付生死の二つ物掛、是ぞあぶなし。

【語釋】 ○御きげんよろしき 奥様の御機嫌である。 ○「おぼしめしよりて」から「いやながら叶へてやるべし」までが手紙の返事の文句。 ○思召よりて 私風情の者を御心にかけられての意。 ○御傳へ 御手紙を下されの意。 ○取あげばとがむつかしく 産婆が厄介とは子供が出来ると産婆が必要になる、その騒ぎが厄介だとの意。 ○其方から質を御書きなされ お前の方で、以上の雑費を出してくれるならの意。 ○うちつけたる 露骨な。 ○さりとは 思つた通りを書いたではあらうが、それにしても、あまりひどい事を云ふの意。 ○男の日照 男子の乏しきを云ふ。「此廣き都の殊に男日照はせじ」(一代男)。 ○

大方なる生れ付 十人並の容色ある者。 ○程なる男 位の男。その程度の男。 ○そもや どうして、一體。「そも」に「や」(感動詞)の添つた語。 ○引きなびけて 誘惑する。 ○はまらせん 感溺させる。 ○文づら 文面手紙の文句。 ○そめくしみにくく同じ。 ○影待 月の出を待つこと。一種の信仰よりする。 ○遊ばしける 遊ばされるからの意。 ○おさん様何れも女房まじり おさん様を初め居合すすべての女共が一所になつて。 ○とてもの事 一つその事。 ○やつし 婬し。姿を變へる。 ○りん不斷の寢所 りんがいつもの寢間。 ○棒乳切木 棍棒である。杠秤の上紐を通してかつぐ棒のこと。 ○七つの鐘 午前四時。 ○さてもござかしき 「さても」の上に「思ふに」と入れて見るべし。「ござかし」は小賢しで、油断のならぬの意。 ○まだ今やなど 「など」は「何ぞ」である。即ち未だあの年頃の者がどうして。 ○男心 男女の情交を指す。こゝはまだ處女であると思つて近づいたのに、案外處女でなかつた事を云ふ。 ○おそろしく かく油断のならない類廢した世間が恐ろしいのである。 ○重ねてはいかなく云々 二度とは決してく通ふまい。この一度だけで思ひ切るに決心した。 ○死出の旅路の道遠 衰通は死罪である故、かく云ふ。 ○乗りかゝりたる馬 りんを指す。 ○君 おさん。 ○外なる あだなる。 正しからぬこと。 ○追付 今に、近き將來に。 ○生死の二つ物掛 生と死との境に彷徨する底の事。二つ物掛は二人の刑死を匂はせた文句と思ふ。

【評釋】 茂右衛門の返事の文句は甚だ人を喰つてゐる。律義者にも似合はしからぬ態度である。時代粧の一片が知らずくに、この贅實の若者を使噓したと觀ればそれまでであるけれど、取上婆がむつかしいとか、日用上の雑費は女の持分にせよとか、嫌ながら協へてやらうとか云ふ文言は、作者自身が作中人物の上に押しかゝつてゐる感を深からしめる。

この手紙の返事で憤慨したおさんは、時代の生んだ女であつた。さきの代筆が既に淺慮と享樂趣味とを物語つて

わたが、こゝに於て一層の深入を敢てせしめた。重ねてまた文にして嘆いた詞藻には、茂右衛門を誘引し感溺させんと魂膽があつただけに、相手をして遂に「文づらより哀深く」の情炎を燃え立たしめたのである。「始めの程嘲りし事のくやしう」はよく利いてゐる。

約束の日まで決めて来た茂右衛門の靡き心を、女どもが寄つてたかつて笑つたのは、さこそ思はれる。男が思ふつぽにすつかりはまつて来たからである。而して茂右衛門翻弄の發頭人おさんが、この場合に於ける所作は、全く心驕りのした女王のやうに我意我心で以つて、徹底的に始終してゐる。可愛想にも下女おりの戀は、あれどもなきが如く、黙殺され蹂躪されてゐる。

次が、運命の悪戯によつて思ひの外の破綻が惹起される場面であるが、説話の渡し込みには無理はない。無理はないが、無理でないと云ふだけで、不可抗力の宿命に押しつけられた動きのとれぬ契機とは云へない。近松の「大經師昔曆」に現はれた寢所の取替の如き、因果關係の有機的統一は、こゝには見られない。共に女性の不用意と淺薄とが産んだ悲劇的運命には相違ないが、「五人女」の此所は、「昔曆」のそれに較べて、未だ素材取扱上はかなりの間隙があると思ふ。

要するに「五人女」のおさんは茂右衛門を翻弄せんとする、一種の享樂的氣分によつて動いてゐる。而して、人にかけてよとした催眠術に、はからずも自身がかゝつて了つた。事件は昂揚の一路を辿る。かくて「身をすて命限り」に名を立てんと思ひ込む。彼女は遂に歡樂を追ふ、刹那刹那に活きんとする憫れむべき女性の一人であつた。茂右衛門も亦「君を思へば夜毎に通ふ」の情熱に感亂された。そこに反省も顧慮もない。理智への流し目と、道念への嘯

きとは既に忘却の國に委ねてしまつてゐる。かくして感情の世界のみに跳躍する自然人の面影が、この二人を濃厚に色づけてゐる。「追つけ生死の二つ物掛、是ぞあぶなし」と作者は呼びかけても、意馬心猿に狂ふ二人の耳には響くまい。それだけこの訓誡的言辭は、甚しく無力なものとなつてゐる。

猶、「さてもござかしき浮世」云々の敷衍は、かなりきどい叙述であるが、これによつて世相の半面と人違ひとを、模索させたのは巧緻な行き方である。但、おさんがりんの寢床で寢込んだ事を、後に廻したならば、茂右衛門が不審がつたあの事實は、更に緊張味を帯び一層効果あるものとなつたであらう。

三、人をはめたる湖

世にわりなきは情の道と、源氏にも書残せし、爰に石山寺の開張とて、都人袖をつらね、東山の櫻は捨物になして、行もかへるも是や此關越て見しに、大かたは今風の女出立、どれかひとり後世わきまへて參詣けるとはみへざりき。皆衣裝くらべの姿自慢、此心ざし觀音様もおかしかるべし。其比おさんも茂右衛門つれて御寺にまいり、花は命にたとへていつ散べきもさだめがたし。此浦山を又見る事のしれざれば、けふのおもひ出にと、勢田より手ぐり舟をかりて、長橋の頼をかけても、短は我々がたのしびと、浪は枕のこの山、あらはるゝまでの亂髮、物思ひせし貌ばせを、鏡の山も曇世に、鰐の御崎ののがれかたく、堅田の舟よばひも、若やは京よりの追手かと、心玉もしづみて、ながらへて長柄山、我年の程も爰にたとへて、都の富士廿にもたらすして頓て消べき雪ならば、幾度袖をぬらし、志賀の都はむかし語と、我もなるべき身の果ぞと、一しほ

に悲しく、龍灯のあがる時、白髭の宮所につきて神いのるにぞ、いと身のうへはかなし。

【語釋】 ○人をはめたる湖 「はめる」は欺くこと、即ち詭計に陥らす。この陥る意味を「はまる」とも「はめる」とも兩様に云ふ。こゝは湖へ入水したと見せかけて人を欺く章であるから、かく題したのである。 ○わりなし 理りなしの義で、理屈で判断のできぬ感情の昂揚した心状を云ふ。どうする事もできぬ情念の揺めきである。 ○源氏 紫式部の『源氏物語』であるのは云ふまでもないが、「世にわりなきは情の道」と云ふ文句はあるまい。かゝる意味の語句は多く散見するから、それだけのつもりで書いたのであらう。桐壺の「いさしのびがたきはわりなきわざになむ」もその一つと思ふ。 ○石山寺 近江の石山観音である。こゝの御堂で紫式部が源氏を書いたと云ふ俗説が流布してゐるので、わざ／＼此處に持ち込んだのである。「三月三日江州石山祭」(諸國年中行事)。 ○開帳 寺院にて本尊を安置せる厨子の戸帳を開いて親しく衆人に拜せしむる行事。 ○東山の櫻を捨物にして 京名物の東山の櫻を見向きもしないで、われも／＼と石山詣にかけたのである。 ○行くも返るも云々 往還の人々が逢坂の關を越えるのを云ふ。「これやこの行くも返るも別れては知るも知らぬも逢坂の關」(後撰集、蟬丸)。 ○今風の女出立 當世風の綺羅を飾つた女風俗。 ○後世わきまへて云々 寺詣は本來後世安樂を祈願するためである。然るに皆着飾つた女連中が多くて、誰一人として信仰のために詣でたらしい者はないとの意。 ○又見る事の知れざれば 又見る事のあるべきとも知らざれば。 ○手ぐり舟 綱繰りの舟。 ○長橋 勢田の長橋。「長」と云ふ字から「頼をかける」とつけ、更に「短きは」と敘したのである。 ○浪は枕の床の山 浪枕。枕と床との縁。あらはるゝは「洗はるゝ」「露はるゝ」と双方にかけ、浪と山との縁。亂髪は枕の床の縁。かくそれ／＼に渡し込んだ敘述。床の山は「鳥籠の山」として近江、鳥居本にある山の名でもある。 ○鏡の山 顔を映す、曇る、共に鏡の縁。鏡山は蒲生郡、山北に鏡の窟がある。「鏡山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身を老いやしぬると」(古今集、大友黒主)。 ○髭の御崎 滋賀郡和通村。湖畔にあり。御崎には身裂を掛け、刑死のことをほめかして

ある。 ○堅田 滋賀郡にあり。浮御堂ある所、近江八景の一として有名である。 ○長柄山 同郡三井寺の西方、長らへて云々は長柄山の名にあやつて、どうかして生き長らへたいの意がこめてある。 ○部の富士 比叡山のこと。『伊勢物語』に富士山を敘して「比叡の山を二十ばかり重ねたらん」とあるのに據つたのである。 ○二十にも足らずして おさんの年齢をも指す。「消ゆべき雪」は富士山の縁語であると共に、死を意味する。 ○志賀の都はむかし語 大津の宮の舊都なるを云ふ。萬葉集の人麿の歌を引くまでもなからう。 ○我もなるべき 自分達も死んで、昔語りの(巷の噂の)主人公となるべき運命の者であるとの意。 ○龍燈 社頭にかゝぐる神燈。「今宵は天燈龍燈、神前に來現の時節なれば」(謡曲「白髭」)。 ○白髭の宮 滋賀郡小松村の北、大字鶴川の明神時(時)にあり。白髭明神の名は「曾我物語」の「比叡山始まりの事」に見ゆ。一名、比良宮と云ふ、『三代實錄』貞觀七年に比良神授位の事がある。

【評釋】 初めに源氏物語を出し、その聯想から石山寺の開帳に持ちこんだのは、とりたてて云ふ程の事ではない。西鶴が讀めもしなかつたらしい「源氏」を引合ひとしたのには、微苦笑を誘ふけれど、長唄「春日野」などを作つたところから、『稚源氏』位は讀んでゐたらうと思はれるから、これもよからう。

さて、觀音參りの女たちの、しやなり／＼にやりし艶容嬌姿に「後世わきまへて參詣けるとはみえざりき」と斷じたのは、いつの時代にも變りなき婦女の特性を剝抉したので、「此心ざし觀音様もをかしかるべし」に違ひない。この雑沓熱鬧の巻に、世を忍び人を忍ぶおさん茂右衛門を點出し、今生の思出として湖畔を彩どる名所舊蹟を搜らしめた。意匠に斬新な味はないが、この場合その行文に淨瑠璃の道行のやうな感觸を否定し得ない。西鶴は宇治加賀のために淨瑠璃「曆」を物しただけ、腕に覺えのある男であるから、彼の小説のところ／＼に、この色調の濃

厚な叙述があらはれたとてあやしむには當るまい。ましてこの一段は淨瑠璃の常套たる戀の男女の旅姿であるに於て猶更である。

兎角世にながらへる程つれなき事こそまさされ、此湖に身をなげてながく佛國のかたらひといひければ、茂右衛門も惜からぬは命ながら、死でのさきはしらすおもひつけたる事こそあれ、二人都への書置残し、入水せしといはせて此所を立のき、いかなる國里にも行て、年月を送らんといへば、おさんよろこび、我も宿を出しより其心掛ありと、金子五百兩挾箱に入來りしとかたれば、それこそ世をわたるたねなれ、いよく爰をしのべと、それ／＼に筆をのこし、我々悪心おこりてよしなきかたらひ、是天命のがれず身の置所もなく、今月今日うき世の別と、肌の守に一丈八ふの如來に、黒髪の手へを切添、茂右衛門はさし馴し一尺七寸の大脇差、關和泉守銅こしらへに卷龍の鍔鏢、それぞと人の見覺しを跡に残し、二人が上着、女草履男雪踏、これにまで氣を付けて、岸根の柳がもとに置捨、此濱の獵師ちやうれんして、岩飛とて水入の男をひそかに二人やとひて、金銀とらせて有増をかたれば、心やすく頼れて、ふけゆく時待合せける、おさんも茂右衛門も身こしらへして、借家の笹戸明掛、皆々をゆすり起して、思ふ子細のあつて只今最期なるぞとかけ出、あらけなき岩のうへにして念佛の聲幽に聞えしが、二人ともに身をなげ給ふ水に音あり、いづれも泣きはぐうちに、茂右衛門おさんを肩にかけて、山本わけて木ふかき杉村に立のけば、すいれんは浪の下ぐりて、おもひもよらぬ汀にさがりける。つき／＼の者共手をうつて是を敷き、浦人を頼さま／＼さがして甲斐なく、夜も明行ば、泪に形見色々巻込、京都にかへり此事を語れば、人々世間をおもひやりて、外へしらすぬ内談すれども、耳せはしき世の中、

此沙汰つのでりて春慰にいひやむ事なくて、是非もなきいたづらの身や。

【語釋】 ○つれなき事 無情の意であるが、ここは愛い辛い事である。 ○ながく佛國の語らひ 極樂の一つ蓮の臺でいつまでも楽しく暮す。「とかく世に」から「佛國の語らひ」まではおさんの言葉。 ○惜しからぬは命ながら この一句は地文とも茂右衛門の言葉とも兩様に取られる、が「死んでのさき」以下を言葉と見る。それで「惜しからぬは命ながら」は、おさんが身投しようと思ふのを聞いた茂右衛門も、同じく惜しまぬ命ではあるけれど、曰く、死んでからは極樂へ行かぬかわからない……。」 ○思ひつけたる 思ひ付きたる。 ○宿を出しより 京の夫の家を出た時から。 ○挾箱 棒を通して擔ふやうにした箱。「挾箱は信長公の時より始る。昔は挾竹とて竹を割て衣類を挟む、挾竹の代りなれば挾箱と名づく」。(世事談)。「女用挾箱には黒無地或は黒塗にて徑二寸許の定紋を數々散描く蓋必ず油單と號けて覆を掛る也」(守貞漫稿、三十)。 ○世をわたるたね 生活上の資本。 ○「我々悪心」 以下「うき世の別れ」まで、遺書の文言。 ○よしなき語らひ 謂はれなき仲。 即ち不義密通。 ○關和泉守 刀工。美濃武儀郡關の佳人、藤原兼定。 永正頃の人。 ○獵師 漁夫とあるべきところ。 ○水入の男 字面は潜水夫であるが、泳ぎの達者なものと云ふ意。 ○有増 事件の概略である。 ○ふけゆく時待合せける 夜のふけゆく時を待ち合せける。 ○明掛 半ば開けたのである。 ○あらけなき 荒々しき。 なきは打消の語ではない。 ○水練は 水練の男は。 ○つき／＼の者 一體下男下女であるが、この際、おさん等が世を忍ぶ借屋に召使を置いたとも思はれぬ。 いづれ「ゆすり起こされた者々」を指すのであらうが、問借してゐた家の人と見るか、近隣の人々とするか、それまでの穿鑿は無用であらう。 つき／＼の者とは漫然と書いたものらしい。 ○京都に歸り この「歸り」もおかしい。 ○人々世間を 人々は大經師の家の人である。 その人達が世間への外聞を考へて……。 ○耳せはしい 聞耳を立てる。 人の噂は少しも聞きのがさない。 ○此沙汰暮り 此評判、噂が口から口へ傳へられる。 ○春慰 のんきなお正月時の話題、噂の種である。 ○是非もなきいたづらの身や いた

づらの身の果として是非もなし。

【評釋】 悲しきは生の執着である。人を忍び世を狭めても、あくまで生をむさばらうとする弱い人間性が、この一節を貫いて脈打つてゐる。茂右衛門の詭計は、かゝるせつば詰つた境地を、すり抜けて出た刹那の方策にすぎない。しかし狭い境地に喘ぐものにとつては、この刹那的なゆとりも廣潤の感じがしたに相違ない。さればこそ「此湖に身を投げて」と鎌をかけたおさんが、「我も宿を出しより其心掛けあり」と喜んだのである。いざとなつた時の女のづぶとい根性は、挟箱に入れた五百兩が雄辯に物語る。世の果敢なさを、果敢なくも悟り得ぬ凡愚の人の果敢なさは、かくして陋劣の上に醜汚の影を深くも印したのであつた。

入水と見せかけた一芝居は、できるだけ周到な用意の下に演ぜられた。書置、守り佛、片身の髪、人の見知つた脇差など遺留品の数々。筋書きは豫定の通りに遂行された。このあたりの叙述は暢達の筆に任せてすらくと運ばれてゐる。「身を投げ給ふ」の敬語だけはいやに耳に立つが、「水に音あり、いづれも泣き騒ぐうちに、茂右衛門おさんを肩にかけて、山本わけて木深き杉村に立のけば水練は浪の下へくゞりて思ひもよらぬ汀に上りける」あたりは、すつきりとした様姿を示してゐる。語釋で指摘したやうに「つきんくの者」のえたいは判然しないけれど、京の大經師の店での、おさん入水の報に對する態度と、隠すとすれど洩れ廣がる世態人情の常とは簡明な叙述ではあるが、素直に表現されてゐる。

四、小判しらぬ休み茶屋

丹波越の身となりて、道なきかたの草分衣、茂右衛門おさんの手を引て、やうく／＼崖高くのぼりて跡おそろしく、おもへば生ながら死だぶんになるこそ心ながらうたてけれ。なを行へくさき柴人の足形も見えず、踏途ふ身の哀も今女のはかなくたどりかねて、此くるしさ息も限と見えて貌色替りてかなしく、岩もる葉を木の葉にそゞぎ、さま／＼養生すれども、次第にたよりすくなく、脉もしづみて今に極まりける。藥にすべき物ともなく、命のおはるを待(ち)居る時、耳ぢかく寄て、今すこし先へ行(け)ばしるべある里近し、さもあらば此浮をわすれて、おもひのまゝに枕さだめて語らん物をとなげけば、此事おさん耳に通じ、うれしや命にかへての男じやものと、氣を取なをしける。さては魂にれんば入かはり、外なき其身いたましく、又負て行程に、わづかなる里の垣ねに着けり。爰なん京への海道といへり。馬も行違ふ程の岨に道もありける。わら齋る軒に杉折掛て上々諸白あり、餅も幾日になりぬほこりをかづきて白き色なし。片見世の茶筌土人形かぶり太鼓、すこしは目馴し都めきて是に力を得、しばし休て此うれしさに、あるじの老人に金子一兩とらしけるに、猫に傘見せたるごとく、いやな貌つきして、茶の錢置給へといふ。さても京より此所十五里はなかりしに、小判見しらぬ里もあるよとおかしくなりぬ。

【語釋】

○草分衣 草深き野路などを分けて行く衣であるが、こゝは道なき山路の雜草の間を分けて行くを云ふ。○跡おそろしく 入水せしと見せかけて通れたので、後から追つかけられるやうな氣がするのである。○死んだ分 死んだと同然。こゝ、

は死んだと同様の惨苦を嘗めるの意。○心ながら 我が心からは云ひながら。不心得た所業の結果とは云へ辛い目をする事
 じやの意。○柴人 柴刈る人。袖、樵夫と同じ。○足形 足あと。○女のはかなくたどりかねて 女のかよわくて路に
 行き悩むの意。「はかなく」は鹿く頼りないさまで、山路など歩き馴れず、か弱いさまを指したのである。○今「踏み迷ふ身
 の哀も今」と切つて、後の「脈も沈みて今」のところへ結びつけたい氣がするが、語法の不確な西鶴の筆として、かく文脈を辿る
 のは思ひ過ぎであるかもしれない。が、意味は身の哀れも今で——（今が絶頂で）——と解したい。而して脈も沈みて今に極ま
 るは、もう駄目ださても助からないの意で、「今」は究極の「今」である。○しるべ 知人。縁邊。どちらの意でもよし。○さ
 もあらば 今少し先まで行く事ができるならの意。○枕定めて 夫婦の語りひ。○おさん耳に通じ おさんの耳に通じ。
 ○氣を直し 氣をとり直す。自分で元氣を出すのである。○外なき其身痛ましく それより外の事なき其身痛ましく、即ち自
 身（茂右衛門）を思ふより他念なき其身（おさん）がいとしく可憐に思はれるの意。「魂に戀慕入代り」は、魂の代りに戀心が入り込
 む、即ち戀情以外におさんの心には何物もないと云ふのである。○海道 街道に同じ。○杉折掛けて 酒を商ふしとし
 て、店頭に松葉をつるす。酒ばやしと云ふ。三輪明神は杉を神木とする、且みわは神にさぐる酒のことであるから、この因縁
 によつてかくするのである。○諸白 上等の清酒のこと、麴も米もよく白けたるものを用ひて醸したる故に云ふ。これに對し
 て濁酒を片白と云ふ。○片見世 店の片方。○かぶり太鼓 豆太鼓（小供の玩具）。○これに力を得 都めいた品物を見て
 元氣づいたのである。○猫に傘 「猫に小判」など、同じ俚諺、何の効能なきを云ふ。
 【評釋】 「丹波越の身となりて」の一句は、何でもない文字ではあるけれど、もうこれだけで都馴れた若い男女が、
 身の置所なきまゝに、深山幽谷の表象のやうな丹波の國までも遮二無二に逃げ延びたと云ふ感じが、明確に滲み出
 して、落人の身のつらい悲しいくづをれ姿が眼前に髣髴される。

それからの叙述は平板であるが、おさんが困憊の極、氣死せんとする時、「岩もる半を木の葉にそまぎ」て介抱す
 る茂右衛門には周章のさまが想像せられる。而して耳に口をあて、「今少し云々」と囁くや「嬉しや命にかへての男
 じやもの」と元氣をふり起すのはちと現金らしい。このあたりのおさんの語調といひ「思のまゝに枕定めて」と勵
 ます男の言葉と云ひ、さすが浮世草子なればこそと思はせる文辭である。

漸く、街道すぢに出る。そこには茶店がある。目馴れし品々がならべてある。是に力を得たのは至極道理と云は
 ねばならぬ。茶筌や土人形や豆太鼓がごたごたある様子には、田舎の店屋らしい風情が掬みとられる。小判を貰つ
 ていやな顔をして茶の錢くれろと云ふ老亭主であつて見れば、店頭の餅が日越しの埃をかぶつて白くなつてゐるの
 に不思議はない。僻村の野趣は十二分である。

それより栢原といふ所に行（き）て、ひさしく音信絶て無事をもしらぬ姉のもとへ尋入て昔を語れば、流石よ
 しみとてむごからず、親の茂介殿の事のみいひ出して、泪片手夜すがら咄し、明ればうるはしき女藤に不思議
 を立（て）、いかなる御かたぞとたづね給ふに、是さしたつての迷惑、此事までは分別もせずして、是はわた
 くしの妹なるが、年久しく御所方にみやづかひせしが、心地なやみて都の物がたき住ひを嫌ひ、物しづかなる
 かゝる山家に似合の縁もがな、身をひきさげて里の仕業の庭はたらき望にて作ひまかりける。敷銀も貳百兩斗
 たくはへありと、何心なく當座さばきに語りける。何國もあれ欲の世中なれば、此姉是におもひつき、それは
 幸の事こそあれ、我一子いまだ定る妻とてなし、そなたものかぬ中なれば、是にと申かけられ、さても氣毒
 まさりける。おさんしのびて涙を流し、此行すへいかゞあるべしと物おもふ所へ、彼男夜更てかへりし其様す

さましや、すぐれてせい高く、かしらは唐獅子のごとくちよみあがりて、髭は熊のまぎれて、眼赤筋立て光つよく、足手其まゝ松木にひとしく、身には割織を着て、藤繩の組帯して、鐵砲に切火繩、かますに兎狸を取入、是を渡世すと見えける。其名をきけば岩飛の是太郎とて、此里にかくれもなき悪人、都衆と縁組の事を母親語りければ、むくつげなる男も是をよるこび、善はいそぎ今宵のうちにと、びん鏡取出して、面を見るこそやさしけれ。母は盃の用意とて、鹽目黒に口の欠たる酒徳利を取まはし、筵屏風にて貳枚敷ほどかこひて、木枕二つ薄縁二枚横島のふとん一つ、火鉢に割松もやして、此夕一しほにいさみける。

【語釋】 ○柏原 丹波水上郡にあり、土俗カヘベラと云ふ。 ○よしみ 姻戚。 ○泪片手夜すがら咄し「泪片手に」で、懷舊の涙をこぼしつゝ、その夜は夜通し昔語りにつけた。 ○女蕨 たゞ女の意、都風なればかう云つたのである。 ○御所方堂 上方で、公卿階級を漫然と指したのである。 ○宮仕 奉公すること。 ○身をひきさげて からだ一つでの意。 ○敷金 持參金。 ○當座捌 その場のがれ。一時的にごまかすのである。 ○のかぬ中 因縁の深い間柄。即ち親戚。 ○是に 我一子に。 ○氣の毒 心痛。 ○割織 布帛を細く割いて緯に織込んだもの。 ○かます 吠。蒲簀(もと香蒲にて作つた故にかく云ふ)。業所で作つた袋。 ○悪人 悪者の意ではない。剛強の者の意で、多少醜男の心持も含まれてゐるであらう。 ○むくつげ 武骨 こはらしいさま。 ○善はいそげ 但願「善は急げ悪は延べよ」(毛吹草)。左傳成公八年、君子曰從善如流、註如流喻速。 ○びん鏡 雙鏡、ふところ鏡。 ○鹽目黒 目黒は鮪のこと、鹽者である。

【評釋】 姨の里を尋ねあてゝ昔を語る時、「親の茂介殿の事のみ云ひ出して」はいかにも自然であり、涙片手に夜すがら話すのも情味が深い。「明くれば麗はしき女蕨に不思議を立て」は、前夜には何とも感じなかつたかの不審が立

つが、これも考へて見れば當然である。山里の家の薄暗い灯影に、女はかくれるやうに男の蔭に添つてゐたであらうし、姨は昔語りのそれこれに心取られて、仔細に女を眺める事もなかつたであらう。而して夜が明け離れて朝の陽光が隈もなく照り亘つた時、都女おさんの艶姿は、むさくるしい山家の住居を背景として一際あざやかに浮出し、今更のやうに姨の目に驚異の影を投じたのである。さう省察すれば「明くれば麗はしき」の文字は軽々に見過す事はずきない、否むしろ活々した叙述として、此の場合もつとも精彩ある句として遇せねばなるまい。

茂右衛門がおさんの素性を包みかくして、でたらめを言ふのもよい。たゞ口が少しすべり過ぎた。敷金貳百兩云々は殊に不用意の言葉である。しかし、商賣上の騙引に馴らされて來た若い町人の茂右衛門が、當座捌きの口吻としては、そのまゝ肯定されるのである。然るにその場に居合はさない——茂右衛門にとつては豫想外の人物——姨の一人息子の嫁にと所望されたのは、一難去つて又一難で、頼む木蔭にも雨が漏る。苦患から安易におちついた彼等が、また辛勞へ追放されるこの渡し込みも無難と云つてよからう。

さて、現はれ來つた一人息子なる者を、作者は至極念入りの醜男に描き立てゝゐる。芝居や錦繪でお馴染の山賊そつくりである。「眼赤筋立て」の句は特に印象が強く、これだけで頭の唐獅子、熊の髭は叙するまでもないと云ふ感じさへする。——この場合、若し山里には珍らしい優男として現はしたらどうだつたらう、と云ふ茶氣も一寸考へないではないが、それはともかくとして——お詔向の山男であつただけ、此後の説話の展開は易々として運ばれてゐる。

この山男がびん鏡取り出してのぞくのは御愛嬌であり、母が婚禮の仕度も丹波の山奥らしい。わけて「筵屏風に

て二枚敷ほどかこひて」は野趣満々で、木枕薄縁云々の叙述も、常ならば蠱惑の香を強く發散するであらうが、こゝではむしろ滑稽的氣分を使喚するにすぎない。

猶、山男の是太郎の渾名(或は通り名か)が岩飛とある。前章の水入の男も岩飛とある。ありふれた名であるから關はないやうなものゝ、何とか他の名であつて欲しい氣がする。

おさんかなしさ、茂右衛門迷惑、かりそめの事を申出して、是ぞ因果とおもひ定(め)此口惜(くち)さまたもうきめに近江(あまゑ)の海にて、死(し)べき命をながらへしとて、天われをのがさずと脇差(わきざし)取て立(つ)をおさん押(おし)とどめて、さりさは短(みじ)かし、さま／＼分別(ぶんべつ)こそあれ、夜明て爰を立のくべし、萬事は我にまかせ給へと、氣をしづめて其夜は心よく祝言(しゆげん)の盃取(さい)かはし、我は世の人の嫌(きら)ひ給ふ。ひのへ午(ひま)なるとかたれば、是太郎聞て、たとへばひのへ猫(ねこ)にても、ひのへ狼(おおかみ)にても、それにはかまはず、それがしは好(この)む青(あお)どかけを喰(く)ふてさへ死なぬ命、今年廿八迄(しじ)虫(むし)ばら一度おこさず、茂右衛門殿も是にはあやかり給へ、女房(にようばう)共は上方(かみかた)そだちにして、物にやはらかなるが氣にはいらねども、親類(おつき)のふしやうなりと、ひざ枕してゆたかに臥(ふ)ける。かなしき中にもおかしくなつて、寢入を待かね、又爰を立のき、なを奥丹波(おくたんば)に身をかくしける。やう／＼日數(ひかず)ふりて丹後路(たんごぢ)に入て、切戸(きりど)の文珠堂(もんじゅうだう)につやしてまどろみしに、夜半とおもふ時、あらたに靈夢(れいむ)あり。汝等(なんぢら)世になきいたづらして、何國(いづれ)までか其難(がた)をのがれがたし、されどもかへらぬむかしなり、向後(むこう)浮世(うきよ)の姿をやめて、惜(おし)きとおもふ黒髮(くろかみ)を切(き)り出家(しゅつが)となり、二人(ふたり)別々(わかづ)に住て、悪心(あくしん)さつて菩提(ぼだい)の道(みち)に入(い)れば、人も命をたすくべしと、ありがたき夢(ゆめ)心に、すへ／＼は何にならふともかまはしやるな、こちや是(これ)がすきにて、身に替(か)へての脇心(わきしん)、文珠(もんじゅう)様は衆道(しゆだう)ばかりの御合點(ごがってん)、女道(にようだう)は會

つてしろしめさるまじと、いふかと思へば、いやなゆめ覺て、橋立(はしだて)の松の風ふけば、塵(ちり)の世じや物となをくやむ事のなかりし。

【語釋】 ○かりそめの事 間に合はせの事、深く考へずふと云つた(又した)事。 ○またもうきめに近江 又も憂き日に違ふが、あの近江の海での意。逢ふと近江のあふは掛詞。 ○さりとは短し そんな事をするのは氣が短い。脇差取つて是太郎を斬るか、自ら刃に倒れるか、刃物三昧するのは氣が短い。 ○さま／＼分別これあれ いろ／＼と考への仕方がある。 ○祝言 婚禮。 ○ひのえ午 一丙午の女は男を殺す、此の説和漢の書に據なし。近頃好事の樂説に丙午の女を娶るを忌む故は、丙は陽火なり、午は南方の火なり、火に火を加ふる故にあし、と云へり。凡そ人の壽夭は皆命なり、妻が性によつて夫みだりに死せんや、笑ふべきの甚しきものなり(本朝俚諺)。 ○ふしやう 怪へること。こゝは親類だから仕方なしに堪忍するとの意。 ○ゆたかに臥し のび／＼として寝た。 ○切戸の文珠堂 切戸は丹後國與謝郡吉津村文珠の海濱にある地。文珠堂は「神社考云、智恩寺、丹後九世戸文珠、天龍六齋供燈明(拾芥抄)。文珠は如來の左に侍して智慧を司る菩薩。 ○あらた 功験の著しきこと。」「あらたに靈夢」は通夜した御利益が著しくて、文珠様から夢の御告があつたこと云ふのである。 ○其難逃れがたし 「其難逃るべしや」とあるべきところ。 ○向後 これから後。 ○浮世の姿 俗人の姿。僧尼ならぬ普通の風體を云ふ。 ○悪心 こゝは夫婦の交情を指す。 ○菩提 梵語、道又は覺と譯す。佛道修行して佛果を得ることを云ふ。 ○人も命を助くべし 「人は前夫を暗に指してゐる。 ○身に替へての 我一身を犠牲にしての意。 ○脇心 本夫以外に心を寄せしこと。即ち情夫。 ○文珠様は衆道ばかりの御合點 文珠は梵語文珠師利(Monjuri)で、師利は尻に通ず。それから衆道(男色)に關係あるものとして考へらる。時代風尚の現はれの一である。そこで、文珠は衆道だけは知つて居られるが、女色には經驗があるまいと云つた

のである。○吹けば 松風が吹く、塵の吹くの双方に掛け、塵の世と渡し込んだ敘述。○塵の世 濁世であるが、こゝは塵の如く軽い、即ち「どうでもよい」と云ふ投げやりな意味合が添はつてゐる。○やむことのなかりし 二人の仲の依然として繼續したのを云ふ。

【評釋】 此段で茂右衛門が又物三昧に訴へやうとする處作は、思慮なき若い男の風格として認容する事ができる。自己の蒔いた虚偽の種が芽を吹いたので「これも因果」に相違ない。こんな場合、女はいつも落ちついてゐる。取亂すのは最初で、度胸を決めると反撥的に強くなるのが女性の一面であるとすれば、おさんの分別は尤もの次第である。

初め丙午の女だからとて厭がらせやうとすると、丙猫でも丙狼でも關はぬとて是太郎は取り合はず、更に青どかけ喰つても平氣とか二十八まで虫腹一度起らないさか、嵩にかゝつて氣焰を擧げるあたりは、作者の手法に十分の諷刺味が行きわたつてゐる。しかも是太郎には微塵も潤ひもなく、従つて折角のおさんの擇び出した丙午の咒文が何等の効驗を示さないのは面白い。而して物柔らかなのが氣に入らないけれど親類だから、まあ堪忍するまで「膝枕してゆたかに臥し」たのは、是太郎も仲々可愛いゝところがある。純樸は通り越して粗野そのものゝやうではあるが、山男は山男らしい無邪氣と無關心との態度で現はされてゐる。藤の花に松棒杭の倒れかゝつたやうな此の風情も、「悲しき中にも可笑しくなる」場面として感興頗る淺くない。

文珠堂の夢の段は、かのお夏の枕上に立つた室明神の御告を聯想させるもので、此の作者の常套手段であるが、こゝでは文珠様のまじめな訓戒に對して、おさんの方が捨鉢になつてゐる。「こちやこれが好きにて身に替へての

脇心」は、激しい言葉である。更に「文珠様は家道ばかりの御合點云々」もかなりきびしい云草である。官能的な爛れた戀に感溺する女の叫びとしては、偽りのない眞實一遍の聲であらう。しかし、作者の筆致には輕佻な響がある。「塵の世ぢやもの」の一句にも亦浮薄な世相の浪に漂ふ類廢人の面影を見る。

この一章は「人をはめたる湖」の後を享けて、丹波の山深く分け入つた二人に、計らずも襲ひかゝつた悲喜劇を主題としたものである。標題は「小判知らぬ休み茶屋」となつてゐるが、契機がこゝにあるのではない。西鶴の題名法はかなり投げやりであるから深く咎むるには當らないが、云ふまでもなくこの章の核心は是太郎との交渉に在る。而して文珠堂の夢は後段の挿話で、前段の茶店と相對照して、客位につくべき場面である。かく一章の構成は整然とし、その中心たる娼の宿は刻明に寫され、四人の人物を繞る事件は的確に把握されてゐる。たゞ、こゝで少し變に思はれるのは、誠に都合のよいところに娼さんが住んでゐた事である。そのつもりで、近江から山越しに逃れたと云へば了解されるけれど、作爲の跡は否定できない。

五、身の上の立聞

あしき事は身に覺へて、博奕打まけてもだまり、傾城買取あげられてかしく貌するものなり、喧嘩しひけとる分かくし、買置の商人損をつゝみ。是皆闇がりの犬の糞なるべし。中にもいたづらかたぎの女を持あはず男の身にして、是程なさけなき物はなし。おさん事も死ければ是非もなしと、其通りに世間をすまし、年月のむかしを思ひ出て、にくしといふ心にも、僧をまねきてなき跡を弔ひける。哀や物好の小袖も、且那寺のはた

てんがいと成(り)、無常の風にひるがへし、更に又なげきの種となりぬ。

【語釋】 ○ 悪しきものは身に覺えて「悪い事は其の身にしみんと深く感ずるものであるが、とかくは隠すもので」後の條々につゞく。 ○ 博奕打云々 ばくち打は敗けても、まけおしみで黙つてゐる。 ○ 傾城買云々 女郎買は金をまきあげられても、自慢らしい顔をして得意になつてゐる。 ○ ひけとる分 ひけは敗けて、喧嘩しても敗けた場合は隠してゐる。 ○ 買置

商品は澤山仕入れて置く事。買置したために低落して鉄損になつても黙つてゐる。 ○ 闇がりの犬の糞 俚諺、人の知らぬ失敗はそのまゝにかくすこと。 ○ 中にも かゝる中で、隠しきれぬものの意である。 ○ いたづら氣質 淫奔な性質。 ○ 女妻

の意。 ○ 持ちあはず 恰度さう云ふのを持つてゐる。 配遇。 ○ 年月の昔 同棲してゐたその年月の頃。 ○ 物好 風趣を凝らした、即ちその趣味好尚によつて擇んだ小袖である。 ○ 天蓋 佛像又は棺の上にかざすきぬがき、佛堂の裝飾の一。 ○

無常の風 亡者の紀念品で、しかも、寺院の裝飾品となつてゐるから、唯、風にひらめくのを、無常の風にさ云つたのである。 ○

【評釋】 冒頭、闇がりの犬の糞として列擧した博奕打、傾城買、喧嘩屋、買置商人は、いづれも時代の一面ではあるが、常に奇警と的確とで人の意表に出づる此の作者の叙述としては、むしろ引證凡庸の感がある。従つて不貞の妻を持つ夫の身の上に渡し込んだ筆致にも、いつもの牙えはあらはれてゐない。故に、おさんの死を聞いてその亡き跡を弔ふ大經師の志も、通り一べん、それだけの事實として首肯するのみである。

されば世の日程、だいたんなるものはなし、茂右衛門そのりちぎさ、闇には門へも出ざりしが、いつともなく身の事わすれて都ゆかしくおもひやりて、風俗いやしげになし、編笠ふかくかづき、おさんは里人にあづけ

置、無用の京のぼり、敵持身よりはなをおそろしく行(く)に、程なく廣澤のあたりより、暮々になつて池に影、ふたつの月にも、おさん事を思ひやりておろかなる泪に袖をひたし、岩に數ちる白玉は鳴瀧の山を跡になし、御室北野の案内知よしとていそげば、町中に入て何とやらおそろしげに十七夜の影法師も我ながら我をわすれて折々胸をひやして住馴し且那殿の町に入て、ひそかに様子を聞ば、江戸銀のおそきせんさく、若ひもの集て、頭つきの吟味、木綿着物の仕立ぎはをあらためける、是も皆色よりおこる男ぶりぞかし、物語せし末を聞(く)に、さてこそ我事申出し、さてもく茂右衛門めはならびなき美人をぬすみ、おしからぬ命、しんでも果報といへば、いかにもく一生のおもひ出といふもあり。また分別らしき人のいへるは、此茂右衛門め、人間たる者の風うへにも置やつにはあらず、主人夫妻をたぶらかし、彼是ためしなき悪人と、義理をつめてそしりける、茂右衛門立聞して、随今のは大文字屋の喜助めが聲なり、哀をしらすにくさげに物をいひ捨つるやつかな、おのれには預り手形にして銀八拾目の取替あり、今のかはりに首おさへても取べし、齒ぎしめして立けれ共、世にかくす身の是非なく、無念の堪忍するうちに、又ひとりのいへるは、茂右衛門は今にしたずに、どこぞ伊勢のあたりにおさん殿をつれて居るといひ、よい事をしほると語る。是を聞(く)と身にふるひ出で、俄にさむく、足ばやに立のき、三條旅籠屋に宿かりて、水風呂にもいらす休けるに、十七夜代待の通しに十二灯を包て、我が身のすへくしれぬやうにと祈ける。其身の横しま、あたご様も何として助け給ふべし、明れば都の名残とて東山のびくくに、四條川原にさがり、藤田狂言づくし三番つゞきはじまりといひけるに、何事やらん見て、かへりておさんに咄しにもと、圓座かりて遠目をつかひ、もしも我をしる人もと心元なくみしに、

狂言も人の娘をぬすむ所、是さへきみあしく、ならば先のかた見れば、おさん様の旦那殿、たましの消てちくくのうへの一足飛、玉なる汗をかきて木戸口にかけ出、丹後なる里にかへり、其後は京こはかりき。

【語釋】 ○されば「されど」とあるべきところ。 ○そのりちぎさ「その律義さ」で、元來生眞面目な性質でもつての意。 ○闇には門へも出でざりしが 闇にも門に出でざりしがの意。人目に立たぬ闇の夜でも、世間を憚つて外出せぬとて、其の律義振を示したのである。 ○風俗いやしげに 姿を田舎者風にやつしたのである。 ○無用の京上り 何の所用もないのに漫然と都に行く。 ○廣澤 山城葛野郡嵯峨村の東にある池。拾芥抄云「廣澤池寛朝僧正造之、毎秋都下賣賤、古今賞月處也」。廣澤池が京近郊の月の名所である事は「案内者、四」(寛文二年版)等に見える。 ○池に影、二つの月 池に映れる月を指す。おさんには男が二人あるのを思ひ合せたのである。 ○鳴瀧 葛野郡宇多川の上流、般若寺の南の急端を云ふ、後地名となる。梅ヶ畑村平岡のあたりを云ふ。「岩に数ちる白玉」は鳴瀧の序詞のやうになつてゐる。 ○御室 同郡花園村仁和寺のある處。北野は同郡で北野神社ある處、今は上京區。 ○案内知るよし 案内(土地の様子)を知つた風で。いそぐと歩くさまをあらはす。 ○我ながら我を忘れ「我ながら」は我影でありながらの意と、ついうっかりとの意と、兩方に掛けた語。即ち我が影法師にひよつと驚く、誰か追かけて来たのではないかと疑ふのである。 ○様子を聞けば 大經師屋の店頭に潜んで立聞きするのである。 ○江戸銀 江戸からの爲替金。 ○運き穿鑿 なぜ遅いだらうかと談合する。 ○頭つき 結髪さま。 ○仕立ぎは 仕立てあげ「改め」は檢べて批評するのである。 ○さてこそ我事申し出し「さてこそ」は豫想通りである。我事は茂右衛門の事で、かの不義事件に話題が及んだのである。 ○一生の思ひ出 一生の思出になると同様。おさんの如き美人を得るなら、そのために一生を犠牲にしてもよいとの意。 ○分別らしき人 思慮の深さうな人。 ○風上にも置く奴にあらず 臭氣のため風上に置けない義。人を憎みて損辱する時に云ふ。 ○義理を詰める 道理至極の事を云ふ。 ○今の代り 今、言つた悪口の代り。 ○齒ぎしめ 齒を食ひしげる。齒噛みする。憤慨の狀である。 ○旅籠屋 旅館。もと旅籠とは馬草を入れる籠であつたが、次で旅中の食物などを入れる籠の意となり、更に旅宿の意に轉じた。 ○十七夜代待 十七夜は「立待の月」である。代待は施主に代つて神佛に祈ること。こゝは十七夜の代待をする願人坊主を指すのである。 ○十二燈 燈明を奉る料として十二銅を包むのである。四文錢三個を紙に包んだもので「おひねり」とも云ふ。佛説の十二因縁にかたどる。「十二銅と同じ。十二銅はもと十二燈にて燈明を奉る也。となへ同じ。故に錢十二を用ゐることゝなれり」(嬉遊笑覽、七)。 ○横しま 不正。 ○助け給ふべし 助ふ給ふべき。「何として」に對す。 ○藤田狂言 藤田小平次の狂言。當代の立役としての名優。「六方は嵐、實事は藤田小平次と、この二役はいづれの役者が勤むるも、是をちばんにすと云へり、譽なる哲小平次」(カラナシ「家大門屋敷」寶永二年刊、(錦文流の作)。 ○咄しにも 土産話の種にももの事。 ○圓座 座蒲團。その原形は「圓座は蒲の葉を以て丸く平たく組みたる物也。蒲の葉にて圓く組む故蒲團とも云ふなり、是通例の圓座なり」(貞丈雜記)。 ○心元なく 不安の念にかられて。 ○ならば先同じ列の向ふの方。 ○地獄の上の一足飛 危険至極の狀態。

【評釋】 故郷忘れ難しとは人情である。恐いもの見たしも亦人情である。痴情の人茂右衛門が京都の様子が知りたく見たく、遂に意を決して、田舎姿に身をやつしつゝ、京への道を急いだのは、もつともの所業であつた。わけておさんの小袖も旦那寺の旗や天蓋に形をかへた今日である。人の噂も七十五日とやら、熱ぼりの冷めた時分でもあつた。かくして佗び姿の茂右衛門を京の街に點出した。

闇にも氣を置いた彼である。時日は経てゐても物恐ろしさに變りはない。路次で廣澤の池の面の月影に、おさんを聯想するのはよく彼の氣心を捕捉し得て緊密なるを覺えしめる。それから御室北野まで来ると、もう昔馴染の土

地なので、「案内知るよしして」の文句がよく利いてゐる。足どりも軽いやうだ。しかし町中に入つてはさすがに氣が咎める。月に映る我影に驚くも平凡ながら肯定される。而して目ざす名家の前に立つ。元祿の昔の京の街である。大戸にさす灯影もかすかで、町がしらには薄明い光しか流れてゐなかつたらう。立待の月影は大空に澄みながら、片側を翳す幽暗の中に、茂右衛門は世を忍び人を忍んで佇んだにちがひない。店の間で語る高調子の世間話も、ふさはしい。容姿から更におさん茂右衛門の問題におちついたのは極めて自然である。こゝでそれ〴〵に茂右衛門の噂やら批判やらをさせたのは興趣が深いが、特に大文字の喜助の聲と知つて、八百目の貸金を思ひ出し憤慨する茂右衛門の姿は、鮮やかに讀者の眼前に浮出して来る。「慥かに今のは云々」の行文は適確に欲まり込んでゐる。次で、今一人が、まだ生きてゐるとの噂話を持ち出して、「よい事をしをる」と結論めいた岡燒半分の断定をするや、茂右衛門は疵持つ足の急に悪寒がして、こそ〴〵と逃げ出す。こゝまでの段取もよい。而して願人坊主に報謝して愛宕様に未來の幸福を祈るのも茂右衛門らしいし、又當代の一般民衆にはふさはしい所作である。この際、大經師屋の店先に話し込んでゐた連中が、おさんの悪評を一言も云はなかつた事は、一寸注意を引く。これは不義事件に對する時代の風尚ではなくして、全く談話仲間が若い男連であると云ふ人情の機微に基くものと思ふ。これに懲りて直ちに丹波に引返すかと思ふと、猶も都に名残惜しく、東山から四條河原の芝居をのぞいてゐる。弱い人間性の暴露であると共に、平凡人たる彼の面影は十分に窺はれる。さて芝居小屋の中では、狂言は人の娘を盗むところとあつて、氣をくさらす折柄、あらう事か、同じ列に大經師屋の主人が居た。京都恐ろしの觀念を、こ

ゝで二重にした嫌ひはあるが、この重腰せる事件は、むしろこの場合効果ある叙述として認容したい。「おさんの咄しにも」の文句は、同じ罪に喘ぐ者への情味として見過してはならない。

折節は菊の節句近付て、毎年丹波より栗商人の來りしが、四方山の咄しの次手に、いやこなたの御内儀様はと尋けるに、首尾あしく、返事のものなし、旦那にがい貌してそれはてこねたさいはれける。栗賣、重て申(す)は、物には似た人も有(る)物かな、是の奥様にみぢんも違はぬ人、又若人も生うつしなり、丹後の切戸邊に有けるよと語捨てかへる。亭主聞とがめて、人遣しけるに、おさん茂右衛門なれば、身うち大勢もよふしてさらへに遣し、其科のがれず、様々のせんぎ極、中の使せし玉といへる女も、同じ道筋にひかれ、栗田口の露草とはなりぬ。九月廿二日の曙のゆめ、さら〴〵最後いやしからず、世語とはなりぬ。今も淺黄の小袖の面影、見るやうに名はのこりし。

【語釋】 ○菊の節句 九月九日。重陽。「舒菊花時并採莖葉、雜黍米醺之、至來年九月九日、始熟就飲、故曰菊花酒」。(西京雜記)。又菊を長壽に喩ふるなどの故事により、五節句の一に託す。 ○首尾あしく 具合がわるい。ばつがわるい。 ○てこねる 死ぬ。 ○催し 狩り催す。寄せ集める。 ○科 罪科。 ○同じ道筋にひかれ 同罪として召捕られたの意。 ○栗田口 京都東山南麓の町、古の東海道筋、刑場のあつた所。 ○露草 鴨跖草であるが、こゝはたゞ果敢なくなつたとの意、栗田口の露で、草葉におく露の如くはかなく消えたと云ふのである。 ○世語り世間の噂話。

【評釋】 最後の破綻に當るのがこの一節である。事もなげに叙し去つてゐるのに儼然ない感もあるけれど、栗賣の

世間話が計らずも悲劇的結果をもたらすのは、奇しき世相の一端として意義深く思はせる。

「九月二十二日の曙の夢」以下「今も淺黄の小袖の面影見るやうに名は残りし」の一聯の詞章には、「最後いやしからず」とまづ同情を喚り、更に刑場に於ける衣裳附けにその風采を偲ばせて、哀韻媚や、情感轉た切なるものがある。猶、「中の使せし玉と云へる女」と叙したのは、唐突の感がある。或は不用意に書いたのではないかと思ふ。それは近松の「大經師普曆」の人物にお玉といふ下女がゐて、おさん茂兵衛の媒の役を演じてゐる。事實としてこの話があつたので、西鶴は冥々の中にそのまゝ書き込んだのではあるまいか。しかし「五人女」のこの條では、無くもがなの人名と云ふを妨げなす。

第三篇に當る「おさん」の説話はこゝで終る。この篇は奇しき因縁に纏はれた男女の、知らずく罪惡のどん底に陥つた宿命の悲劇である。而して結構布置に於て「五人女」中、優越するものゝ一である。或は上述の評釋の言と重複する點があるかもしれないが、こゝに一括して結末をつけておきたい。

冒頭第一章の「姿の關守」は、稍煩瑣の譏りを免れないが、通りすがりの美女の中から女主人公おさんの美貌艶姿を最も鮮明に印象づける點に於ては、巧妙な手法を以て臨んだものと云はねばならぬ。次で、夫の留守の淋しさを紛らす手段として、下女を翻弄の材料とし、惡戯が昂じては、身の程を忘れ、遂に偶然的事件によつて思ひもよらぬ不義の女となり了る。斯間の消息には、閑怨を嘆つ艶女の嬌態をも揣摩する事ができる。而して一旦、運命に弄ばれて浮ぶ瀬のなき淵に沈むや、當代に於けるある階級の女性が常に探つたやうな、最後の行動、自殺の道を選

ばずして、どこまでも流るゝまゝに生きようともがいた。愚蒙にして柔弱なる女の本體は赤裸に暴露されてゐる。かの樽屋事件のおせんが罪あらはるゝと共に胸を刺した意地は、おさんには見られなかつた。彼女は「此の上は身をすて命を限り名を立て」と、男を嫉かして家を出で、湖畔に放浪しては入水の狂言を敢てし、遠く山越に丹波路さして逃げ延びてゐる。この態度は、全然活きんがために凡てを顧慮せざる、熾烈なる「生」の執着である。こゝに弱い人間、肉の女性としての彼女が明らかに反映してゐる。而して丹波の栢原に於ける婚姻の一場は、緊張した情緒に弛緩を與へる手法として効果あると思ふ。最終の章、「身の上の立聞」に於ける都返りの段は、わざとらしい風趣が認められるけれど、凡俗の心理として見れば、また面白い。しかもその叙述は人情の機微に觸れて拍案の興さへ惹起する。

かくて栗賣の口から破綻に赴く急轉直下の展開は、さきに述べたやうに、不可思議なる人生の實相の一片であらう。要するに構想のすぐれた點とこれに伴ふ情趣の豊かな點から見てこの一篇は「五人女」中の尤たる位置を占めるものと思ふ。

事實として大經師屋事件はあまり明瞭でない。

「近松研究」には某書に見えるとて「貞享二年五月兩人牢舎の上、追放」とある。某書とは誠にたよりないが「五人女」では天和二年云々とて、祇園會に茶店の前に關所を据ゑて、通る女の品定めしたと書き出し、その結果おさんを迎へ「夫婦の語りひも三年が程も重ねける」とある。これをかりに信據すれば事件突發は丁度貞享二年に當る。西鶴の執

筆はその翌年で大體として事實に準據したかと思はれる。

こゝに寶永元年版の『好色心中大鑑』卷三に「袈裟御前の裏表」と題した一篇がある。大阪立賣堀三丁目の石津屋次郎兵衛の妻おさんは夫の弟市郎兵衛に想を寄せてゐた。然るに市郎兵衛は下女のお玉に心があつて、その媒をおさんに頼む。おさんは渡りに橋と思案して、お玉の寢所に臥して思ひを遂げ、後は互に次郎兵衛の目を窺んで不義の快樂に耽つてゐた。半年計り経て、ある雷雨の夜、事あらはれて二人は面責せられ、隙を見て咽喉掻き切つて相果てた。

『心中大鑑』に載せた事件は全く當時の三而記事的巷談を蒐集したものであるから、思ふに、こゝにも大經師事件と類似した事實があつたのであらう。女房おさん下女お玉と云ふ名の符合は、有りふれた名であるから暗合とも云へやうが、矢張り作意の痕は認められる。即ち心中大鑑の編者は、世間に對して多少の遠慮もあるので、事件の類似から思ひ付いて、人のよく知つてゐる「五人女」に見えた人物の名をそのままに借りたものではあるまいか。尤も「五人女」で寢所をとりかへたのはおさんで、お玉は媒となつてゐるが、要するに似通つた二つの事件であるので、名は流用したと云ふ事になる。

近松門左衛門の淨瑠璃に同一題材を取扱つた作品のあるのは周知の事である。

おさん 竹本座 正徳五年春
茂兵衛 大經師昔曆

これを近松の十七回忌に當る元文五年十一月十一日に竹本座で「おさん 茂兵衛戀八卦柱曆」と改題して興行した。こゝに近松の作の内容を説く必要はあるまい。恐らく近松は石津屋事件に刺戟され「五人女」を踏臺とし、これに獨自主な戯曲

的才能を以て、複雑な人事的葛藤を結合して、あの運命悲劇の一曲を作成したのであらう。人心の奥に流れる情緒の機微と、人間の根柢に蟠る道念の閃めきと、これを操つる宿命の糸とを、巧みに縫り合せた點に於て、西鶴は遂に近松の敵ではなかつた。但し戯曲と小説との分野は自ら相異なるものがあるから、その優劣をこゝで云爲するつもりではない。

その他、この事件を仕組んだ文藝作品を思ひつくまゝに擧ぐれば淨瑠璃には、

本卦復昔曆 北堀江座 明和八年十二月

作者は北脇素人、梁塵軒、中邑阿契で、近松の改作である。

歌舞伎では、正徳五年正月大阪の嵐三十郎座の興行を最初とし、江戸では、

常盤津 浮名ノ草月ノ小夜衣 天明七年八月、中村座

清元 由縁の曆歌 文化十三年九月、中村座

おさん 茂兵衛大經師昔曆(二幕) 天保七年二月、中村座

好色五人女 卷四

江戸にあを物 戀草からげし八百屋物語

目録

- 一、大節季はおもひの闇
かり着の袖に二つ紋有
- 二、虫出し神鳴もふんどしかきたる君様
化物おそれぬ新發意有
- 三、雪の夜の情宿
戀の道しる似せ商人有
- 四、世に見をさめの櫻
借やすかたのちる人有
- 五、様子あつての俄坊主
前髪は又花の風より哀有

西鶴(五人女)評釋

一、大節季はおもひの間

ならひ風はげしく、師走の空、雲の足さへはやく、春の事共取いそぎ、餅突宿の隣には小笹手毎に煤はきするもあり、天秤のかねさへて、取やりも世の定めとていそがし。棚下を引連立て、こんこん小目くらにお登文くだされませいの聲やかましく、古札納め、ざつ木賣、櫃かち栗かまくら海老、通町にははま弓の出見世、新物たび雪踏、あしを空にしてと、兼好が書出しおもひ合て、今も世帯もつ身のいとまなき事にぞ有ける。はおしつめて二十八日の夜半に、わや／＼と火宅の門は車長持ひく音、葛籠かけ硯かたに掛けてにぐるも有、穴藏の蓋とりあへず、かる物をなげ込に、時の間の煙となつて、焼野の雉子を思ふがごとく、妻をあはれみ老母をかなしみ、それ／＼のしるべの方へ立のきは、更に悲しさがきりなかりき。爰に本郷邊に八百屋八兵衛とて賣人、むかしは俗姓賤しからず、此人ひとりの娘あり、名はお七といへり。年も十六、花は上野の盛、月は隅田川のかげきよく、かゝる美女のあるべきものか、都鳥其業平に時代ちがひにて見せぬ事の口惜、是に心を掛ざるはなし、此人火元ちかづけば、母親につき添、年頃頼をかけし旦那寺、駒込の吉祥寺といへるに行きて、當座の難をしのぎける。此人々にかぎらず、あまた御寺にかけ入、長老様の寢間にも赤子泣聲、佛前に女の二布物を取ちらし、或は主人をふみこへ親を枕とし、わけもなく臥まるびて、明れば鏡鉢を薪水だらいにし、お茶湯天目もかりのめし椀となり、此中の事なれば釋迦も見ゆるし給ふべし。お七は母の親大事にかけ、坊主にも油断のならぬ世中と、萬に氣を付侍る。

【語釋】 ○ならひ風 長風、東北の風。 ○師走 十二月。「歳果つ」の義か。極月、臘月などとも云ふ。 ○雲の足さへ 雲脚の早きのみでなく、極月の事とて日脚も常より早く感ぜられる頃である。故に「さへ」の字を用いたのである。 ○春の事 正月の用意を云ふ。 ○餅突宿 餅を搗く家。これも正月の用意である。 ○煤掃 一年中の積塵を掃去り、すが／＼しい気分

新しい年を迎へむとするのである。江戸鹿子には「十二月十三日煤掃、ふるき札を納む」とあるが、必ずしも十三日と限つたわけではないらしい。日本歳時記には「十二月十五日の後、屋中の煤塵を拂ふべし」と見え、日次紀事には「二十日以後選吉日」などとある。 ○天秤の金さえて 秤にかける金銀の貨幣の音が冴えての意。 ○取やり 貸借關係の決算である。 ○棚下 棚は店の事。即ち店の前である。 ○聲 「お一文下されませい」と云ふ物乞の聲である。 ○古札納め 「寶曆明和頃以前は毎十二月御祝おさめよ、古札おさめと呼び巡る。年中佛神の古守札に錢を添えて是に與ふ。」(守貞漫稿、第六) ○櫃かち栗鎌倉海老 いづれも正月の蓬菜に用ふる品。「か」の音で頭韻をふんであるところを注意あれ。 ○通町 日本橋通町である。 ○破窟 弓 歳首の祝として男兒に與ふる玩具となる。年の始めに童子の破窟弓として射るは治まれる世にも武を忘れざる意なるべし。但昔は射亂として正月に内裏にて弓射る事ありしなり、孝徳天皇の御宇に大内にて弓を射さしむと云ふ事、古き文にも見えたり。「日本歳時記、一」正月兒童の弄ぶもの也、破窟弓など書けども、もと濱の輪さて藁にて輪を作り是をまるばして童子に射を習はしむ、是れ獸を射習ふ業なり、今も田家に此風残り、よりに濱弓濱矢と呼べる也(俣訓栞、後篇)。「滑稽雜談」に或説として蚩尤の眼を射たる故事によるとする俗説である。 ○新物 新しいの意でなくて進物の意ではなからうか。 ○足を空にして 足袋雪駄から「足を」と受けたのである。兼好が書出しは「徒然草」第十九段で「人の門を叩き走り歩いて何事にかあらん事々しく罵りて足を雪にまどぶが、曉方よりさすがに音なく……」とあるのに當る。 ○おしつめて二十八日 十二月二十八日。この日附の火事は天和二年十二月二十八日駒込大圓寺からの火事で、普通お七事件を生んだ丸山本妙寺の火事は天和元年

十一月二十八日である。これでは「おしつめて」の語をなさない。事實上就ては書末を参照されたい。○火宅 三界即ちこの煩惱の盛んな現世を火災中の家屋に比した佛語。こゝは火事のこと。「わやく」は人々の騒ぐさま。○かけ硯 懸子になつた硯。懸子は他の匣の縁にかけて其中にはまるやうに作つた匣を云ふ。「かけ硯肩にかけ」は「か」の頭韻である。○かる物 軽い物で、絹の衣類を云ふ。○焼野の雉子 親の子を思ふ譬喩。「雉の子を生みて温むる時、野火にあひぬれば一度驚きてたちぬれど猶すて難きの餘りにや烟の中に歸り入りて終に焼け死ぬるためし多かりとぞ」(發心集、五) ○都鳥その業平 都鳥に縁ある業平(伊勢物語)。「隅田川の影清く」の文句を受けてゐる。業平は美男の代表的人物であるから、この美女と時代違ひで見ないのは口惜しいと云つたのである。○火元近づけば 「火元が近いので」の意か、「火が近づいたからの」意か、はつきりしない。○吉祥寺 曹洞宗、今、東京市本郷區駒込吉祥寺町。長祿年間太田道灌の建立。開山は青巖周陽。○長老 禪寺の住持を云ふ。今禪守住持之者、必呼長老(祖庭事苑) ○二布物 腰巻。○鏡鉢 響銅で作つた樂器で、二面を擦り合せる。○鉦 ども。青銅で作つた盤狀の樂器。共に寺院用のもの。○お茶湯天目 佛供の茶碗である。お茶湯は佛に供ふる煎茶。

【評釋】 「ならひ風烈しく、師走の空」と書き出した冒頭は、空ツ風のすさまじい極月の江戸の天候を思はせるに十分である。而して春の事ども取急ぎとて、年の暮の世態を例の印象的な筆致で徒然草を引合にしつゝ巧みに寫し出してゐる。かゝる氣忙しい押し迫つた頃の火事を叙し、爰にと一轉して、罹災者の一員としてのお七をあらはした。この場合に於ける火事の叙述は少し悠揚に過ぎるし、且「妻をあはれみ老母をかなしみ」の辭句も明瞭を缺くやうである。單に弱い者をいたはり助け、手を取り合つて逃げたと云ふのか、或は穴藏に投げ入れた絹物同然に、此際あへない最後を遂げたときまで解していゝか、恐らく後者に取らねばなるまいが、昧々然たる言葉である。さて

美女たるお七を上野の花隔田の月に喩へたのは、平板に過ぎるけれど、業平に時代違ひで見せない事が口惜しいとはさすがに西鶴らしい口吻で面白く。

罹災者を引きうけた吉祥寺の混亂した状態は鮮やかに描かれてゐる。「長老様の寢間にも赤子の聲、佛前に女の二布物をとりちらし」はいつもの諷諧ではあるが、いかにもうまい。「主人ふみこえ云々」は凡庸に陥つたが、「明くれば鏡鉢」以下は寺院らしい風情が顯著に把握されてゐる。「此中の事なれば釋迦も見許し給ふべし」は奇警であると共に、作者の例の薄笑が見透される。云ふまでもなくこれは彼が平常の態度で、神佛を茶化す軽い心持の發現にすぎない。

この節の終りで「お七は母の親大事にかけ」とて、「坊主にも油断のならぬ世中」と云はせたのは、説話展開の主眼點で、叙しては平凡になるものゝ、又書かないでは何となく物足らぬ感を引く條である。しかし此場合、この一聯の句はむしろ無い方がいゝと思ふ。

折ふしの夜嵐をしのぎかねしに、亭坊慈悲の心から、着替の有程出しかされける中に、黒羽二重の大ふり袖に、栴檀のならべ紋、紅うらを山道のすそ取、わけらしき小袖の仕立、焼かけ残りてお七心にとまり。いかなる上臈か世をはよふなり給ひ、形見もつらしと此寺にあがり物かと、我年の比おもひ出して、哀にいたましく、あひみぬ人に無常おこりて、思へば夢なれや。何事もいらぬ世や、後生こそまことなれと、しほくとしづみ果、母人の珠數袋をあけて、願ひの玉の手にかけ、口のうちにして題目いとまなき折から、やごとな

き若衆の銀の毛貫片手に、左の人さし指に有かなきかのとげの立けるも心にかゝると、暮方の障子をひらき身をなやみおはしけるを、母人見かね給ひ、ぬきまいらせんとその毛貫を取て、暫なやみ給へども、老眼のさだかならず、見付る事かたくて、氣毒なる有さま、お七見しより、我なら目時の目にてぬかん物と思ひながら、近寄かねてたゞすむうちに、母人よび給ひて、是をぬきてまいらせよとのよしうれし。彼御手とりて難儀をたすけ申けるに、此若衆我をわすれて自が手をいたくしめさせ給ふを、はなれがたかれども、母の見給ふをうたてく、是非もなく立別れさまに、覺へて毛貫をとりて歸り、又返しにと跡をしたひ、其手を握かへせば是よりたがひの思ひとはなりける。

【語釋】

○亭坊 和尚のこと。 ○有程 ありたけ。持つてゐる限り。 ○ならべ紋 比翼紋とも云ふ。 ○山道の擗取 山形を二つ三つ連れた裾模様。 ○わけらしき 仔細のありさうな。 ○焼かけ残りて たきこめし香の残り香。 ○世を早うなり給ひ。「世を早うなし給ひ」とあるべきで、天死せしを云ふ。 ○形見もつらし 形見の品として残しておくも悲みの種であるからとの意。 ○上り物 奉納品。 ○題目 南無妙法蓮華經。 ○やごとなき 尊い身分を云ふが、こゝは様子の上品なことを。 ○あるかなきかのとげ あるかないか、わからぬ位に小さい刺である。 ○身を憐み 「身を憐まし」で困惑してゐるさま。 ○暫くなやみ とげを抜かうとしてしばらくの間、いろ／＼苦心したのである。 ○目時の目 目敏きの目の意で、視力の旺んなのを云ふ。 ○覺えて 氣が付いてゐながらの意。

【評釋】

折からの寒空である。罹災者に寺の和尚が着替を貸したのは自然の行爲である。その中に梧銀杏の列べ紋をつけた大振袖があつた。その残香に心の揺めきを禁じ得ないお七は、既に春に目覺めた娘と云はねばならぬ。そ

れを勿體らしく「いかなる上藤が世を早う」した形見であらうかと、無常迅速の信仰の方へ持つて行つたのは、わざとらしい筆づかひである。「母人の珠數袋をあけて、願ひの玉の緒手にかけ、口の中にして題目」は、そぐはない事甚しいの感を起す。すぐ後に水も滴るやうな若衆姿を描き出す位ならば、寺小姓の衣裳らしいとして思ひつかせて、さしつかへあるまいではないか。若くて逝きし人の形見との想像を裏切つて、うれしくも現實の姿を現はしたところに、妙味があると云ふ批判も成立しない事はないが、反照から來る美感も、かう手近であつてはならないとかく、此際に於ける「後生こそ眞なれ」とて、つまぐる珠數は、調整を缺くものとして眺めたい。

さて、契機たる「あるかなきかのとげ」の段に移る。冬の日薄い陽さしの、さなきだに夕暮である。濡縁近くにちり出た若衆が、白銀の毛貫片手に、さゝやかな刺を抜かうとて抜きわづらつてゐる。寄り添つたのは鹿子絞の振袖を彩と亂したうら若い町娘である。「あるかなきかのとげ」この一幅の好畫題は——もう大分前の事であるが——和田英作畫伯の彩筆によつて描き出されてゐる。

初めて母親が近づき、老眼のために抜きあぐねて娘を呼ぶ。娘はわれならば念じつゝ、嬌羞を帯んで近寄りかねてゐる矢先、母に呼ばれて寄り添ふ事ができる。渡し込みは平凡な位に自然である。たゞ、この若衆「我を忘れて」娘の手をいたく締めたのは、思ひがけぬ浮華と奔放との把持者であつた。しかし、娘は一層くはせ者の猫かぶりらしくあらはされてゐる。「覺えて毛貫とりて歸り」、戻す機會をわざと作つて其手を握りかへしたのは、大振袖の残り香に心を動かしただけの素質を、的確に物語るものと云はねばならぬ。さればこそさきの後生心は、作者の付焼刃にすぎない事がいよ／＼肯定されて、浮氣娘は浮氣娘らしく率直に寫した方が自然に享け入れられると思ふのである。

この一節で、少し變に感じられるのは「口の中にして題目」の一句で、八百屋の宗旨なら差支へないもの、曹洞宗の吉祥寺を、「年頃願をかけし丹那寺」とあるのはどうしたものであらう。

お七次第にこがれて、此若菜いかなる御方ぞと納所坊主に問ければ、あれは小野川吉三郎殿と申して、先祖たゞしき御浪人衆なるが、さりとはやさしく情のふかき御かたごかたるにぞ、なをおもひまさりて、忍びくの文書で人しれずつかはしけるに、便りの人かはりて、結句吉三郎方より、おもはくかづくの文おくりける心ざし、互に入亂て、是を諸思ひとや申べし。兩方共に返事なしに、いつとなく淺からぬ戀人こはれ人、時節をまつうちこそうき世なれ。大晦日はおもひの闇に暮て、明れば新玉の年のはじめ、女松男松を立飾て、唇みそめしにも姫はじめおかしかりき。されどもよき首尾なくて、つゝに枕も定ず、君がため若菜祝ひける日もおはりて、九日十日過十一日二十三十四日の夕暮、はや松の内も皆になりて、甲斐なく立し名こそはかなけれ。

【語釋】 ○納所坊主 禪宗の寺にて施物を入れる所を納所と云ふ。そこを掌る僧。 ○さりとは それにしてもの意。 ○便りの人かはりて 初めは女の方から手紙を出したのが、後には男の方から出すやうになつたのである。便りの人は仲介者の意ではない。 ○返事なしに。 直接手紙の文句への返し言葉はなく、たゞ自分の思ひのたけのみを繰述するので、即ち情熱の熾烈なるさまを表した言葉である。 ○思ひの闇 戀のために心の昏亂してゐるさま。闇は大晦日の縁語。 ○姫始め 卷二、第一に既出。 ○されども 層には姫始めとありながらである。 ○君がため若菜祝ひける日 「上子日、内蔵内膳、各供若菜」(西宮

記)。「君がため春の野にいで、若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」(古今集、讀人しらす)。 ○松の内 正月に門松を立て、お期間を云ふ。元日から七日まで。但、上方では十五日まで。こゝは作者が上方風に書いたのである。 ○甲斐なく立しまだ深い仲となつたわけでないのに浮名が早くも立つたのである。こゝの語脈には「春の夜の夢ばかりなる手枕に甲斐なく立たむなこそをしけれ」(千載集、雜上、周防内侍)の歌が絡ましてある。

【評釋】 前段「あるかなきかのとげ」に萌した戀の芽生の第二段がこれである。説話の展開としては、何の變つたところもない、平淡な道筋にすぎない。しかし語句としては面白い表現が隨所に散見される。

「便りの人かはりて」と云ひ、「兩方共に返事なしに」と云ひ、語法から見れば曖昧模糊の感がある、それだけ清新の趣の満ちて、含蓄の深い姿を示してゐる。「いつとなく淺からぬ戀人戀はれ人」の句も、忘れぬ印象を残すだけの力はあらう。

しかし、「唇見そめしに姫始をかしかりき」とあつて、「されどもよき首尾なくて」と受け、「つゝに枕定めず」と露骨に出で、更に「甲斐なく立し名こそはかなけれ」と結んだ。この「されども」や「甲斐なく」は輕々に見過す事のできない措辭であり、(枕云々の文字は別としても)言葉の内容に入つて省察すれば、いかにも官能的氣分が強く浮き上つて來て、あまりに感覺的要素に即した表現法であると云はねばならぬ。

第一章の「大節季は思ひの闇」と云ふ標題は、こゝの本文に「大晦日は思ひの闇にくれて」とあるので明瞭になり、而してこのおもひの闇の悩み心を、女主人公お七の胸に植ゑつけるまでの筋道を叙したが、とりも直さず此章の語る全圖なのである。

二、虫出しの神鳴もふんどしかきたる君様

春の雨玉にもぬける柳原のあたりよりまいりけるのよし、十五日の夜半に外門あけなく扣にぞ、僧中夢をどろかし聞けるに、米屋の八左衛門長病なりしが、今宵相果申されしに、おもひまふけし死人なれば、夜のうちに野邊へおくり申度との使なり。出家の役なれば、あまたの法師めしつれられ、晴間をまたず傘をとり、御寺を出てゆき給ひし跡は、七十に餘りし庫裏姥ひとり、十二三なる新發意一人、赤犬ばかり、殘物とて松の風淋しく、虫出しの神鳴ひき渡り、いづれも驚て、姥は年越の夜の煎豆取出すなど、天井のある小座敷たづねて身をひそめける。母の親・子を思ふ道にまよひ、我をいたはり夜着の下へ引よせ、きびしく鳴時は耳ふさげなど、心を付給ひける。女の身なれば、おそろしさかぎりもなかりきされ共、吉三郎殿にあふべき首尾、今宵ならではとおもふ下心ありて、扱もうき世の人、何とて鳴神をおそれけるぞ、捨てから命、すこしも我はおそろしからずと、女のつよからずしてよき事に無用の言葉、すゑくの女共まで是をそしりける。

【語釋】 ○春の雨 「朝みどり糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か(古今集、春上、僧正遍昭) ○柳原 江戸神田筋蓮橋より淺草橋へつゞく十町計りの土手筋である。土手の外は神田川である。上記の歌の縁にて柳原とつゞけたのである。 ○あらくなく、荒々しく。なくは否定の意味でなし。「如才ない」の如し。 ○思ひまふけし死人 死ぬにきまつてゐた病人の意。 ○庫裏姥 庫裏(庫裡)は寺院のくりや、臺所である。そこを預る婆さん。 ○新發意 子供坊主である。 本來は發心し

て新たに佛門に入りたる人を云ふ。 ○松の風淋しく折の意。松には「待つ」を掛けてある。 ○虫出しの神鳴 初雷の事。子供が驚いて虫を出すためかく云ふ。 ○年越の夜の煎大豆 追儂の時の豆は雷除になると云ふ俗説。 ○我をお七を云ふ。 ○浮世の人 世間の人。 ○捨てゝからが命 落ちたら死ぬだけの事だとの意。 ○女の強からずしてよき事に云々 女は強くなくともよいものに、強がりを云ふのでの意。

【評釋】 松の内も今日一日と云ふ十五日の夜半の出来事である。まづ、檀家に不幸があつて夜更に寺の門を叩く。ありふれた事象ながら、正月気分に入り浸つてゐる矢先とて、意想外の突發事件のやうに受けとられる。和尚が番僧ども召しつれてあたふたと出てゆくさまも覗はれるやうに寫されてゐる。「あまたの法師召しつれられ晴間を待たず」とあるので、柳原の米屋も、かなりの家格らしく思はれる。而して後に残つたのは飯たき婆さんと子供坊主と赤犬ばかりとある。赤犬は餘計のやうであるが、やはり捨てがたい一員と認めたい。そこへ初雷がごろ／＼と来た。

冒頭に「春の雨玉にもぬける柳原」として古歌を絡んだ物靜かな雨模様は、突如としてこゝに春雷をもたらしした。措辭にも内容にも漲つてゐた悠暢たる気分は、一轉して急燥の風趣に蔽はれたのである。姥が年越の夜の撒き豆を取出す滑稽も自然であるが、お七の母親の娘に對する所作には、世間並の親心が働いてゐるだけ、第三者の眼には、いかにも手きびしく諷諷味を強要する。春心に染みた色娘を、夜着の下へ引寄せ耳をふさげとは、餘りな子供扱ひと云はねばならぬ。しかしこれも宅の子供はまだ本當のねんねえでございまして」と常に耳にする世間母親氣質で、昔も今も變らぬ人情の自然であらう。たゞ、氣づかぬは母ばかりであり、「親馬鹿ち

やんりんの「風情は、前章の末段と共に」され共吉三郎殿に會ふべき首尾、今宵ならではの下心」の文辭によつて、的確に暴露されてゐる。「何とて鳴神を怖れけるぞ、捨てゝから命」との言葉は誰が云はせた言葉であらう。戀は膽を太くする。女の強がりの裏には愛欲の亂舞がある。末々の女をして無用の言葉と譏らしめたお七の強がりも、誌さずもがな、戀の云はせたわ言である。

やうく更過て、人皆をのづからに寐入て、軒は軒の玉水の音をあらそふ、雨戸のすきまより月の光もありなしに靜なるをりふし、客殿をしのび出けるに、身にふるひ出て足元も定かね、枕ゆたかに臥たる人の腰骨をふみて、たましひ消がごとく、胸いたく上氣して物はいはれず、手をあはして拜みしに、此もの我をとがめざるを不思議と、心をこめて詠めけるに、食たかせける女のむめといふ下子なり。それをのり越て行くを、此女裙を引とめける程に、又胸さはぎして我留るかとおもへば、さにはあらず(五字略)手にわたしける。さてもくいたづら仕付て、かゝるいそがしき折からも氣の付たる女ぞとうれしく、方丈に行きてみれども、彼兒人の寢姿見えねばかなしくなつて、臺所に出れば、姥目覺し、今宵鼠めはとつぶやく、片手に椎茸のにしめ、あげ麵葛袋など取をくもおかし。しばしあつて我を見付て、吉三郎殿の寢所はそのく小坊主とひとつに三疊敷にと、肩たゝいて小話ける。思ひの外なる情しり、寺には惜やといとしくなりて、してゐる紫鹿子の帯ときてとらし、姥がをしへるにまかせ行くに、夜や八つ比なるべし、常香盤の鈴落て、ひゞきわたる事しばらくなり。新發意其役にや有つらん、起あがりて糸かけ直し、香もりつぎて座を立ぬ事とけしなく、寢所へ入るを待

かね、女の出来こゝろにて髪をさばき、こはひ貌して闇がりよりおどしければ、流石佛心そなはりすこしもおどろく氣色なく、汝元來帯とけひろげにて、世に徒ものや、たちまち消され、此寺の大黒になりたくば、和尚のかへらるゝ迄待と、目を見ひらき申ける。お七しらけて、はしり寄、こなたを抱て寢にきたといひければ、新發意笑ひ、吉三郎様の事か、おれと今迄跡さして臥ける、其證據には是ぞと、こぶくめの袖をかざしけるに、白菊などいへる留木のうつり香、どふもならぬとうちなやみ、其寢間に入るを、新發意聲立て、はあ、お七さまよい事をといひけるに又驚き、何にてもそなたのほしき物を調進すべし、だまり給へといへば、それならば錢八十と松葉屋のかかるたミ、淺草の米まんぢう五ツと、世に是よりほしき物はなひとへば、それこそやすい事、明日ははやく遣はし申すべきと約束しける。此小坊主枕かたむけ、夜が明たらば、三色もろふはず、必もろふはづと、夢にもうつゝにも申し寢入に靜りける。

【語釋】 ○軒の玉水 雨だれである。玉は美稱。歌言葉として用ひられる。 ○ありなしに あるかなきかで、雨月の微茫たる光を形容したのである。 ○胸いたく はつと驚いたのである。 ○上氣 わくくくと胸をとるかし、ぼつとするさま。 ○下子 下司はした女。○いたづら仕付て 不品行には慣れての意。 ○方丈 維摩の庵は方丈とて一丈四方の部屋であつたと云ふところから、寺の表座敷を云ふ。「方丈蓋寺院之正寢也(釋氏要覽)」 ○兒人 小姓のこと、吉三郎を指す。 ○紫鹿子 紫色の鹿子絞である。 ○八ツ 午前二時。 ○常香盤 佛具用の香壇。近世製之、京大阪にてこれを作るもの多しと雖も、武江吉政太兵衛が造る所を上品とす。關西の諸州關八州の寺院多くは吉政が作るを貯ふ。此者始は銀町にあり、後回向院に住す祖父より相繼て三代此器を造るを業とす(木朝世事談)此香壇は天秤仕懸になつてゐるので、その鈴が落ちたのである。 ○とけ

しなく、しどけない(だらしない)に同じ語。こは何時までもぐづ／＼してゐるさまを云ふ。○出来心にて云々、つい思ひつきで、髪をさばいて幽霊のまねをしたのである。○汝元來云々、この語法は坊主が引導を渡す時の口吻である。○帯とけひるげ帯なしで前をはだけてゐるさま。○徒もの、淫奔者。○大黒、元來印度神マハカラの事で臺所を司る神。それより轉じて寺の内證を預るもの即ち僧侶の妻女を云ふ。○しらけて「てれかくし」と云ふのに同じ。きまりの悪いのを強いてごまかさんとする行爲を云ふ。○跡さして臥し、あゝあゝに寝る。反對の側に頭をし、足を双方よりさし合ふのである。○こぶくめの袖、香をたきこめた袖。○留木、香木を焼き、その香りを衣裳に移し留むること。○打ちなやみ、心を動かすこと。○松葉屋のかるた。「かるたは寛永年中の頃、オランダ人長崎に來りて遊ぶを、人民是を習ひ諸國の戯れとす」(半日閑話)と見え、「塵芥略記」には元和二年二月十四日の條に「召三經師藤藏令三摺之」とある。その流行の時代はこれで分るが、これは勿論繪がらたであらう。松葉屋はその賣肆であらうが、場所は未考である。○淺草の米饅頭、元祿の頃、淺草聖天町金龍山下の鶴屋と云ふ菓子屋からこの米饅頭を賣り出したと『墨水消夏錄』に見える。猶、それには遺佚(延寶頃の狂歌師)の狂歌「根本はふもとの鶴や生みぬらん米まんぢうは玉子なりけり」が添えてある。一説には慶安の頃淺草鶴屋の娘よねと云ふ者が製し始めた。○申し寝入、云ひ／＼寝入つたのである。

【評釋】 春淺き雨の夜半の沈黙は初雷によつて破られた。かくして「軒は軒の雨水の音を争ふ」程に、更けてあたりはまたもとの靜寂に歸つた。此時、微茫たる雨月の薄ら明りを偷んで、忍び出たのがこの色娘である。母親が神鳴のひどく鳴る時には耳を塞げと教へた、その娘である。作者はこの「忍びの段」を、かなり綿密に周到に寫し出してゐる。われ／＼は、この叙述を通して作者の意圖と興味を推測すると共に、描かれた時代の反映をも的確に

把捉する事ができるのである。

初め、計らずも寝てゐる人の腰骨を踏んで、魂消ゆるほどに驚き、言葉も出でずして手を合せて拜んだお七も、下女の粹な態度によつて落ちついた氣分を取戻した。次で目をさました姥は、向ふから自分の心を見ぬいて、吉三郎の部屋を教へてくれた。落ちついた氣分は更に餘裕を有つまでに心廣くなる。紫鹿子の帯を御禮ごゝろに呉れてやつた洒然たる物ごしは、その證據である。

關所はこれで終らなかつた。靜まり返つた八つ時の沈黙を破つて常香盤の鈴が落ちて響き渡ること暫くなりとなる。新發意は起き上つた。而してちつとして中々寢床にもぐり込まない。既に心の餘裕を生じたお七が、子供と侮つておどさうとしたのは、彼女の本性の寛濶なのは別として、更に一步進んで大膽になつてゐたのである。この徑路は漸層的に無理なく運ばれてゐると云はねばならぬ。

幽霊のまねをするお七の此の企圖を跳ね返して、引導を渡すが如き口吻で「汝元來」云々ときめ、つけた小坊主は、一かどをしたたか者であつた。しかし、お七がてれかくしに「こなたを抱いて寢に來た」と云ふのと、「吉三郎様の事か」とうまく外らして圖星を指す、この一節は少し筆が走りすぎた非難はなからうか。お七に小娘らしい點のないのはまだしも、小坊主の此の態度は明らかに度外れてゐる。

「はあお七様よい事を」の言はませ、子供なら云ひかねないが、これも亦どうであらう。口留の品々は眞實らしい、眞實らしいだけ、前に叙述された輕佻な所作がわざとめて映つて來る。「夜が明けたら三色もらふ筈、必ず貰ふ筈としやべりながら寢た子供らしさも、折角ながら打ち壊し氣味の調子の方が強い。要するに新發意の點出は面

白いけれど、その取扱上、あまりお七を活かさうとしたため、却つてその対照たる新發意の行動に一種の矛盾を生じた。即ち筆、餘りて意これに伴はざるの結果に陥つたものと認めたい。

かく、作中人物の位置に即して省察すれば、如上の缺陷を默過し難いけれど、たゞ叙述に浮ぶ事象の姿は鮮明にあらはれて、その場、その場の人物は、心にくきまでに躍動してゐる。これはこの際に於ける明側として十分に肯定すべきであらう。

翻つて、下女の所作、姥の言動、而してお七のこれに應じて變りゆく姿態、また新發意に對する仕こなしには、知らず／＼に反照する時代の頽廢靡爛の影を捉ふべきではあるまいか。

猶、些細な事ながら、姥が鼠の用心に片手に椎茸の煮しめ、あげ麵葛袋など取りおくの一句は、よく婆さん氣質をあらはしてゐるし、「常香盤の鈴落ちて響き渡る事暫くなり」の一行は諧調の上で忘れがたい印象を與へるものと思ふ。

其後は心まかせになりて、吉三郎寢姿に寄添て、何共言葉なくしどけなくもたれかゝれば、吉三郎夢覺て、なを身をふるはし、小夜着の袂を引かぶりしを引のけ、髪に用捨もなき事やまゝいへば、吉三郎せつなく、わたくしは十六になりますといへば、お七わたくしも十六になりますといへば、吉三郎かさねて長老様がこはやといふをれも長老様はこはしといふ、何とも此戀はじめもどかし。後はふたりながら涙をこぼし、不埒なりに、又雨のあかり神鳴あられなくひゞきしに、是は本にこはやと吉三郎にしがみ付きけるにぞ、おのづからわ

りなき情ふかく、ひへわたりたる手足やと肌へちかよせしに、お七うらみて申し侍るは、そなた様にもにくからねばこそ、よしなき文給はりながら、かく身をひやせしは誰させけるぞと、首筋に喰つきける、いつとなく(十六字省略)袖は互にかぎりは命と定ける。程なくあけぼのちかく、谷中の鐘せはしく、吹上の榎の木朝風はげしくうらめしや今寝ぬくもる間もなく、あかぬは別れ、世界は廣し、晝を夜の國もがたと、俄に願ひとても叶はぬ心をなやませしに、母の親是はとたづね来て、ひつたてゆかれし。おもへばむかし男の鬼一口の雨の夜のこゝちして、吉三郎あきれ果てかなしかりき。新發意は宵の事をわすれず、今の三色の物をたまはらすば、今夜のありさまつげんといふ。母親立歸りて、何事かしらね共、お七が約束せし物は我が請にたつといひ捨て歸られし。いたづらなる娘もちたる母なれば、大かたなる事は聞かでも合點して、お七よりはなを心を付て、明の日はやく其もてあそびの品々調ておくり給ひけるとや。

【語釋】 ○吉三郎寢姿に 吉三郎の寢姿に。 ○しどけなく だらしなく みだらな嬌態を云ふ。 ○髪に用捨もなき事や。 夜着の袂を引つかぶつたので、髪がこはれても關いせんかと、お七が吉三郎に云つたのである。髪は若衆鬘に結つてゐるからである。 ○せつなく 迫まられて感ふさま。 ○不埒 こゝは埒があかぬ。事件の進歩せぬさま。 ○雨あがり神鳴 雨あがりの神鳴。 ○袖は互に限りは命 互に袖は濡れ、命の限り變るまいと誓つたのである。袖は濡れとは男女の交歡を云ふ。 ○

谷中の鐘 長耀山感應寺の鐘。 ○吹上 未詳、下新座の吹上觀音の森を指せしものか。 ○世界は廣し云々 世は廣いから、どこかに常夜の國はないものか、そんな所が欲しい。 ○昔男の鬼一口 伊勢物語の芥川の條(前略)神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉のありけるに、女をば奥におし入れて、男は弓胡録を負ひて戸口に、はや夜も明けな

んと思ひつゝ、あたりけるに、鬼はや友をば一口にくひてけり、あなやと云ひけれど、神の鳴る騒ぎに之聞かざりけり云々」
 請に立つ 證據人になること。こゝは引き受けたの意。 ○

【評釋】 この場合に於ける女はすべて主動者として取扱はれてゐる。前段からの受け渡しによつて、その點に無理はない。女も十六、男も十六と云ふ以上、吉三郎の態度もそのまゝ肯定してよからう。

夜着を頭からすつぽり冠つて、「私は十六になります」は、氣の小さいおとなし作りの寺小姓としてよく出来た表白である。「重ねて長老様がこはや」もよい。これに反してお七はまづ夜着を引きのける。髪はこはれてもいゝのかときめつける。そこで「妾も十六になります」とか「おれも長老様はこはし」とか云ふのは單なる鸚鵡返しのお座なりの言葉さしか受けとれない。しかし「何とも此戀始め、もどかし」と、作者をして舌打ちせしめるやうな實況であつて見れば、男の煮え切らない態度に、やむなく暫くは引きづられてゐたと解すべきであらう。さればこそ、縁結びの雷鳴を契機として、「かく身を冷せしは誰がさせけるぞ」の口説さへ自然に浮上つて、首筋に喰ひつくの狂態をも敢てするのである。

かくて、靈犀一點の紅を解し、きぬぐの曙近くなつて、朝風はげしき中を寺の鐘が鳴る。「晝を夜の國もがな」とは、さきにも清十郎の説話に見えたやうに、いづれの時にもある、情痴の人の常に描く白日夢であらう。

この果敢ない夢は、直ちに現實に引きづり出された。昔男の鬼一口のその如く、吉三郎は足摺りして歎かねばならなかつた。「是はと尋ね來て、ひつたて行かれし」の行文には、氣の立つた母親の様子が鮮やかに見透される。新發意の言葉で立歸り「何事か知らねどもお七が約束せし物は我が請に立つ」と言ひ捨てるあたりも、ぶり／＼しな

がら性急に事件の結末を付けようとする、その性質の一面がまぎ／＼と窺はれる。而して「いたづらなる娘もちたる云々」として、相當に分のわかつたお袋様なる事も句はされてゐる。この場合の母親の姿は、零言片句ではあるが、かなり明晰に描きあげられてゐると思ふ。

猶、この節で「私は十六になりますと云へば、お七妾も十六になりますと言へば(言ふ)。吉三郎重ねて長老様がこはやといふ(言へば)おれも長老様はこはしといふ。」は、△印の個所だけは括弧の中のやうに、訂正して以つて文格を整ふべきである。原文の通りでは、いかにも、投げやりな文章と云はねばならぬ。

三、雪の夜の情宿

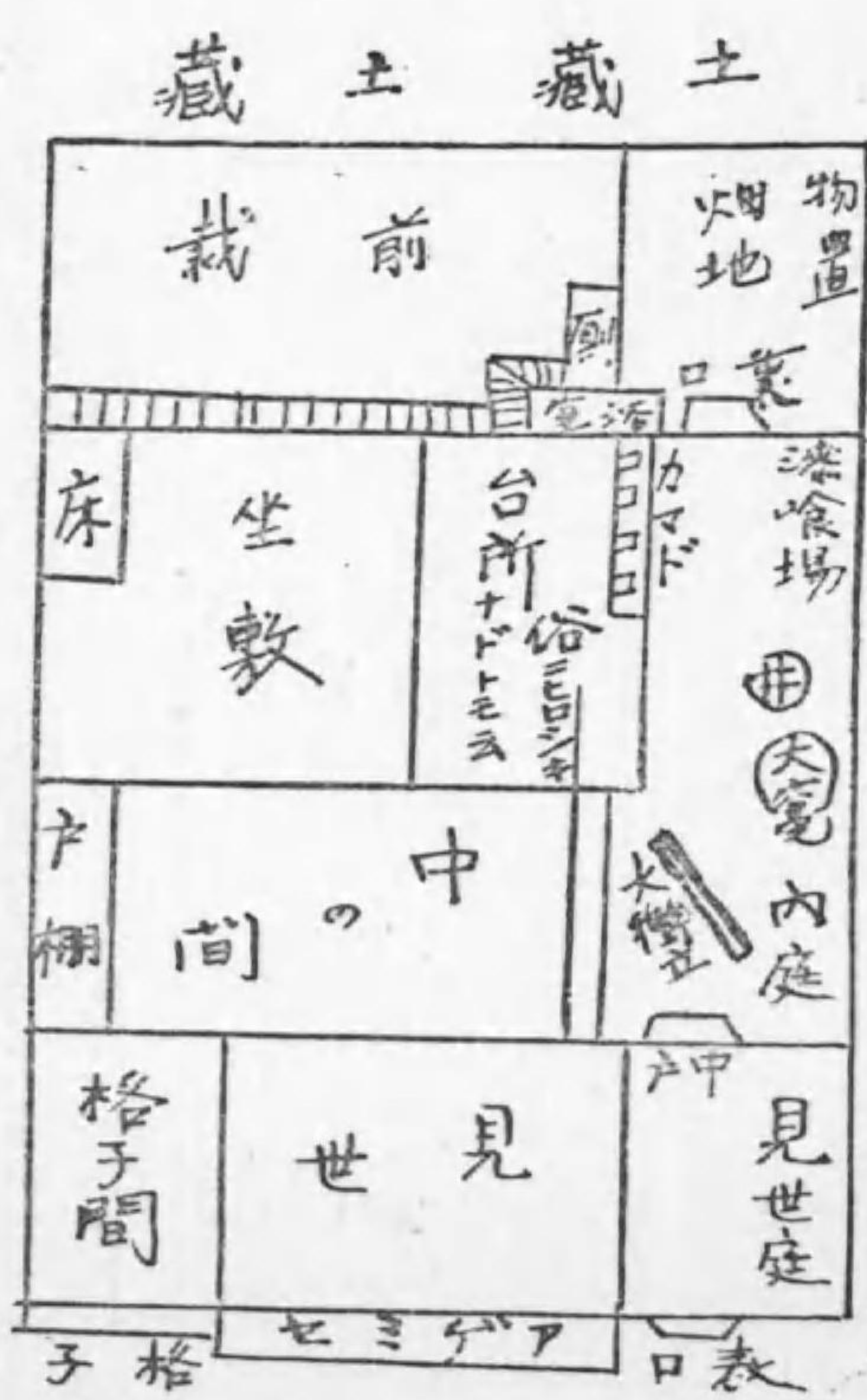
油断のならぬ世の中に、殊更見せまじき物は、道中の肌付金、酒の酔に脇指、娘のきはに捨坊主と、御寺を立歸りて其後は、きびしく改て戀をささける。され共下女が、情にして文を數通はせて、心の程は互にしらせける。有夕板橋ちかき里の子と見えて、松露土筆を手籠に入れて、世をわたる業とて賣きたれり、お七親のかたに買とめける。其暮は春ながら雪ふりやまずして里までかえる事をなげきぬ。亭主あはれみて何ごゝろもなく、つる庭の片角にありて、夜明なばかへれといはれしをうれしく、牛旁大根の筵かたよせ、竹の小笠に面をかしくし、腰蓑身にまとひ一夜をしのぎける。嵐枕にかよひ、土間ひへあがりけるにぞ、大かたは命もあやうかりき。次第に息もきれ眼もくらみし時、お七聲して、先程の里の子あはれや、せめて湯成共呑せよと有しに、食焼の梅が下の茶碗にくみて、久七にさし出しければ、男請取て是をあたへける。忝き御心入といへば、くら

まぎれに前髪をなぶりて、我も江戸にをいたらば、念者の有時分じやが、痛しやといふ。いかにも淺ましくそだちまして、田をすく馬の口を取り、眞柴刈より外の事をそんじませぬといへば、足をいらひてきどくにあかどりを切さぬよ、是なら口をすこしと口をよせけるに其悲しき切なさ、齒を喰しめて涙こぼしけるに、久七分別して、いや／＼根深にんにく喰し口中もしれすとやめける事のうれし。其後寝時に成て、下々はうちつけ階子を登り、二階にもし火影うすく、あるじは戸棚の鏡前に心を付れば、内義は火の用心能々云付て、なを娘に氣遣せられ、中戸さしかためられしは、懸路つなされてうたてし。

【語釋】 捨坊主 元來は流浪する坊主。又は坊主を罵りて言ふ語。こゝは放埒な坊主の意で、娘の傍に捨て、ある、即ち捨の自由なと云ふ意味合も加つてある。 ○御寺を立ち歸りて 御寺から家に立ち歸りて。 ○改めて 吟味する、即ち訓誡典事へるのである。 ○懸をさきける 二人の懸仲を裂いた。 ○情にして 同情によつて。 ○板橋 中仙道宿驛、日本橋より二里。今東京府下北豊島郡板橋町大字下板橋。 ○世をわたる業とて それが渡世の職であるので。 ○お七親の お七の親のまゝがひどく降つてゐるので板橋まで歸るのはつらいと云つて嘆いたのである。 ○つい 地の文の語が亭主の言葉か曖昧である。「何心もなくつい」かう云つたのか。又は「つい庭の片角に云々」口にしたのかどちらにも取れる。 ○竹の小笠 竹の子笠の皮を編んで作つた笠。 ○風枕に通ひ 風が枕許に吹込む。 ○土間 どまである。屋内で床のない土のまゝの場所。 ○お七聲して お七の聲して。 ○下の茶碗 「下」は召使階級を指すのであらう。主人の家族を「上」と云ふに對す。 ○男前取りて是をあたへる 男は久七。久七がその茶碗をうけとつて、その子に是れを與へけるのである。 ○御心入 御親切。 ○くらま

ぎれ 暗闇にまぎれて。 ○我も 「汝れも」に同じ。他稱の代名詞。目下のものに向つて云ふ語。既に「狂言」などに見ゆ。 ○あいたらば 生長したなら。即ち江戸生れの都氣質であるならの意。 ○念者 男色關係の者を云ふ。念友、少人、念人なども云ふ。 ○淺ましくそだちまして つまらない育ちでありまして、風流氣など少しもありませんの意がこもつてゐる。 ○いらひて。なぶる。手を觸れる。 ○奇特に 感心にも云ふに同じ。 ○分別して 思ひ直したのである。 ○根深 葱のこと。 ○やめける 接吻を中止したのである。 ○うちつけ階子 階子を打ち附けたばかりの形をした階段である。 ○中戸 店庭と内庭との間の戸。町家の通り庭にあり(圖參照)。 ○うたてし 憂いつらい。

○表口四五間の宅見取圖 (守身漫稿第二編所載)



【評釋】

堰かれた戀の、わずかな隙をもとめて迸り出た果敢ない逢瀬が、この一章には取扱はれてゐる。

吉祥寺で飽かぬ別れをした二人は、下女の情によつて文通だけで互の心を結び合はしてゐた。かの雷鳴の夜に氣をきかした下女であらう。極めて當然な取捌きである。

板橋から、松露や土筆など、青物屋の店先を賑はすしりの代物を持つ里の子が来る。八百屋の八兵衛は、それを買ひとつた。折からの雪の夕暮で、その寒空を、當時駒込から板橋まで北に向つて歸るのは辛らかつたに違ひない。亭主は庭の片隅で明かせと云ふ。この邊りは何のこだはりもなく筆は自然に進んでゐる。

吹き込む寒風を防ぐものは、片寄せた蓑と身にまとつた腰蓑ばかり、横たへた所は土間である。この雪の夜の冷え上つて「息もきれ眼も昏みし」は無理でない。頑丈づくりの百姓育ちなら、ともかく、後で明るみへ出る如く、華奢姿の寺小姓であつて見れば猶更でも、さこそと肯かせる。こゝでは、此の里の子が田舎育ちにしては、雪の宵路を厭つたり、夜風に身を痛めたりするさまに、讀者をして一種の疑念を挟ましめ、「さては」と云ふ推測を使喚させれば、作者の叙述は成功したものと云はねばならぬ。

八百屋の亭主は同情したけれど、庭に寢ろの程度であつた。お七が「先程の里の子哀れやせて湯なりとも吞せよ」と云つたのは、さすがに娘心が働いてゐる。そこで飯炊のお梅が下男の久七に湯呑茶碗を渡す。久七うけつて、その子に與へる。而して此場合に於ける久七對里の子のいきさつは、西鶴の一種味の暴露であると共に、世相の一面の反映でもある。

久七が暗きにまぎれて里の子の前髪をなぶる。又足をまさぐる。顔のきれてゐないのをほめる。それから口を寄

せやうとする。都會情調に馴致された、時代の頹唐氣分に浸染した若者の態度は、十分に現はれてゐる。お前も江戸育ちなら念者の有る年頃だけれど、田舎者でそれが無からうから、氣の毒ぢやと云ふ口吻も、彼がこの方面の對世間觀を確實に把握することが出来る。これに對する里の子の應答はなか／＼味を見せてゐるやうである。「いかにも淺ましく育ちまして」には、卑下のもとにこそ、ぐつたい氣分が揃みとられ「田をすく馬の口をとり、眞柴刈る外の事は存じませぬ」も面白い表現である、久七の露骨な所作に、「その悲しさ切なさ齒を喰ひしめて泪こぼし」たのは、單なる恐れでも、また悲しみでもない。換言すれば念者を知らぬものの憤激の發露ではない。この道を心得たものが、久七づれにかゝる態度を以て臨まれる事が心外なものである。それでなくては「悲しさ切なさ」の文字は活きて來ない。齒を喰ひしめてこぼす泪も無意義になる。この言葉は、里の子が只者でない事を示すに十分の内容を言外に髣髴させてゐる。讀者はこの潜在せる意味を、冥々のうちに會得しつゝ文辭を辿ればこそ、妙趣ありと感するのである。この冥々の感が知らず／＼の裡に、讀者の心を捉へてゐるので、「戀路綱切れてうたてし」の文句が、びつたりと響いて來るのである。叙述にこの豫感を生育させるものがなかつたならば、極めて力の薄い、そぐはない落筆となり了つたであらう。

さて、久七の分別は、一轉して諧謔に逸したもので、巧緻と云はねばならぬ。商賣道具の葱やんにくを持つて來たのも、輕快である。ここで一言附記しておきたいのは「我も江戸に云々」の言葉の解釋である。語釋の通りで差支へあるまいが、たゞ「我れ」の語を「汝れ」の意に用ひた例がこの作者のものでは他に殆んど見當らぬ事である。(記憶が鈍くて思ひ出せないのかも知らないが、極めて稀と思ふ)。そこで普通の使用法に従つてこゝを、久七曰く

「おれも江戸育ちならお前のやうな念者がある頃ぢや、實は無い。見ればお前も年頃ぢやが、そんな風をして可愛想だね」と寒空にふるへてゐるのに同情して、念者の關係を結ばうとする。即ち念友と云ふ事は話だけ聞いてゐるので、この好奇心にそゝられての久七の所作と見る。里の子は、十分知つてゐる道なので、わざと白々しく「いかにも淺ましく」云々として「そんな事存じませぬ、野良仕事ばかりしてゐますので」と外らす。——かうも解釋されない事もない。實はこのところはまだ考勘の餘地があるやうに思つてゐる事を申しておきたる。

この場合を過ぎては「寢時」になる。それ／＼の就寝前の用意、とりたてゝ云ふ程の事はない。寺での濡場を見た母親が、いやが上に用心するのはもつとも次第である。

猶、この節の冒頭、油断のならぬ世の中とて、特更に見せまじきものを「道中の肌付金、酒の酔に脇指、娘の際の捨坊主」と列擧したのは、いつもながらの此の作家が剗切にして鋭敏な世相觀の表出である。これに反して、下男の久七はどうした事か、樽屋とおせんを張り合つたのが久七。りんが茂右衛門への艶書の代筆を頼んだのが、これも久七。今度の八百屋にもまた久七。この階級の通り名（久三、久七、久助は皆下男の通稱。京都では一季間の奉公人を久三と呼び、江戸では渡り者を久三、長く勤めたものを久七又は久助と呼ぶ。後には何らの區別なしに一般下男の異名となつた）として行はれてゐた事實はあらうが、他の名でも埒の明くところである。

八つの鐘の鳴時、而の戸扣て、女と男の聲して、申し嬢様、只今よろこびあそばしましたが、しかも若子様にて旦那様の御機嫌と、頻によばはる、家内起さはきて、それはうれしやと寢所より直に夫婦連立出さまに、ま

くりかんぞうを取持て、かたし／＼の草履をはき、お七に門の戸をしめさせ、急心ばかりにゆかれし。お七戸をしめて歸りざまに、暮方里の子思ひやりて、下女に其手燭までとて面影をみしに、豊に臥ていと哀の増りける、心よく有しを其まゝおかせ給へと、下女のいへるを聞ぬ親してちかくよれば肌につけし兵部卿のかほり何とやらゆかしくて、笠を取除みればやごとなき脇親のしめやかに、髪もそゞりしをしばし見とれて、その人の年比におもひいだして、袖に手をさし入て見るに、淺黄はぶたへの下着、是はとところをとめしに、吉三郎殿なり。人のきくをもかまはず、こりや何としてかゝる御すがたぞと、しがみ付てなげきぬ。吉三郎もおもてみあはせ、物えいはざる事しばらくありて、我かくすがたをかへて、せめては君をかりそめに見る事ねがひ宵の憂思ひおぼしめしやられよと、はじめよりの事共を、つど／＼にかたりければ、兎角は是へ御入有て、其御うらみも聞きまいらせんと、手を引まいらすれども、宵よりの身のいたみ是非もなく哀なり。やう／＼下女と手をくみて車にかきのせて、つねの寢間に入れまいらせて、手のつゞくほどはさすりて、幾樂をあたへ、すこし笑ひ親うれしく、盃事して今宵は心に有程をかたりつくしなんとよろこぶ所へ、親父かへらせ給ふにぞ、かさねて愛めにあひぬ。衣桁のかけにかくしてさらぬ有さまにて、いよくおはつ様は親子も御まめかといへば、親父よろこびてひとりの姪なれば、とやかく氣遣せしに、重荷おろしたと、機嫌よく産着のもやうせんさく、萬祝で鶴龜松竹のすり箔はと申されけるに、おそからぬ御事、明日御心靜にと下女も口々に申せば、いや／＼かやうの事ははやきこそよけれど、木枕鼻紙をたゞみかけて、ひな形を切るゝこそうたてけれ、やうやう其程過て、色々たらしねせまして語たき事ながら、ふすま障子ひとへなれば、もれ行事をおそろしく、灯

の影に硯紙すずりかみ置いて、心の程を互に書て見せたり見たり、是をおもへば爲なのふすまとやいふべし。夜もすから書くどきて明かたの別れ、又もなき戀があまりて、さりとは物うき世や。

【語釋】 ○八つの鐘 午前二時。 ○面の戸 表戸。 ○嫉嫌 叔母様に同じ。 ○喜び 出産。誰がお産をしたのかは略してある。 ○若子様 男の兒。 ○出さま 出掛ける、そのついでに、 ○まくり 嬰兒にのみす胎毒下しの藥。海人草。これに甘草を加へて飲ますを常とす。 ○かたし／＼の草履 片々異つた草履。あわてゝかたちんばに穿いて行つたのである。 ○幕方里の子 幕方の里の子。幕方宿かりし里の子である。 ○其手燭待て 其手燭を持つてそのまゝに行くな、一寸待つてくれ。 ○豊かに「のびやかに」で、よく寝入つたさま。 ○心よく有りしを 心地よく寝てゐるのである。 ○兵部卿 匂袋に入れる香の配合に就いての名。「匂袋於其方也、有花世界兵部卿等之名、是亦鹿末香劑、各有輕重多少之差別、各量之而滾混合之、共盛絹囊」(雍州府誌六、土産門上)、 ○やごまなき 上品な。 ○しめやかに 物靜かに思ひ入りたるさま。 ○そゝけ 亂れたるさま。 ○その人年頃 その人の年頃。 ○是は 何かに心づきし躰。 ○おぼしめしやられよ 推量して下さいの意。 ○つどつど 流暢ならぬ口振りを云ふ。 ○手を組みて車に昇り乗せ 所謂手車に乗せたのである。 ○幾葉 いろ／＼の葉。 ○すこし笑ひ顔嬉しく すこしばかり笑ひ顔するとお七は嬉しく思ひの意。 ○さらぬ有様 「さらぬ」で、何事もなかつたやうな風での意。 ○重荷おろした すつかり安心した。 ○せんさく 産着の模様はどれがよからう、これがよからうと吟味し勘考するのである、 ○萬祝ひて云々 鶴龜松竹それ／＼にお目出度ひ模様だが、いつそ何もかも一しよにした模様にするの意。 ○すり箔 金銀の箔を摺りつくること。 ○おそからぬ事云々 明日になつてから、ゆつくり考へても遅くないの意。 ○木枕鼻紙を「木枕に鼻紙を」で、鼻紙をたゝんで、木枕をあてがつては雛形(模様の型)を切るのである。

○其程 時間的經過で、雛型を切つたその時間である。 ○たらす だます、すかすに同じ、早く寝るやうに誘ふのである。 ○語りたき事ながら お七と吉三郎は十分話しあひたい場合ではあるがの意。 ○鴛の襖 鴛鴦を描いた襖繪であるが、鴛は囀に通じ、この際無言のうき思を指してゐる。 ○書きくどく 「かきくどく」接頭語の「かき」と兩義に用ふ。 ○又もなき戀 類例のない戀である。遂げんとして遂げられぬ切ない戀心である。 ○さりとは 「ほんとうに、まあ」と云ふやうな意味合に用ひられてゐる。

【評釋】 眞夜中に表戸を叩く。「女と男の聲して」は言外に無意味がある。即ち、只事でない何かしら起つたのである。吉か凶かわからないが、一人でも事足るところを、女と男との入り交つた聲が、叩く戸の音と共に、表口の靜寂を破る。而して、叙述は直ちに「申し、姉様、只今御喜び遊ばしました」と疊みかけてゐる。出産の知らせ、やるせない喜びを一刻も早くとの知らせであつた。「女と思の聲して」には迫眞の響が宿ると思ふ。通知を受けた八百屋では此の日頃、待ちもうけた報告であつたであらう。「しかも若子様」の一句は成程「旦那様も御機嫌で」あらうし、八兵衛夫婦が飛び出したのに不思議はない。草履を片々に穿きながら、まくりを忘れないのは、さすがに年の功か。

さて、この夜半の叩き起しである。讀者は第二章の初めで、吉祥寺の門を驚かした柳原の米屋が死亡通知を思ひ出さずには措くまい。一は悲み、一は喜びと、そこに變化が見せてあるとは云ふものゝ、素材の手法は全然同一である。このところ何さか一技巧あつて欲しかつたと思ふ。

兩親が計らず外出する。その後が邂逅の段である。——これは前章で和尙たちが急に他行すると、その後にはあ

ひびきの段があるのと、展開の路も同じである。——しかし細部に亘つて異色のあるのは勿論である。

この段で肌付し兵部卿の香りに「何とやらゆかしく」感じたお七。笠とり除けてその優姿にしばし見とれたお七。而してその人の年頃を思ひ出だして袖に手をさし入れたお七。お七のこの態度所作は、宛然たる浮華輕佻の色娘たる本領を發揮してゐる。作者は、吉三郎を引出す手段として用ひたのには相違ないが、女主人公自らに即して省察すれば、あまりに彼女の胸には歡樂の鬼の跳躍が甚しい。叙述も感覺的要素の飽滿に墮してゐる。吉三郎であつたからよかつたものゝ、こゝには町家の娘らしからぬ様姿、娼婦化された風采が著しく漲つてゐる。

吉三郎とわかつてから、二人の中にもつれる纏綿たる情思と纏纏たる嬌態とは、そのまゝに享受する事ができる。お七が「何としてかゝる御姿ぞとしがみ付いて嘆」くのもよい。吉三郎が「せめては君をかりそめに見る事願ひ」と憂き思ひを、しばらくあつて口にするのは更によい。下女との手車には「狂言」の鈍太郎様の手車を聯想させない事もないが、そんな軽い気分はこゝにないから、眞率に肯定しよう。「手のつゞく程さすりて」は世話女房式ではあるが戀がさせる心中立であらう。「すこし笑ひ顔嬉しく」はこの際に於ける面白い表現である。この一句によつて、さきの手車はなくとも撫でさすりはなくとも、男の笑顔、今までの苦しみで物もえ云はなかつた男の笑顔に、それを眺めて心の底から温く解けそむる嬉しさを、むさぼるやうに味ふ女心は確實に攫まれてゐる。

親父が歸つて、折角の戀の甜美郷を破壊する行爲も、さうした意志がないだけ、諷刺味も強く興趣も深くあらはされてゐる。親父がいかに重荷をおろしたやうな気分。嬉しくてたまらないやうな態度。皆十分に寫されてゐる。お七や下女が氣をもむのをよそに、悠々と雛型を切るさまは、くつきりと浮き上つて映る。その後、親父の寢室

と障子一重のお七吉三郎が、明けゆく灯影に思ひのたけを、筆の命毛に託して、書いて見せたり見させたりする情景は、場面として誠に感興津々たるものである。それだけ、この場合の叙述は、あつさりし過ぎるやうに思ふ。一層、濃彩な筆觸で描く必要はなかつたらうか。こゝに本章掉尾の一齣として、より以上の詩情を要求したのである。かくして、この「又もなき戀が餘りて」の物うき世こゝろ戀心は、更に緊密にして熾烈な情念をば、われ／＼に迫つたであらう。

四、世に見をさめの櫻

それとはいはずに明暮女こゝろの墓なや、あふべきたよりもなければ、ある日風のはげしき夕暮に、日外寺へに行行く世間のさはぎを思ひ出して、又さもあらば吉三郎殿にあひ見る事の種とも成なんと、よしなき出来こゝろにして、悪事を思ひ立ちこそ因果なれ。すこしの烟立さわぎで、人々不思議と心懸見しに、お七が面影をあらはしける。これを尋しにつゝます有し通を語けるに、世の哀とぞなりにける。けふは神田のくづれ橋に耻をさらし、又は四谷芝の淺草日本橋に人こぞりてみるに惜まぬはなし。是を思ふに、かりにも人は悪事をせまじき物なり。天是をゆるし給はぬなり。此女思ひ込し事なれば、身のやつるゝ事なくて、毎日有し昔のこどく、黒髪を結せてうるはしき風情、惜や十七の春の花も散々に、ほととぎすまでも總鳴に卯月のはじめづかた、最期ぞとすゝめけるに、心中更にたがはず、夢幻の中ぞと一念に、佛國を願ひける心ざし、去連は痛しく、手向花とて咲おくれし櫻を一本もたせけるに打詠めて、世の哀春ふく風に名を残しおくれ櫻のけふ散し身はと、

吟しけるを、聞人一しほにいたはしく、其姿をみおくりけるに限ある命のうち、入相の鐘つく比、品かはりたる道芝の邊にして、其身はうき煙となりぬ。人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是にぞ有ける。それはきのふ、今朝みれば塵も灰もなくて、鈴の森松風ばかり残て、旅人も聞つたへて只是通らず、回向して其跡を弔ひける。されば其日の小袖郡内島のきれく迄も世の人拾もとめて、するくの物語の種ぞ思ひける。

【語釋】 それといはずに明暮 それと口へ出して云はないけれど明暮思ひつめてゐるの意。○葛なや 葛はあて字。はかない事よ。頼みない、しつかりせぬ心のさま。○日外 いつだつたか。さきの日に同じ。○にげ行く 「にげ行きし」とあるべきところ。○さもあらば さうであつたなら、即ち世間の騒ぐ事件(火事)があつたならば。○出来心 ちよつとした思ひつき。その場限りの考。○因果 元來佛語で、前世の業因が現世でそれんの結果を生ずると云ふのであるが、こゝはあましの所業の意。○人々不思議と 人々が、こんな所から火が出るとは思議に思つて。○有りし通り 有りのまゝに。かくすことなしに。○くづれ橋 「小あみ町より箱崎町へわたる橋なり。わけしらず」(江戸惣廻子名所大全)。○恥を晒し 晒物となつた意味であるが、事實ではないらしい。○思ひ込みし 覺悟してゐるの意。○ありし昔 家にゐた時分を云ふ。○花も散々に お七の年頃から花の散るに喩へ、一方季節をとり合せて、花ちる春も暮れてと云つたのである。○時鳥までも 總鳴に卯月の 啼いて血を吐くと云ふ時鳥までも總鳴に鳴く初夏の四月、お七の死をいたんで時鳥までも啼くと云ふ意を結ましてゐる。○始めずかた 「初めつかた」で、初めの頃。○心中更にたがはず すつかり、そのつもりである。覺悟の前での意。○夢幻の中ぞ 世の中はすべて夢幻と同様であると觀じて。○一念に佛國を願ひ 専ら彌陀の淨土に赴かん事を祈念す

る。○さりとは痛はしく 覺悟してゐるとは云へ、若い身空で刑死するがと思へば可哀さうで。○限りある命のうち 「限りある命のうちにて、刑につく前にの意である。○入相の鐘つく頃 夕べの鐘の音を聞きながらその頃の意。無常を告ぐる暮の鐘をこの世の別れに聞きながら、と云ふのである。○品かはりたる道芝 普通の死を「道芝の露となる」などと云ふ。この場合は刑死であるから、普通の道芝の露とは違ふ。それを「品かはりたる」と云つたのである。○うき煙 憂き煙。火刑を意味する。○何れの道にも煙は逃れず云々 人は皆茶毘の煙となつて、煙と化するのと同じであるが、これは火刑の煙であるので殊に可哀さうだ。○鈴の森 武蔵荏原郡。刑場ありし處。○回向。訪ひ弔ひする。元來は「廻己功德、施衆生(中略)故名廻向」(天台四教義)。○郡内編 甲斐國都留郡郡内地方より産する絹織物。○末々の物語 後々までの話柄。

【評釋】 この節の初めの部分は放火の場面で、説話展開上、極めて重要な、謂はゞ核心の一つを成すところであるが、甚しくあつさりと片付けてある。事實ボヤ程度のものであつて見れば、芝居するやうな緋鹿子の袖を亂して、櫓の太鼓を打つと云ふ凄艶はちと場所違ひでもあらうが、ボヤはボヤなりに今少し色彩があつてもよいと思ふ。それは場面としての構成に對する註文であるが、翻つてこの文句だけを見れば「少しの烟立さわぎで、人々不思議と心懸け見しにお七が面影をあらはしける」は、面白い垢抜けのした詞章である。少しの烟立ちと立ち騒ぎとをそのまゝに渡し込んで、火の手も上りかねたボヤのどさくさを現はし、集つた人々がどうしてこんな所に火の氣があつたらうと思ひ惑ふところを「不思議と心懸け見し」と叙し、そこへ隠れおほせぬ、むしろ少しぼんやりして了つてゐるお七が顔を出す。いかにもその場合の情景が、切實に寫されてゐる。それを包まず告白したので「世の哀れとぞなりにける」であるが、この世の哀云々は先き走りした感があると共に説明的に流れてもゐる。

次に「けふは神田のくづれ橋」とて晒し物にせられたやうな筆づかひをしてゐるが、これは事實であつたかどうかは疑はしい。江戸の噂を浪華で聞いて倉卒に書き下したまでであらう。「又は四つ谷云々」は引廻しらしいが、大ざつばな書き振りである。燻刑の附加刑として引廻しのあるのは當然ではあるが、引廻した上は刑場に到るので、この如く入牢させる事はあるまい。事件が前後したわけである。さうした當代の事情はともかくこゝで「芝の淺草」は妙な文句である。

それから人牢中のお七の全姿で、ここは覺悟きめた彼女の風格がしほらしくまた美しく描かれてゐる。女の身だしなみとしての日髪を結ぶ事が、實際許認せられるかどうかの穿鑿は別として、想像の上に浮ぶ鳥田鬘のいたましい姿を偲ぶだけでも、「惜や十七の春の花も散々に時鳥までも總鳴」の句を無條件で肯定したい氣になる。たゞさへ物思はする晩春初夏の候である。淡い愁と懶い惱とが絡みつく、甘く饜たやうな氣分の中で、周圍の人となつたうら若い戀の娘が、夢幻の世界と觀じて行ひすますいぢらしさに、「さりとは痛ましく」の感の起るのは當然すぎる程の當然である。

たゞ、世の哀れ云々の和歌は變な歌である。一體西鶴と和歌とが妙な配合であるが、「おくれ櫻のけふ散りし身は」語句をなさない。まあ、八百屋の娘の歌としては、かうもあらうかと思ゆるしておく。

入相の鐘ひゞく頃、うき煙となつたあたりも、わざとこの悲惨な場面の直寫を避けたのであらう。しかし、此邊の詞章には何となく悲哀の諧調が漂つてゐる。「それは昨日」と一轉した筆致も冴えてゐる。「今朝見れば」と受け、「鈴の森松風ばかり残りて」はしんみりとさせる。「さればその日の小袖」とて、焼けのこりの衣物を拾ひもとのるも、若くて逝きし情痴の女に對する世間の人情で、然るべき事象と思はれる。

この節で、猶、云ひおとしたくないのは教訓的口吻の發散である。「よしなき出來心にして悪事を思ひたつこそ因果なれ」は、その一。「是を思ふに人は悪事をせまじき物なり。天是をゆるし給はぬなり」は、その二。特に後者は露骨で、世人を一段の高所から見下した態度である。「せまじき」が「すまじき」である事は文法家に一任しても、かゝる道念の表現は、西鶴のこれ迄の文格と反照して殊に目立つのである。

また「惜しや十七」の年齢が、事實はともかく、この作品だけでは矛盾すると三田村鳶魚氏が指摘（史實より見たる歌舞伎芝居）してゐられる。それは類焼したのが「年も十六、花は上野の盛云々」であつて普請が出來て、歸宅の後の冬に吉三郎が雪の夜に忍んで來、刑はその翌春だから、吉祥寺への退轉からは足掛三年になる。故に「惜や十七」と云ふのは、そりや聞えませぬと云ふのである。成程、説話を迎れば三年目で正しく十八歳でなくてはならぬ。最も至極で、このところ西鶴のすばらしく見えるが、彼のすばらは「惜や十七」でなくして、その前の吉祥寺の馴れ染めの場の「私も十六になります」と云ふ叙述にある。類焼した年の暮が十六。明けて正月の十五夜には「私は十七になります」と云はせねばなるまい。そこで今度は「惜しや十八」と來れば算盤はびつたりする。しかし暮から正月までの事だ。まだ十七になつたやうな氣がしなくて、云ひ馴れた「十六でござります」を用ひたと見れば世話はない。揚足取りの事情依而如件。

近付ならぬ人さへ忌日／＼にしきみ、折立、此女をとひけるに、其契を込し若衆はいかにして最後を尋問さる

事の不思議と、諸人沙汰し侍る折節、吉三郎は此女にこゝちなやみて、前後を辨ず、憂世の限と見えて、便なく現のごとくなれば、人々の心得にて、此事をしらせなばよもや命も有べきか、つねく申せし言葉のすへ、身の取置まして最期の程を待居しに、おもへは人の命やと、首尾よしなに申なして、けふ明日の内には其人爰にましまして、思ふまゝなる御けんといひけるにぞ、一しほ心を取直し、あたへる薬を外になして、君よ戀し其人まだかと、そぞろ事いふほどこそあれ、しらすやけふははや三十五日と、吉三郎にはかくして其女弔ひける。それより四十九日の餅盛など、お七親類御寺に参りて、せめて其戀人を見せ給へと歎きぬ。様子を語て、又も哀を見給ふなれば、よし／＼其通にと道理を責ければ、石流人たる人なれば、此事聞ながらよもやなからへ給ふまじ、深くつゝみて病氣もつゝがなき身の、折節お七が申残せし事共をも語りなぐさめて、我子の形見にそれなりとも思ひはらしにと、卒塔婆書たてゝ手向の水も、泪にかはかぬ石こそ、なき人の妻かと、跡に残りし親の身、無常の習きて是逆の世や。

【語釋】 ○しきみ 橘枝を佛前に供するを常とする。葉より抹香を製する縁か。 ○とひけるに 形つたのに。 ○沙汰し 評判、噂する。 ○心地なやみて 思ひが昂じて病む。 ○便りすなく 頼みなく。癒えさうもないのである。 ○現の如く こゝは昏酔したやうなさま、ぼつとしてゐるのである。 ○よもや命も有べきか 「よもや命も有るまじ」である。 ○言葉の末 言葉の端々で知らるゝ如くである。 ○身の取置 一身上の處置。 ○待ち居しに 「待ち居る事なれば」である。 ○思へば人の命や 思へば一人の生命に關する事の意であらう。 ○首尾よしなに申しなし つじつまの合ふやうに話をうまく云ひこしらへての意。 ○其人 お七を指す。 ○御げん 御見參で、進み見ること。 ○そゞろ言 實のない言葉。さりさめのな

い事を云ふ。 ○よく／＼その通り お望み通りに逢はせましようが(お七の死んだ事は黙つてゐて貰ひたい)の意。 ○道理を責める 尤もた事を云ふ。道理至極な事を云ふのである。 ○人たる人 氏妻性の立派な人。 ○病氣癒なき身 病困である。 丁度病氣の一才良い時である。 ○卒塔婆 梵語stupa方墳、圓塚など譯す。こゝは勿論死者を埋葬したしとして立てた、上部を塔形にした細長い板木で、經文や、戒名を書きつけた供養の標榜である。 ○手向の水 死者の靈に供ふる水。爾伽、水向とも云ふ。 ○逆の世 親よりも娘がさきに死んだからである。

【評釋】 お七の死後に於ける吉三郎の様子を寫したのがこの一節である。若き死が世間の同情を集めたに拘らず、當の相手の若衆が顔を見せぬはどうしたものかと、巷の群雀が口喧ましく囁くのも世態の常である。

さて次にその折節とて、吉三郎の病臥と寺院の人々の心遣ひと、中陰すぎてお七の親類が訪問するのと、この三つの關り合ふ巴紋が提擲してあるが、こゝの叙述が極めて奔放不羈な筆致で、人困らせの文脈から出来上つてゐる。煩はしい餘計な事でもあるやうだけれどその部分だけを通釋風に解きほぐして見れば、こんなでもあらうか。明快に行かない點はおゆるしを願ひたい。

——知合でない人さへ命日ごとには橘を供へて此女の冥福を祈るのに、契りをこめた當の若衆は、どうして女の最後をも尋ね寄らないであらうか、それが不思議だと、世間の人いろいろと噂をし合つたが、丁度その時、吉三郎はお七戀しさに病みついて、前後不覺の體で此世も限りらしく、助かる望もなく昏々としてゐる状態であつたから、附添の人々が氣をつけて、もしお七刑死の事を今話したなら、とても吉三郎の命はあるまい、殊に吉三郎の常々の言葉の端からでも分る如く、一身の處置までして死を覺悟してゐるのだから、うつかりした事は云へない、考

へれば一人の生命に關する事だからと、うまく辻褃の合ふやう話を取繕つて、けふ明日の内にはお七様が此處へ來られて思ふやうに御逢ひになる事ができますると、云ひ聞かしたので、吉三郎はぐつゝ氣力を取直し、與へる薬はよそにして、あの人が戀しい、お七はまだ來ないかと、とりとめのない事を云つてゐたその時は、もうお七の三十五日に當ると云ふので、附添の者は吉三郎に内しよで墓詣をした事であつた。それから四十九日の忌明けの餅配などして、お七の親類の者が御寺にお参りしたが、せめてお七の戀人に逢はせて下さいと申入れた。そこで寺僧は吉三郎の容體を話して、「お七様の事を云ひ出せば又悲しい目を御覽なさらなければなりませんから、お望み通り逢はせは致しませうが、お七様の死なれた事は内密で」尤もな申分であつたから、お七の親類も「流石に氏素性の立派な方だから、お七の死を聞きながら、よもや長らへては居なさるまい」とて、すつかり其事は隠して、折柄吉三郎も病臥であつたので、お七の豫て云つてゐた事どもをあれこれと話し慰めて辭し去つた。さて、我娘の形見にそれだけでも立てたい、さうすれば、それで氣がすむからとて、卒都婆を書いて墓前に立て、手向の水を漉いだが、それと共におつる涙のために乾く間もない墓石、これ一つが亡き娘の變りはてた姿かと思ふと、跡に残つた親の身にして見れば、老少不定は世の常とは云へ、逆まな事柄で、悲嘆の遣り所もない次第である。

右の内「様子語りて又も哀れを見給ふなれば」の「様子語りて」を、お七の死を話す事にも取れさうであるが、これは前記の如く、寺僧が吉三郎の病狀、心持をお七の親族に話し、さて「又も哀れを云々」と云つたものと見る。「流石人たる人なれば」の上は、お七の親族曰く（又は思へらく）で、「長らへ給ふまじ、と深く包みて」云々といふ。

「折節申し残せし事」の折節は上から「恙なき身の折節」で切る。それから残すは筆が逸したので申せし事だけでよい。お七の死を隠してゐるのであるから残すの語は不穩當である。「語りなくさめて」の下には、「立ちぬ」とか何とか、坐を立ち去つた文辭があつて句切りせねばならないところである。それから卒都婆を立てる事にせねばならぬ。

ある刊本に「又も哀れを」から「思ひはらしに」までを、一體にコーテーションシヨシがつけてあつたが、それは甚しい。それでは何の事か意味が取れない。

さて、解きほぐして見れば、吉三郎の戀に細つた窠れ姿も、寺僧の心遣ひも、またお七の親類の心持も、それぐに蕭めやかな氣分の下に、享け入れる事ができる、たゞあまりに破格な文章が、この内容をば霧を距てたやうな、頼りない感觸をそよるのである。

この第四章は云ふまでもなく話の絶頂を示してゐる。章をこゝに二分したその前段が、正しくそれに當る。放火から刑死と、深刻にして悲痛な場面の展開である。しかしその深刻も悲痛も、あまり切實に響いて來ないのはどうしたものであらう。現實に即しながら露骨に曝し出す事なく、印象的筆致の下に隱約の衣を以て蔽つたからである。世相の波に漂ふ生の女を點出しながら、詩情の漲る浪漫的風韻を多分に撒きちらしたからである、それがために深刻悲痛たるべくして、空虚漂渺たる夢幻美を搖曳するの結果を生じたのである。

それに對して後半の吉三郎は、この夢幻味が極めて稀薄になつてゐる。世態人情のあやが事件と人物を纏つてそれぐに浮動してゐる。章全般から觀れば、色彩を異にする二つの布が、調和を破る事なく、纏き合された小袖の

やうな趣を示すのである。

五、様子あつての俄坊主

命程頼みすくなくて、又つれなき物はなし。中々死ぬればうらみも戀もなかりしに、百ヶ日に當る日枕始てあがり、杖竹を便に寺中靜に初立しけるに、卒塔婆の新しきに心を付けてみしに、其人の名に驚て、さりとてはしらぬ事ながら、人はそれとはいはじ、おくれたるやうに取沙汰も口惜と、腰の物に手を掛しに法師取りつき、さまざまとどめて、逆も死すべき命ならば、年月語りし人に暇乞をもして、長老さまにも其斷を立て最後を極め給へかし、子細はそなたの兄弟、契約の御かたより、當寺へ預置給へば、其御手前への難儀、彼是覺しめし合られ、此うへながら憂名の立ざるやうにといさめしに、此斷至極して自害おもひとまりて、兎角は世にながらへる心さしにはあらず、其後長老へ角と申せば、おどろかせ給ひて、其身は念比に契約の人、わりなく愚僧をたのまれ、預りおきしに、其人今は松前に罷て、此秋の比は必爰にまかるのよしくれく、此程も申越れしに、それよりうちに申事もあらば、さしあたつての迷惑我ぞかし。兄弟かへられてのうへに、其身はいかやうともなりぬべき事こそあれと、色々異見あそばしければ、日比の御恩思ひ合せて、何か仰はもれじと御請申あげしに、なを心もとなく覺しめされては、物を取てあまたの番を添られしに、是非なくつねなるへやに入りて人々に話しは、さてもくわが身ながら世上のそしりも無念なり、いまだ若衆を立てし身の、よしなき人のうき情にもだしがたくて、剩其人の難儀、此身のかなしさ、衆道の神も佛も我を見捨給ひしと感涙を流し、

殊更兄弟の人歸られての首尾、身の立べきにあらず、それより内に最後念たし、され共舌喰切首しめるなど世の聞へも手ぬるし、情に一腰かし給へ、なにながらへて甲斐なしと、泪にかたるにぞ、座中袖をしぼりてふかく哀みける。

【語釋】

様子あつて さうなるべき理由があつての意。 ○命程云々 人の命ほど頼みにならぬもの、即ち生き長らへたいと思ふのに死ぬ事もあり、「つれない」は死んで了ひたいのに拘らず生き長らへる事を指してゐる。 ○中々 却つて。 ○初立 初めて立つ。 病後始めて歩くこと。 ○其人の名 お七の戒名。 ○それとは言はじ われが病氣のために知らなかつたとは世間が云ふまい。 ○後れたるやう 臆病か無情かで知らぬ顔してゐるの意。 ○取沙汰 世間の噂評判。 ○腰の物 脇差。 ○年月語りし人 念者、吉三郎が衆道の契ある男。 ○斷りを立て 許可を得る。 ○兄弟 念者としての兄弟。 ○難儀 迷惑。 ○覺しめし合はされ いろくま熟考する。 ○憂き名 悪い評判。 ○此斷り 此の諫言、訓戒。 ○わりなく「理りなく」で、無理に、たつて頼むのである。 ○松前 北海道渡島國福山。松前氏の居城ありし所。 ○それより内に申す事もあらば 歸つて来る以前に、お前の身體にもしもの事があつたならの意。 ○迷惑我ぞかし 迷惑するはおれだ。 ○何か仰せ洩れじ 何でも仰せ通りに致します。 ○心もとなく 不安心に、長老がである。 ○物を取りて 及物を取りあげる。 ○よしなき人 何でもない人。お七。 ○其人 お七。 ○衆道の神 さう云ふ神佛はないが、文珠でも指したのであらうか。 ○首尾 こゝは談合の結果、兩人の間に生ずる心持である。 ○身の立つ 男としての義理、矜持を保つこと。 ○それより内 歸つて來ぬ先き。 ○世の聞え 世間への名聞である。 ○手ぬるし 情弱らしい。勇ましくない。 ○一腰 刀劍。

【評釋】

初めの段で、病床を離れた吉三郎が境内のそとろ歩きで、偶然お七の墓所を發見してさてはと思ふところ

は、そのまゝに肯定される。たゞ『假名草子』以来の常套的手法であるために型にはまつた感は否認できない。而して留男の役割を演ずる法師ばらのその留め方を、龍陽分桃の理由に歸した點は、當代寺院に於ける一面たると共に、作者が常に振り舞はず特殊興味でもある。

かゝる世界から生み出された一種の義理が、其處に介在してゐた事は、鎌倉以後の稚兒物語、當代の衆道小説によつて十分に窺知し得られる。即ち殊にこの環境に住む人々にはある道義的觀念が働いてゐる。第三者觀にはこの不倫悖徳の行爲に、何の道念が要求され得ようかと思惟されるけれど、當面の人にとつては極めて眞剣であり切實であつたさう考へてこそ初めてこの場合に於ける長老の態度も寺僧の行動も認容する事ができるのである。

わけて、長老の言葉は松前にゐる男への義理であり、しかもその義理にはかなり利己主義的な色彩が濃厚である。吉三郎の生死に對する介意は絶對的のものでなく、松前の男の歸る以前に死んでくれば大變だと云ふのである。「われさし當つての迷惑」云ひ、「兄分かへられての上に云々」と語る、すべてが明らかさまな自己本位の言葉である。

しかし、吉三郎の氣色は穩でなかつた。長老が不安に思つた通り、「身の立つべきにあらず」として依然自殺の念に驅られてゐる。その原因は念者の道を踏み違へて、「よしなき人のうき情け」に心を奪はれたに據る、と云ふのだから驚かせる。即ち女道を生ぬるしとして念友と口にするにも肩肘いからしたと云ふ、寛永以来の意氣込だから凄まじい。それなら、あるかなきかのとげを抜いてくれた柔い指先は、何故に握つたか。雪降る冬の夜を凍えるまでの思ひをして何故に忍んだか。これも身勝手な言で、「衆道の神も佛も我を見すて給ひし」の述懐も、要するに

寺の坊主たちを前にしての、一種の附景氣としかわれ／＼には映つて來ない。思ふにこの念友問題はなくもがなでお七が灼熱の戀に一抹の陰影を投ずるものとして省略したい。單にこの作者の興味である事を繰返しておく。「事實問題として、和尚の嫉妬が吉三郎とお七の仲を距て、それがために放火事件となつたとの解釋には此際は觸れない事とする。たゞ作品として眺めた時、衆道問題は疣贅の感が深いと云ひたいのである」。

此事お七親より聞つて、御歎尤とは存ながら、最後の時分くれ／＼申置けるは、吉三郎殿まことの情ならば、うき世捨させ給ひ、いかなる出家にもなり給ひて、かくなり行跡をとせ給ひなば、いかばかり忘れ置まじき、二世迄の縁は朽まじと申し置きしと、様々申せ共、中々吉三郎聞分ず、いよく思ひ極て舌喰切色めの時、母親耳ちかく寄てしばし小語申されしは何事にか有哉らん、吉三郎うなづきて兎も角もといへり。其後兄弟の人も立歸り、至極の異見申盡て、出家と成ぬ。此前髪のあるあはれ、坊主も剃刀なげ捨、盛なる時花に時のまの嵐のごとくおもひくらぶれば、命は有ながらお七最後よりはなを哀なり。古今の美僧、是をおしまぬはなし。惣して戀の出家まことあり、吉三郎兄分なる人も古里松前にかへり、墨染の袖とはなりけるとや。さても／＼取集たる戀や哀や、無常なり夢なり現なり。

【語釋】 ○此事お七親 此事をお七の親。 ○最後の時分 お七が臨終の時。 ○跡をとせ給ひなば 死後の冥福を祈つて下さるならば。 ○いかばかり忘れおくまじき どれだけ有り難く身に泌みて思ふ事せう。 ○二世までの縁 夫婦は元來一世の契であるが、二世までも變らないやうに添ひ遂げると云ふのである。 ○色め 決心の色が面にあらはれる。 ○こもかくも

ともかくも任せるの意。○至極の意見 道理至極の意見。○前髪のちる哀れ 若衆髷の前髪を剃りおとす哀れまで、花の散るに喩へたのである。○お七最後 お七の最後。○古今の美僧、是を惜まぬはなし 古今に稀れなる美僧で、その姿を見る人は、僧形でこれだけだから、若衆髷姿であつたらどんなであらうと、これを惜まぬはなかつたこの意である。○戀の出家 まことあり 戀の出家はまことあり。○黒染の袖 縮衣。坊主の法衣。

【評釋】 結びの段である。お七の母親が叫いたのは何であつたか。青道心になつた結果はあるものゝ、それを決心させる有力な理由は、行文だけでは類推の餘裕も幽韻も認められない。實際「何事にかあるらむ」で、狐を馬に乗せたやうな書振である。

兄分の歸りを待つやうにとならば今更に何事かと云ひたくなる。とにかく兄分が歸つて黒髪ごぞと剃りこぼつ事となつた。坊主も剃刀を投げたのはさもあらう。盛りの花が時の間に散るよりも哀れだとある。それもよい。しかし燐刑にうら若い娘盛を棄て果てたお七より、猶哀れとは例の誇張としか受けとれない。語句としては「此前髪の散る哀」の下で、「嵐の如く思ひ」から「思ひくらぶれば」とて、お七の死と比較する語句の渡し込みはいつもの筆法ながら面白く、「惣じて戀の出家まことあり」には味ふべき風情を見せ、最後の「さてもく」取集めたる戀や哀れや、無常なり夢なり現なり」の一聯には、哀韻爛々として人の肺腑に迫る悲惻の諧調がこもつてゐる。第四篇、お七の悲曲全體の批判と事實の考證とはこれを次に譲る。

お七の事蹟に關しては「天和笑委集」や「江都著聞集」(馬場文耕著)にその實歴なるものが詳しく出てゐる。これらに據れば天和元年丸山本妙寺の火事に遠因があり、八百屋一家の身を寄せたのは吉祥寺でなくて小石川の圓乗寺である。(もし西鶴の筆の如く十二月の火事なら、天和二年駒込大圓寺が火元の事件でなくてはならぬ事は本文冒頭の語釋で指摘した通りであるが)。またお七の戀人は吉三郎と云はず山田左兵衛と云ふ寺小姓であり、吉三郎とは吉祥寺門前に住む無頼漢で、お七の戀を知つて屢々強請し、且放火教唆の罪も彼にあると云ふ。併し「江都著聞集」なども果して正確な記録であるかどうかは頗る疑はしい。この事件に就ては三田村鳶魚氏の「史實より觀た歌舞伎芝居」の中に詳しい考證がある。これによればお七の刑死は天和三年三月二十九日であり、戀が芽ぐんでから三年目數へ年の十八歳、法名を秋月妙榮禪定尼と云つて、小唄にあるやうに法華宗ではない。且、相手の男は出家して諸國遍歴の後、七十の高齡で入寂した。西運上人がそれであると云ふ。

穿鑿はともかく、大體の筋に大差はなく、巷談に近い事實であつたに相違ない。しかし後年の記録には、法廷に於ける年齢問題とか奉納の扁額とか、後人の想像と附會とに傳説化された形跡が著しいので、却つて「五人女」の記事に事實らしい點が多く認められる。思ふに西鶴の「五人女」は事件から僅か三年しか距つてゐない。江戸の事件を上方の彼が筆にするまでには何等かの材料がなくてはならぬ。即ち巷談からの風聞や、その頃の「よみうり」とか繪草紙とかに據つたものか、所詮、お七事件の文藝に現はれたものとしては最初の作であつた。

同一題材の作品を辿ると、寶永の頃、本芝三丁目の清水治兵衛刊行の小唄集の中に「小姓吉三、八百屋お七」と角書した「さいもん」がある。

はらひきよめ奉る。ふえによるねのあきの鹿、つまゆゑ身をばこがす也。五人女の三のふで、色もかはらぬえど櫻、さかりの花をさらしたる、やをやのむすめお七こそ、戀路の闇のくらがり、よしなきことをし出して……」

と書き出してあるので、貞享三年後のものと知れる。而して紀海音が淨瑠璃「八百屋お七歌祭文」には、この「さいもん」の文意を掬んだ箇所があるので、「さいもん」が海音の淨瑠璃執筆の寶永元年以前の作なることが推測される。即ちお七事件の文藝化の第二作は此の元祿年間の「さいもん」である。

次には「お七戀のくえくわ」と題する祭文で、その末段に「とふも語るも一言」とある。お七歿後の十年目、即ち元祿五年の作と確定する事はできないが、これも元祿年間の作とするに憚らない。

かくして、事件後の二十二年目、寶永元年には海音の名作が出たのである。西鶴の小説とこの淨瑠璃の比較は興味あるものと思ふが、こゝには觸れないで置く。

淨瑠璃の方面では享保十七年に「八百屋お七戀緋櫻」と云ふのがあるが、これは海音の作を外題がへしたものにすぎない。この外には延享元年四月に爲永太郎兵衛・淺田一鳥の「潤色江戸紫」。安永二年、菅專助の「伊達娘戀緋鹿子」及び安永八年十月同人の作「今盛戀緋櫻」がある。猶、宮古路豊後の正本で、年代未詳の「四時花双娘」では、八百屋久兵衛の娘にお市お七の二人があつて脚色上別趣を呈してゐる。且お市丈助の情死が主となつてお七はむしろ客體を演じてゐる。

歌舞伎の方面では、柳亭種彦の「還魂紙料」上巻に、

かぶきの事を書く(冊子)に、寶永五年の春、堺町中村座にて嵐會我と題する狂言に嵐喜代三郎と云ふ女方阿七の役をつとむ。是阿七がことをかぶきになすのはじめなり。かの喜代三郎が紋丸の内に封じ文なるゆゑ、今において阿七の狂言に此紋をつくる。寶永五年は阿七が二十七回忌なり云々
この名題は「中將姫京雛」と云ふ四番續で、作者は中村清五郎であつた追善彼岸櫻とは追加された一幕で、この年死んだ中村七三郎の追悼の狂言である。

「還魂紙料」には寶永五年春(三月である)の中村座狂言をお七劇の最初としてゐるが、これより前寶永三年正月大阪嵐三右衛門座で吾妻三八の作「お七歌祭文」を演じて居り、翌四年には江戸に下つて中村座で興行した。嵐喜代三郎がお七に扮し且その定紋が後世に範を垂れたのはこの時である。
その他は、年代と外題だけを掲げるに留める。

元文三年 春	寶會我女護島臺	作者 津打治兵衛	中村座
明和三年 秋	八百屋お七戀江戸染	—	中村座
安永二年 春	江戸春名所會我	金井三笑	市村座
文化六年 三月	其往昔戀江戸染	櫻田治助	森田座
安政三年 十一月	松竹梅雪曙	河竹默阿彌	市村座
明治二年 七月	吉様參由緒音信	同人	中村座

春狂言に會我物を出すのは江戸の芝居の吉例でこれをお七劇に絡ましたのである。

更に近世小説の方面では

青本 安永元年 八百屋お七戀藤巴、三
 八百屋お七江戸紫、三 鳥居清滿
 黄表紙 安永六年 八百屋お七戀櫻操芝居、三 鳥居清經
 享和三年 伽羅操 狂言、三 榮色堂色二、長喜齋
 合卷 文化六年 松梅竹取物語、一五 山東京傳作、國貞齋
 文化十三年 同八百屋娘姉妹、六 綠亭可山作、美丸齋
 天保五年 昔模様娘評判記、六 山東京山作、國貞齋
 (その初篇はお七)
 人情本 慶應二年 吉三七花 曆 封文、一二 朧月亭主人作、芳虎、國周齋

猶、謠物の方面では常盤津の「難對夢白酒」、富本の「封文戀書置」、坪内逍遙博士の振事劇「お七吉三」等、いろ／＼を挙げなければなるまい。戯曲小説類にも、幾多の作品がある筈と思ふが、こゝには單に参考までに列記したにすぎぬ。

好色五人女 卷五

さつまに 戀の山源五兵衛物語

目 録

- 一、つれ吹の笛竹息のあはれや
さつまにかくれなき當世男有
- 二、もろきは命の鳥さし
床はむかし成若衆有
- 三、衆道は兩の手に散花
中刺はいたづら女有
- 四、情はあちらこちらがちがひ
同じ色なからひぢりめんふたの物有
- 五、金銀も持あまつてめいわく
三頁八十の鐘あつかる男有

西鶴(五人女)評釋